Hans Staden 著
西原 亨 訳

蛮界抑留記

―原始ブラジル漂流記録―

蛮界抑留記

—原始ブラジル漂流記録—

Hans Staden 著
西原　亨 訳

東京・帝国書院

ハンスターデン独逸文化協会
会長　ハミルカル博士の書簡

São Paulo, 23 de março de 1959.
A./Sp.

Ilmo. Sr.
Toru Nishihara
rua Aurora, 27
Capital

Prezado Senhor.

A diretoria do instituto Hans Staden tem a grata satisfação de confirmar pela presente os entendimentos verbais havidos entre V. Sa. e nosso colaborador, Sr. Hemult Andra, referente ao seu propósito de traduzir para o idioma japonês o relato de Hans Staden sôbre as suas viagens ao Brasil quinhentista, baseando-se na edição dêste Instituto, intitulado "Duas viagens ao Brasil".

Após as consultas necessárias a Da. Guiomar de Carvalho Franco e ao Sr. Dr. Carlos Fougquet, a êste como tradutor da obra de Staden do alemão medieval para o moderno e áquela como tradutora do texto para o vernáculo, praz-nos comunicar a V. Sa. que tanto o Instituto como os demais interessados, acima citados veem com muita simpatia a iniciativa de V. Sa., desejando-lhe o mais completo exito para o empreendimento tão meritório de pôr ao alcance dos cultores da lingua japonesa a mais antiga publicação sôbre o Brasil. (後略)

Atenciosamente
Instituto Hans Staden

Hamilcar Turelli

Dr. Hamilcar Turelli
Presidente

Dr. Hamilcar Turelli
Presidente

まえがき

訳者近影

まず最初に、何がゆえに私が本書の翻訳を思い立ったかということを、読者の皆さんに知ってもらいたいと思う。それは一昨年の半ばごろのことであったが、在サンパウロ日本文化協会の会報編集部に依頼されて、この世界各国人種のるつぼと称されるブラジルにおける人たちの文化的活躍ぶりを調査することになった。

だが、こんなむずかしいことは、私のガラにもないことだと思ったので、お断わりしようと思った。しかし途中でよく考えてみると、これは、ひょっとすると案外おもしろいかも知れないぞ、と思いかえされて、最初に数の多いイタリー人から調査を始めてみることにした。始めてみると、なかなかおもしろかったので、大いに気をよくして、つぎにドイツ人の調査にとりかかった。持ちまえのシンゾーで、ドイツの総領事館に押しかけて行き、ドイツ総領事にお目にかかり、約三十分間ほど種々話し合った後に、彼の紹介状をもらって有名なドイツ文化協会に行った。その時に、総務のアンドレー氏に会った。そして、同氏より一冊の本をもらった。ところでこの本は、一風変わった書物であった。ブラジル語の本ではあるが、原著は現今より約四〇〇年前に、ドイツの一青年

探検家によって執筆されたものであることが判明した。したがって、原著は、ドイツ古体文で書かれていたので現代のドイツ人には解読できないほどむずかしいものであった。それを有名なドイツ文学者のカルロス・フッケ氏が現代ドイツ語に書き改めた。その新刊書を、またブラジル語に訳されたのがこの本で、訳者は、ほかならぬギオマール・デ・カルバーリヨ・フランコ女史である。彼女は実に語学の天才で、ドイツ語のほか、英・仏・西等々五か国語を完全にあやつるという才女であり、また著書にも時々筆を入れられており、長らくサンパウロ法大で教べんを執られた有名な史学者であるフランシスコ・デ・アシース・カルバーリヨ・フランコ教授の令妹にあたる人である。このまことに三段がまえのややこしい本を、せっかくもらったのであるから、少しぐらいは読んでおかぬことには、今度また、どこかでアンドレー氏に会った時に都合が悪いと思ったので、私は暇をみては読んでみた。すると、意外にも、実におもしろいのである。さて約一か月ほど後のことであった。また所用があって、ドイツ文協に出かけて行った私は、また大いに感心させられた。それは、この書物が一五〇〇年にブラジルが発見されてからこの方、ヨーロッパで、ブラジルについて、一冊の書物として発行された文字通り最初のものであることが判明したからである。いわば、例の有名なマルコ・ポーロ東方見聞記のブラジル版というわけであった。

しかも、この本は、すでに英・仏・西・ラテン語等々十数か国語に訳されており、六十二種類にもおよんで、大少の出版物が刊行されていることがわかった。いよいよ私は、心中翻訳の価値あり！　と決心したのであった。が実は、このほかにもう一つ決意した理由があった。それは、どういうわけか私にもわからないが、幼少のころからドイツ人並びにドイツという国を内心尊敬していたので、私のささやかな努力によって、この本が日本で発刊されることになれば、私の二〇数年にわたって居住している養い国のブラジルと、ドイツと、私の生国である日本との三国の文化交流に役立つことになり、私の文化面におけるドン慾性を満足させることができると、こんなように考えたわけである。

本書の発刊に当たり帝国書院の佐藤温氏、現在日本に留学中の友人富松末男君、並びにドイツ文協のアンドレー氏、私の二〇年来の先輩であり、文学面の良き指導者である武本由夫氏に、原稿の整理から、出版者への紹介などと、伺から何まで、たいへんにお世話になった。また、自他共に許す、コロニヤの文化面におけるリーダーである山本博士、ブラジルの動物地理学会における権威であるアジエノール博士、伯国詩壇の帝王と称されるのみならず、ブラジル各学界の元老であるギレルメ・デ・アルメイダ氏、駐伯ドイツ大使閣下、ハンスターデン文化協会会長ハミカルトレーリ氏等々の諸名士から一文を賜わったことは、不肖望外の名誉と思い、感謝の

ほかはない。あらためてこれらの諸氏に対し、私は衷心より、お礼を申し上げる次第である。

西　原　亨　識　す

序

本書は約四百年前にきかのぼるハンスターデンの生きた記録と歴史である。

このたび、わが文化協会の理事として、また有名なハンスターデン研究家として知られているカルロス・フッケ教授によって、現代ドイツ語に新訳されたこの書物が、日ごろより尊敬しているニシハラ・トオル氏、並びに帝国書院の好意により、日本語版として発刊されることはまことに喜びに堪えない。

私は、親愛なる日本の方々が、本書をお読みになられて、約四十万人の勤勉にして誠実なる日本人同胞が活躍しておられるこのブラジルに対し、より一層の理解と親愛感を抱かれるものと信じて疑わないものである。

ハンスターデン・ドイツ文化協会会長
ハミルカル　トレーリ

序

日本とブラジル、地球の正反対の位置にある両国がお互いに理想と現実とを融合せんとして、努力している。政治という魔ものにひきずられて、一は急進的な発展に、他は超スピーデイな膨脹政策にと、お互いに懸命になっている。この時に当たって、その等距離にそって、両国の理想の波を、そのアンテナにキャッチすべく、すっくと立ち上がったのが、青年、トール、ニシハラだ！

ニシハラは、二十数年にわたってわが国のまん中に住んでいるから、われわれブラジル人の生活と精神面の最大の理解者だ。だから同胞の日本人の方々に、このブラジルが発見された当初の十五世紀の生きた歴史を知ってもらうために、ニシハラが、若き青年ドイツ人探検家のハンスターデンの記録を特選し、翻訳刊行されたことは、まことに敬服のほかはない。

わが国の開拓当初の有様を如実に知るには、これほど適切な書物はないであろう。有名なペロ・バーヅの書簡集や、ジュヅイタ僧の土人教化運動等々に比し、一外国人であるドイツ青年の記録物語を選んだのは、さすがに、ニシハラでなければできぬことだ。

約十か月間にわたり、獰猛きわまりなき食人種のトピナンバー族の間に捕虜となり、九死に一生を得て脱出した、スリ

ルと恐怖の体験記、これがハンスターデン蛮界抑留記である。
われわれブラジルの文化人たちは、あげて本書の発刊を喜ぶ。われわれブラジルと日本との関係は、はや半世記にわたらんとしている。だが、その文化面における交流は、いとも貧しきものではあるまいか？
この時に当たり、本書の果たす役目は、重且つ大なるものがあると信ずる。
筆をおくに当たって、訳者に対して、絶大なる賛辞を贈らせていただく。

元日伯文化普及会会長
伯国文学アカデミー名誉会員
ギレルメ・デ・アルメイダ

序

西暦一五〇〇年、ポルトガルのペードロ・アルバレス・カブラール提督によって、このブラジルが発見された。その当初のポルトガル植民者たちの苦闘の有様と、あわせてドイツの若き探検家の血のにじむような、生々しい体験談、ハンスターデン蛮界抑留記が、このたび、わが名誉ある地理学会員のトール・ニシハラによって、ブラジルの裏がわにある遠い日本で刊行されることを聞き、私はうれしくてたまらないのである。この書物は、日伯文化交流のため絶大の貢献をなすものであろう。

ドイツの若き砲術師ハンスターデンが、食人種トピナンバーに捕われの身となっている時の、偽らざる生活の記録が、いかにもドイツ人らしく、たんたんと、きわめて正確に書かれている。

本書を読まれる日本人の方々には、こんこんとして尽きざる興味をよぶことであろう。なぜなれば、この抑留記は単なる興味だけではなく、後世のブラジル著名の学者たちによって、彼の記録が全く正確なものであることが実証されたからである。

私は、本書発刊に当たり、お祝いの辞を述べさせていただくことに、大きな誇りを感んずるとともに、博学にして賢明

なるトール・ニシハラの前途を祝福するものである。

ブラジル地理学会長
アジエノール　コウト　デ　マガリヤンエス

畏友西原亨さんが
ハンスターデン蛮界抑留記を刊行されると聞いて

西原亨さんは、幼にしてご家族の方々と一しょにブラジルに渡り、土に親しむ境がいにおかれたが、向学の志やみがたく、サンパウロ市に出られて日系小学校の課程を終えたのに満足せず、早稲田中学講議録での中学卒業後、なほ進んで大学高等程度の私塾に通われて研学の一途をはげみ、かたわら日本書道・柔道・剣道の修得まで人間修業に精魂をかたむけられた。

ブラジル文化教養を身につけるさえ容易ではない日本移民者の子弟が、たゆまず日本的教養の向上を拾てないで来られた意欲には敬服のほかはない。

その努力が実を結んで、西原さんは、現在ブラジル地理学

協会会員中唯一の日系人として、昨年は伯国聯邦政府公認の文化勲章、ロンドン元帥賞を同会から授けられる名誉をになわれた。

目下の生計は印刷業によって立てられている。西原さんの職業としてまことにうってつけのものである。しかもまだ熱心に英語の習得につとめられ、サンパウロ文化協会の文化面の活動に努力を惜しむところがない。まことにブラジル日系コロニヤの異色の方である。

今度忙しい生活の余暇をぬすんで物されたハンスターデン蛮界抑留記が刊行の運びとなったと聞いて、私は喜びかつ敬服の念を新たにしている。

この著書が広く読まれることを祈念するとともに、著者の労に感謝し、あわせて今後のご成長に期待するものである。

サンパウロ日伯文化普及会会長

農学博士　山本喜誉司

目　次

まえがき・序文　4

第一部　漂　流　18

著者のことば
序　言

第一　章　25
第二　章　ポルトガルのリスボンより出発　27
第三　章　ペルナンブッコ土人の襲撃　32
第四　章　土人の要塞　34
第五　章　ペルナンブッコ出航　38
第六　章　スペインより再びブラジルへ　42
第七　章　ついに南米に到着　44
第八　章　サンタカタリーナ港へ　47
第九　章　探検隊上陸、岩礁の上に十字架を発見する・
第十　章　土人たちとともに本船へ　52
第十一章　轟然母船大破す……　54
第十二章　勇躍サン・ビセンテ出発　56
第十三章　難破せるところ…・　60

第十四章　サン・ビゼンテ村…　62
第十五章　食人種トピナンバーの襲撃　63
第十六章　荒廃したベルチオーガ　65
第十七章　トピニンキンの恐怖……　69
第十八章　ハンスターデン、土人の捕虜となる　71
第十九章　ああ、ついに万事休す……　74
第二十章　トピナンバーに連行さる・　77
第二十一章　土人部落での最初の日　78
第二十二章　プレゼントとして引き渡さる　81
第二十三章　マラカーを囲んで踊る女たち　84
第二十四章　イビルー・グアスーに連行さる・　85
第二十五章　復讐の一念…・　87
第二十六章　フランス人の悪知恵…　89
第二十七章　死ぬばかりに苦しい歯痛…・　91
第二十八章　クニャンベーバ大酋長と面接・　92
第二十九章　トピニンキンの襲来…　99
第三十章　月下に集まる酋長会議・　102
第三十一章　マンブカーバ部落全焼す　104
第三十二章　ポルトガル船来たる…・　106
第三十三章　悪疫の流行・　107
第三十四章　病んで部落に帰るニヤエペポー　109
第三十五章　再びフランス船来たる……　112
第三十六章　人肉を食う土人たち…・

第三十七章　奴隷を食った土人……　１２０
第三十八章　はるかかなたにポルトガル船見ゆ…
第三十九章　捕虜のカリジョー土人ついに屠殺さる・
第四十章　フランス船再び来たる　１３２
第四十一章　トピナンバーの出動
第四十二章　捕虜を食う土人たち…・　１３９
第四十三章　捕虜を囲んで踊る土人たち……
第四十四章　まだいたフランス船……　１４５
第四十五章　ポルトガル大尉の子ついに殺さる
第四十六章　キリストの奇跡・
第四十七章　キリストの奇跡再び……　１５０
第四十八章　逃亡したディオゴー兄弟
第四十九章　贈り物にされたスターデン……・
第五十章　フランス船マリエ・ベルエテー号の出発１５５
第五十一章　ついにフランス船に救わる……
第五十二章　一路なつかしの祖国へ……　１６１
第五十三章　デイッペにてベレテー号船長宅に招かる
捕虜期間中のわたしの祈り……　１６５
第二部　新大陸ブラジルとその住民　１６６
第一章　ポルトガルよりリオ・デ・ジャネイロへの航路

第　二　章　ブラジル風俗…・　１６９
第　三　章　大　　山　　脈・　１７２
第　四　章　トピナンバー族　１７５
第　五　章　トピナンバー族の住居　１７９
第　六　章　土人の火だねをうる方法　１８４
第　七　章　土人の寝具…　１９０
第　八　章　土人の狩猟…・　１９４
第　九　章　土人の体格…・　１９８
第　十　章　土人の道具類について
第十一章　マンジョオカいもの栽培
第十二章…　土人の料理法…
第十三章　土人の法律と社会
第十四章…　土器の製造法…
第十五章　土人の飲酒と酒の製造法…・
第十六章　土人のおしゃれ…
第十七章　土人娘のお化粧
第十八章　子供の命名・……・
第十九章　一夫多妻の土人たち・
第二十章　婚　　約…
第二十一章　土人の財産…・
第二十二章　土人の名誉心…
第二十三章　土人の宗教…
第二十四章　女　占　師…

第二十五章　カヌーの製作……
第二十六章　食人の心理について
第二十七章　攻撃の準備…　２０２
第二十八章　土人軍の兵器…
第二十九章　いけにえの祭り
第三十章　ブラジルの動物　２１１
第三十一章　タ　ツ　ー
第三十二章　サルエーやとかげなど
第三十三章　ツ　ン　ガ……
第三十四章　ブラジルのこうもり　２１４
第三十五章　蜜　蜂…
第三十六章　鳥　類
第三十七章　珍木ジエニパポ
第三十八章　ピメンタおよび棉花　２１７
結　言　２１８

Hans Staden（著者ハンスターデン）

第一部　漂　　流

著者のことば

ヘシヤのけだかいフェリッペ王子よ！
親愛なるデイエーズ男爵！
イエス・キリスト！

〃かの大海を渡って、数々の品を運ぶ者たちは、神のめぐみが、どれほど無限であるかを知っている。いきなり大洋が荒

れくるい、雷雨が吹きすさぶ時、彼らは何のなすすべをも知らない。

絶望のはてには、ただ神の助けを願うばかりである。神は彼らの切なる願いをいれて、雷雨をおさめ、荒波を静めたまう。こうして、彼らは目的とする地にやっとたどり着けるのである。

これは、予言者ダビデが、サルモ一〇七章で述べたことばであります。

ここに、わたしは、つつしんで、万物のつくり主イエス・キリストに祈り、わたしにたまわった限りないめぐみに、心からの感謝をささげます。

わたしは、未開の大陸ブラジルで、たいへんどうもうな食人種トピナンバー族に捕えられました。そして、約十か月の間彼らの中で、数々の苦しい目にあいました。しかし九死に一生を得て、なつかしい故郷に帰ることができたのです。

このわたしの体験を、忠実に記録したのが、この書であります。

殿下、どうか、このわたしの記述を信じてください。この記述は、すべて偽りのないものであることを、わたしは神にちかいます。

オルフワージエンにて

一五五六年六月二十日

ハンスターデン

序言

ジョアン・エイキマン

尊敬するフェリッペ伯爵！

わたしはハンスターデンの懇望により、この書の校閲をいたしました。わたしが、浅学をもかえりみず、あえてこれを行なったについては、次のようなわけがあるのです。

ハンスターデンの父は、わたしの幼友だちであります。彼とわたしは故郷ウエーテルで五十年も共に暮らしたのでした。彼は現在もなお、ホンベルグに誠実な模範的な市民として住んでおります。

有名なことわざに「リンゴはその幹を知っている」というのがありますが、ハンスターデンは、〃この父にして、この子あり。〃なのであります。

また、この書を校閲するに当たって、わたしは大きな喜びを感じました。と申しますのは、この書の中に、天文学・地理学、その他科学の上でも、非常に貴重なものが含まれているからであります。

なお、特にわたしが感銘したことは、この書を世におくるハンスターデンの心がけであります。彼はこの珍重すべき書を出版するについて、何らの物質的な欲望や名声へのあこが

れをもっていません。

彼は、この書をあらわすことによって、ヨーロッパ人が流言や蜚語に迷わされることをいましめたいと願っています。また、神のめぐみが、どれほど広大無辺であるかを、自分の体験を語って世に知らせようとしています。そのためにこそ、彼は約九年間にわたる漂流旅行記をあらわしたのであります。

ハンスターデンは、彼の父と同じように、品行の正しい、誠実な市民であります。彼の語るところが正確であることは、次のことでも、はっきりとわかります。ヨーロッパの有名な探検家エホバーヌス・ヘッスの子エリオドーロがブラジル探検中、不幸食人種のとりことなっていたこと、そしてぐうぜん彼と出会い、語り合ったことをしるしております。この記述によって、エリオドーロの帰国も時間の問題であることがわかりました。

わたしが、さらに述べたいことは、大体これまでのこの種刊行物には、誇張的な記述が多く、それらとこの書が同一視されることを恐れるということであります。

この地球上には、まだまだわたしどもの貧弱な体験や常識では、はかりきれない多くのことがあります。特に未開の国には、とうてい信じ得ないような事のあるのも、本書を読むことによって知ることができます。

たとえば、ヨーロッパの人々にとって一年は四季に分けられていることも当然でありましょう。ところが、未開国では、

一年が二季に分けられているといっても、単純な者には、ちょうど、大空の星が、どんなに小さく見えても、この地球よりは大きいと聞かせられたように、不思議に思うばかりでありましょう。

しかし、こんな事は、単純な科学的事実で、天文学者は十分知っていても民衆の多くは知らないのです。理知的な神として有名なアゴスチーニョ神　とフイルミアーノ神でさえも、〃地球の反対側にも自分たちと同じ人間が住んでいる〃と説けば、〃そんなばかげたことがあるものか、その人間どもは、さかさに立って歩いているのか〃と反問したということであります。

これは学者たちの間で語られる笑い話ですが、民衆の多くは、大体このようなものです。そして、世の神学者と称する者の中には案外、科学にうとい者が多いものです。有名なニコラウリーラは、民衆に向かって、〃この地球の上半分は水上にあらわれているが、下半分は水中に没している〃と説いていたのです。でも、スペイン・ポルトガルの勇敢な探検家たちによって、インドの国にも、やはり自分たちと同じ人間の住んでいることが立証されたのです。

大体、以上のような事が、ルーテル派の巨頭、ガスパール・コードワルンの書物にも見えています。正直で好人物の人というものは、科学性のうすいこうしたことばをも、簡単に信じやすいのです。

たとえば、本書の中で、ハンスターデンが記述しているところの〝サンタクルース島（註、当時ブラジルは島だと思われていたのでこのようによばれていた。）には、家畜はただの一匹もいない、ブドウ酒も、ビールもない。〟ということばも、容易に人は信じないかも知れません。

わたしは、この序文をむすぶに当たって、この書が、文献として十分価値のあるものであることを述べておきたく思います。

ハンスターデンは、食人種にとらえられ、何十回となく、生死の間をさまよい、なつかしい故郷に帰ることなど、思いも及ばぬことでした。しかし、くしくも神の御手に救い出されたのであります。

彼がわたしに語ったところによりますと、〟死に直面した時、ひたすら神に祈った。そして幾度も神の姿を拝んだ。この体験により、わたしは神の実在を信ずる〟とのことであります。

これに対して、世の無神論者は、何と言うか知りません。しかし、彼らも、病苦や不運に陥った人々が信仰にみちびかれることは知っているはずです。とは言え、人は、何か疑念をいだけば神に祈り、たやすく神に願うものであります。

それについて、次のような笑話があります。これは、有名な航海家のエラズモ・ロッテルダムによって語られている話です。

ある時、エラズモの指揮する船団が、航海中、大しけにあ

いました。あっという問に二、三ぞうの船が波にのまれました。すると船員の一人がクリストボンの神に、一心こめて祈りはじめました。そのことばの中に〝もしわたしを助け給うならば、パリー寺院にある七メートル余りの額よりも、もっと大きなろうそくを十本寄進いたしましょう。〟というのがありました。かたわらで聞いていた同僚が、〝そんなことを神にちかってもだいじょうぶなのか、お前は貧乏で、わしが去年貸した十文のお金もまだ払えないではないか。〟と申しました。すると、かの船員は、あたりを見まわし、〝大きな声を出してくれるな。もし、ほんとうに神が助けてくれれば、十センチメートルぐらいのろうそくを一本寄進するつもりなのだ。〟と、答えたということです。

わたしが、なぜこんなばかげた笑話を、ここに引用したかと申しますと、ハンスターデンは、このような、笑話の中に出てくるような人物とは全く異なった存在であることを、強く言いたかったためであります。

わたしの尊敬してやまぬフェリッペ伯爵よ、ハンスターデンが本書を公にした真意をおくみ取りくださるよう、願うものであります。

マルブゴルゴ、

一五五六年十二月二十一日　　トマス神のよき日に

第一章

わたしはドイツのエンヤ・ハンブルグ出身である。新大陸インドを知りたいという願望に燃えて、ブレーメン市からオランダにひとり旅だった。オランダのカンペン市で、多くのオランダ船が、ポルトガルむけの塩を満載して出港しようとしていることを知った。

わたしは、特に頼んで、その船に便乗させてもらい、ポルトガルに渡った。ポルトガルのセツーバル市に到着したのは、忘れもしない一五四七年四月二十九日であった。ここよりわずか五マイルの地点にあるリスボンに向かったのは翌朝のことであった。

リスボンに到着して、宿屋についたが、意外にも、この宿の主人はドイツ人であった。異国で同胞に会うことは、うれしいものである。わたしは、彼とたいそう親しくなった。わたしは、彼に自分の希望をうちあけて、インドへ行く船へ乗せてもらうことを頼んだ。すると彼は、気の毒そうな顔をして、

「スターデンさん。もう一足早くおいでになればよかった。ポルトガル王の船団が、インドにむけて、一週間前、出港したばかりですよ」と言った。わたしは、すっかり落胆した。

ふところの余りゆたかでないわたしは、彼の好意にすがっ

て、やっかいになった。宿の仕事などを手つだいながら、時期の来るのを待っていた。しんぼう強く待っているうちに、幸運がおとずれた。

それは、ペンテアード隊長の率いる船に乗せてもらえることになったのであった。しかし、ペンテアード隊長の船は、インドに行くのではなくて、ブラジルに行くのであった。

ペンテアード隊長は、ポルトガル王の命をうけ、船団を率いて、ブラジルにむかうのである。その任務は、ブラジルとの交易、そして、ポルトガルの重罪人・政治犯人など数十人を連行しブラジルに追放すること、また一つには航行の途中、バルバリーア(アフリカ沿岸)で交易しようとするフランス船を発見しだい捕獲または撃沈する、という重大な仕事をもつものであった。

ペンテアード隊長とハンスターデンの乗り組んだ船。マストの上にDHとしるした旗がひるがえっているが，その意味は不明である。

そこで、船団は、海賊にそなえて、ものものしく武装され、砲弾や食料が多量に積み込まれていた。乗組員の中にはドイ

ツ人が三名いた。ブレーメン市出身のジョン・ブルシャウゼン、エンリッケ・ブランテ、そしてわたしの三人である。

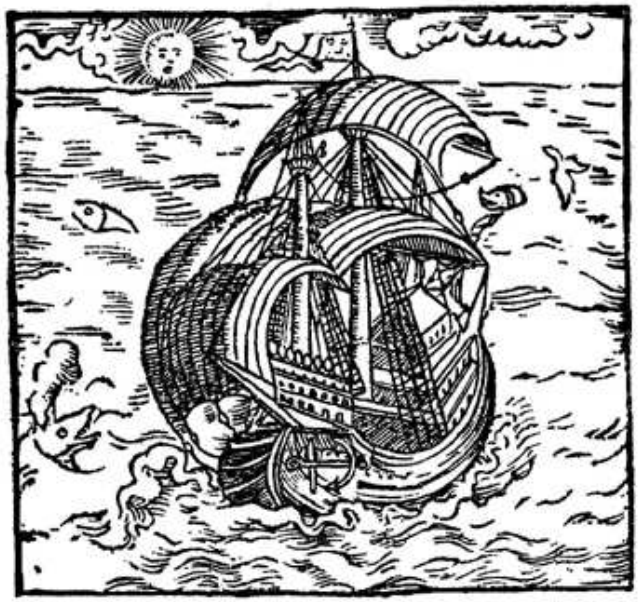
第二章

ポルトガルのリスボンより出発

リスボンを出発したペンテアード隊長の船団が、マデイラ島に到着したのは、午後のことであった。

この島は物産のゆたかな島で、砂糖・ブドウ酒を多く産し、美人の多いことでも知られていた。フンシャールという町で、生水・ブドウ酒などを船に積み込んで、マロッコスにむかった。

マロッコスはもとポルトガル王家にぞくしていたが、長年にわたる革命が起こり、ついに独立したのであった。



ペンテアード船団の僚船。

わたしたちは、イヂールやウフラーニ港で、フランス船が土民をだまして、多数の金品をかすめていることを想像した。

わたしたちの船が、イヂール港の背岸に到着した時、その

附近にスペインの魚船が密集していた。スペイン漁夫の証言によると、はたして、港内にフランス船が停泊していることがわかった。

わたしたちは、時を移さず、その獲物目がけて港内に突入することにした。いよいよ港内に入ろうとした時、ほとんどすれ違いに、多くの商品を積んだ船が、外海に出て行くのを見た。

「これだ。この船がフランス船だ」

ただちに船首をその方にむけ、全速力で追跡した。すると、フランス船は意外にも、すぐに降服の旗をあげた。

わたしたちは、フランス船の乗組員を捕えるため乗り込んでみると、船内には、すでに人影はなかった。フランス人たちは、自分の船と商品を放棄したのであった。ところが、港内の警備兵たちはフランス人に好意をもっているので、わたしたちの船に攻撃をかけて来た。そこで、わたしたちも一せいに砲門をひらいて応戦し、警備兵たちを沈黙させたのであった。

それからわたしたちは勝ちどきをあげ、捕えたフランス船の中を点検した。砂糖・アメンドーア・タマラ・皮革類その他多量の品が満載されていた。

わたしたちは、このばく大な戦利品を獲得して、マデイラ島に引きかえした。ペンテアード隊長は大いに喜び、さっそく、この勝利をポルトガル王に報告するため、小船を仕立て

て数名の乗組員を帰国させた。

ポルトガル王は、その軍功を賞し、さらに命じて、「戦利品はマデイラ島にとどめ、船隊は一日も早く目的地に向かって出発せよ」との言葉を伝えた。

わたしたちは、再びイヂール港に行き、港外に放置して来た敵船を捕獲するつもりであった。ところが、今度は猛烈な逆風にあい、船は押し流され、敵船の捕獲などは思いもよらぬ有様なので、進路を変え、ブラジルにむかったのであった。

ちょうど、マロッコスの海から四百マイルばかり行ったところで、船隊は、物すごい魚の群れに出会った。余りにも突然の事で、回避するいとまもなく魚群に取り囲まれて、船の進行は止まってしまった。わたしたちは、そのすきまじい有様に恐怖をさえおぼえたが、水夫の中には、この一メートルぐらいの魚をつり上げる者もあった。この魚は漁夫の間でマルバコーラスとよばれている

ベンテアード隊長の船が魚群に取りまかれたところ。

マグロの一種であった。
　またこの魚群におどろいたのは、わたしたちばかりではなかった。ちょうどにしんぐらいの大きさで、背に羽をもった魚が、こうもりの大群のように、おどろいて飛びたち、海上を十数メートルも飛んだ。これは実にすばらしいながめであった。ポルトガル人たちは、この魚のことをペイシエ・ボアドール（飛魚）とよんでいた。
　船がしだいに赤道に近づいて、気候が変わってきた。暑熱はさらに激しくなり、しきりに風雨がおそってきた。そのため船ははなはだしく翻弄され、進行は全く意のごとくならなくなってしまった。乗組員は、それぞれ海のつわ者ぞろいであったが、この風浪には、いききか難色を見せていたが、よく協力してたたかった。また信仰心の深い者は、海神の助けを頼み、幾昼夜の苦闘に堪えていった。
　こうしたある夜、天地も裂けるかと思われる大音響が、豪雨を縫ってひびき渡った。と同時に悪魔のような数条のいなずまが、暗夜の海上に輝き渡った。
　この異様な電光を見たポルトガル人たちは、歓声をあげて打ち喜んだ。わたしは不思議に思って、そのわけをたずねてみた。
　すると彼らは、「あの青白い電光は、サント・ヘルモの火とよばれる神の示しなのだ。大暴風雨の夜に、この電光がたてば、翌日は必ず快晴をむかえるのだ」と言った。

わたしは、この言葉を半信半疑に聞いていたが、その翌日、わたしは、この言葉を信じないわけにはいかなかった。あのように猛り狂っていた風浪は夜明けとともにおさまった。そして、はるかかなたの水平線に太陽があがり、さんさんと輝きはじめたではないか。

わたしは生まれてこの方、あのように美しい太陽を見たことはなかった。わたしたちは太陽ののぼりゆく崇厳な光景をながめ、感激の涙を流して、互いの無事を祝したのであった。そして、一同は期せずして、かんぱんにひざまずき、神に感謝の祈りをささげたのであった。

それより後平穏な航海が続き、リスボンを出発してより、実に八十四日目、一五四八年一月二八日にブラジルのサント・アゴスチーニョ岬に到着した。そして更に船を進め、岬より約八マイル南方のペルナンブッコ港に入港した。

ここにはポルトガル人たちによって、すでにオリンダという町が設けられていた。町には土人たちも住んでいて、かなりの繁栄を示しており、土人たちは、この町を土語でマリンとよんでいた。

隊長ペンテアードは、オリンダに駐在するブラジルの大総督ドアルテ・コエーリョにポルトガル王子より託された言葉や、連行した犯罪人たちを引き渡した。わたしたちは、元気の回復を待って、船に積んで来た各種の荷物を陸揚げして、ひとまず任務を終えたのであった。

第三章

ペルナンブツコ土人の襲撃

ポルトガル人たちの不注意から、これまで平静であった土人が怒りを爆発させた。それに他の土人が多数同調し、大挙して白人植民地を襲撃するという大事件が突発した。この白人植民地はイガラスー村とよばれ、オリンダの町より二五キロメートルほど離れた所にあった。

そこには、約二百名ほどの白人植民者が、大原始林を切り開いて住居をかまえていたが、土人たちは、これを襲撃し、村を焼き払い、白人をみなごろしにしようとする魂胆であるもののようであった。

土人襲撃の報がオリンダの町に報ぜられると、武器らしい武器を持たぬイガラスー村の状態を知る町の人々は、非常な不安と焦燥にかられた。事実全滅は時日の問題ともいえる状態なので、市民は、イガラスー村救援をペンテアード隊長に懇願した。

ペンテアード隊長も、これを傍観するに忍びず、ここに植民地救援軍を組織して、イガラスー村に向かうことを決定した。

オリンダの市民たちも、この救援軍に参加したくは思った

が、幾千にものぼる市近辺の土人が、いつ反乱分子に呼応して立ち上がるかわからないので、市の防備を手薄にすることはできない。そこで軽々に行動は許されない立場にあり、ペンテアード隊長以下の救援軍に、すべてを顧むはかはなかったのであった。

わたしも、直ちにこの救援隊に参加したが、隊員約九十名はすぐに行動をおこした。幸いなことに、イガラスー村の前方は入りこんだ湾になっており、ボートに乗って、そこに上陸することになった。

救援隊員の白人はクリスト教信者であり、三十名の土民と黒人も含んでいたが、これらは善良な協力者であった。

わたしたち救援隊は、二十キロメートルの海を無事に渡り、目的地に到着してイガラスー村に乗り込んだ。

植民者たちの喜びは非常なもので、みな涙を流して、わたしたちの手をとり感謝の言葉を述べた。特に婦人たちは、これまでの不安が大きかっただけに、その感銘は格別のものであったように思われた。

わたしたちは、すぐに植民者たちと協力して、土人軍の撃退に当たることになった。彼我の状態を見るに、わたしたち白人隊三百名に対し、土人軍は、約八千名という大勢である。ただ白人隊には、かなりの火器があって、数の差は火器の活用でおぎなうことができる、という心づもりはあった。しかし土民たちは、まるで、黒豹のように敏捷であり、戦いにな

れているので、瞬時の油断も、わたしたちには許されないのである。それに被我をへだてるものは、簡単な木柵があるほか、何もないのである。

第四章

土人の要塞

イガラスー村の四方は、うっそうたる密林で囲まれていた。その原始林の中に、土人軍は二か所の要塞を築いていた。要塞は、丸太や石で築き、昼間は、その中にひそんで厳重な見張り人を立て、白人軍を一歩も近よらせないのであった。時にわたしたちが林の中に土人を発見しても発砲のいとまを与えず、からだを伏せるので、弾丸を命中させることはかなり困難であった。

ところが、夜に入ると、この原始林は彼らの活舞台となるのである。彼らは、いっせいに動物の鳴き声に似た奇声をあげて、村に攻めよせて来るのである。毒矢を雨のように降らせ、また火矢を村の家屋に射かけて来るのである。彼らはまず家屋を焼き払い、白人を捕え火あぶりにして食べるつもりでいるもののようであった。

しかし、土人軍の攻撃の都度、白人軍は植民者と協力して防戦につとめた。土人軍のあげる喚声と鉄砲の音が、深夜の

密林にこだまして、実に凄愴な気持ちであった。特に婦人や子供は、恐れおののき、一か所に集まり、息を殺して戦闘の結末を待っていた。

白人軍の戦闘用兵は見事で、土人軍は、常に撃退されたが、ここに一つの問題が生じたのであった。

それは幾十日にもわたる戦闘が昼夜の別なく練りかえされ、外部との連絡が断たれていたので、村では、そろそろ食料の欠乏を告げて来たことであった。

いろいろな方策を立ててみたが、いずれも成功確実と思われる方途はなく、それかといって、いたずらに日を過ごすことも許されないので、最も可能性の濃い一つの手段に出て、食料を獲得することを決意した。

二隻の小舟を仕立て、決死隊をこれに乗せ、隣り村イタマラカーに食料の供給をあおぐことになった。

ある夜、やみに乗じて、二隻の小舟は、ひそかにイタマラ

左側下部に見えるのがサント・アゴスチーニョ岬と，オリンダの町，上部円陣の中央がイガラスー村。下部の川のまん中に土人たちが木を倒して，陸戦隊の航海を妨害している。

カー村を目ざして出発した。舟は一たん海に出て、目的地に上陸するため、小湾に乗り入れていった。この小湾の内で、陸地が両岸よりせまり、細く通路のくびれた箇所にさしかかった。やみをすかして見ると、この通路に大木が倒しかけてあって、舟の通行を遮断しようとしてあった。

これは、土人軍も、すでにこの事あるを予期して、隣村との運絡を断つため、この挙に出たものである。決死隊を乗せた舟は、航行をはばまれ、岸べに近づいた時、相にく引き潮時となって、小舟は干がたの中に底を没し、航行不能に陥ってしまった。これを見すました土人軍は、両岸に姿をあらわし、木片・枯枝を小舟目がけて投げつけはじめた。しつような土人の攻撃に堪えて、防戦していたが、土人軍は、うず高く投げつけた木材の山に火を放って密林に退去した。

わたしたちは、その火気と煙に取りまかれ、小舟を拾てて退避するよりほか、方途がないかに思われた。だが、神はわたしたちを見拾て給わず、突然、とうとうと音をたてて小湾に海水が流れ入って来はじめた。潮の満ちるにしたがって小舟は浮き上がることができた。土人が木を倒しかけた通路を見ると、先刻土人の放った火によって大木は燃え切れ、通行可能になっていた。

わたしたちは死にもの狂いで舟をこぎ、ここを通過して、目的地イタマラカー村の浜べに到着した。村民の手厚いもてなしを受け、多量の食料品をもらいうけ、小舟に積んで引き返

して来た。
例の狭い通路にさしかかってみると、土人たちは、前の失敗にこりたのか、今度は大木を蔓で高くつるし上げ、その下を小舟がくぐろうとする時、一時に蔓を切って、大木を落しかけようと計画していた。
ところが、土人たちも、この仕掛けをほどこすのにあせっていたものとみえ、大木を高くかかげようとして、かえってこれを自分の方に倒し、相当な負傷者を出した模様であった。
土人たちが、この騒ぎに気を取られているひまに、わたしたちはこの危険地域を通過し、ようやく帰ることができたのであった。食料の補給に白人軍は意気が揚がり、戦闘は一段と活発になった。
こうして、約一か月にわたる戦闘を続け、土人軍を一歩も植民地内に踏み入れさせることを許さなかったのであった。
そのうち、密林に出投する土人の姿が少なくなり、やがて姿を見ぬ日がきたので、敵状を偵察することにした。ポルトガル人の若者三人が、土人軍の要塞に近づいて、様子をうかがうと、要塞は全くの無人となっており、土人軍は遠く総退却していることが判明した。
戦闘はついに終わった。白人側も十数名の負傷者を出したが、土人側には二百を超える死者があった。戦いがわたしたちの勝利に終わったことを喜んだ。植民者の感謝に満ちた言葉に送られて、わたしたちはイガラスー村を引き揚げた。

オリンダの町に帰ると、総督をはじめ市民をあげて、白人救援軍の武勇を賞賛し、大歓迎会を開いて、わたしたちの労をねぎらってくれた。

こうして後、わたしたちは、再び船隊に帰り、生水・野菜・肉類・穀類その他の食料を積み込んで、帰国の準備をしたのであった。

第五章　ペルナンブッコ出航

わたしたちは、市民一同の感謝と感激のひとみに見送られて、ペルナンブッコの港を出航した。四十マイルを航行して、パライバ港の入口に達したのは、夜のことであった。

パライバ港におけるフランス船攻撃の図。

ここに寄港して、パウ・ブラジル（当時ヨーロッパで珍重きれた染料をとる木材、ブラジルという国名のおこり。）を積み込むはずであった。またポルトガル人に好意を持つポチ

ガーラ族という土人から食料の供給もうけたいと思っていた。
船隊を港内に入れようとしてふと見ると、港内にフランス船が停泊していた。近づいて見ると大量のパウ・ブラジルを積み込んでいるではないか。(当時のフランス船はすべて海賊船であった。ブラジルの沿岸に出没して、さかんにブラジルの特産物や財宝をかすめ取っていた。) わたしたちは、このフランス船を捕獲して、パウ・ブラジルを取り上げようとはかった。しかし、この計画は、やがて不運のもととなったのであった。

わたしたちが近づくと、フランス船は、直ちに降服の様子を見せたので、なお近づいていった。すると、油断を見すましていきなり砲撃を加えて来た。わたしたちもあわてて応戦したが、不運にも敵弾が命中して、たちまち火災を起こしてしまった。その上、敵の不意打ちをくらって、数名を失い、十数名が負傷したため、大混乱に陥ってしまった。この混乱に乗じたフランス船は、いち早く外海に脱出して、全速力で逃亡してしまった。ペンテアード隊長は、湾内に船を止めて修理を急ぎ、一日も早くポルトガルに帰国しようと決心した。そこで、食料の補充を取りやめ、船は一路ポルトガル向け出発した。

しかし、大西洋航海中の食料難は言語に絶するもので、悲惨をきわめたのであった。毎日一人あて、水は小缶一ぱいと一握りのマンジョオカ(木いも)粉が与えられるに過ぎなかっ

た。そこで乗組員は魚をつって食料の補充とした。
この魚さえつれない日が続くと、水夫の中には、空腹に堪えかねて、積み蔵の中の皮革類をひそかにかじる者さえあるほどで、飢餓状態はアソーレス島到着まで続いたのであった。

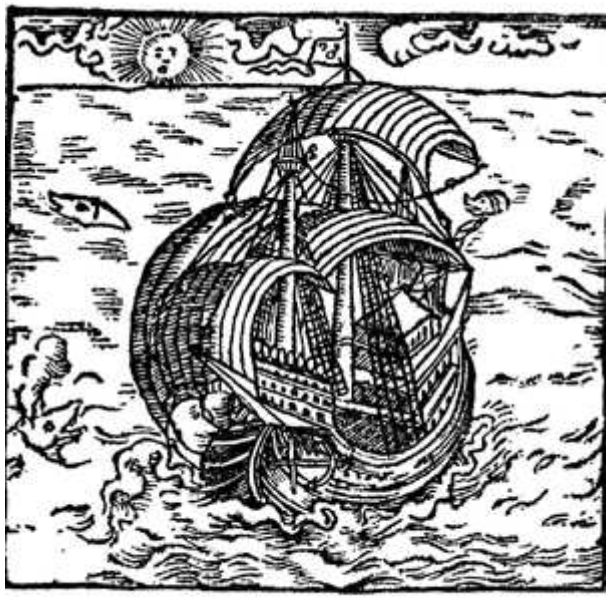
一五四八年、八月十二日、百八日の長い航海を終わって、ポルトガル領アソーレス島に到着したのは、朝の七時ごろであった。
島に上陸すると、まず食べ物を手にした。血のしたたるようなビーフテキ・果物・清水、まるで豚のようにむさぼり食べ、むさぼり飲んで、やっと長い間の飢をいやしたのであったが、この豚どもの中に、わたしも混じっていたことはいうまでもない。
島に滞在すること十数日、航海の疲れも去った。もうそろそろ本国向け出発しようとするある日のこと、島かげに一艘の見かけぬ船を発見した。近寄って行くと、その船は、やにわに発砲してきた。そこで、わたしたちもやむなく応戦して、敵船を沈黙させてしまった。
わたしたちが、その船を掌捕してみると、それは、フランスの海賊船で、多くの食料そのほか商品を積んでいたので、これを勝利品として取り上げた。
海賊たちは、砲戦中に、かなわぬとみてボートに分乗し、向こうの島にのがれ去ったので、追うをやめて、わたしたちは

港に帰った。
その時、五隻のポルトガル船が、王家の旗をひるがえしながら入港して来たので、祝砲をうって、これをむかえた。
彼らは王の命を受け、インドより帰航する船隊を、このアソーレス島まで出迎えに来たのであった。
こうして、二日ほど過ぎるうち、インドより帰航する数十隻のポルトガル船が、ぞくぞくと入港してきた。その総数は百数十隻にのぼり、港内にはいり切れないで、港外にも多数停泊することになった。そして、長途の航海に疲れた乗組員たちは、休養のため島に上陸した。
やがて、全船打ちそろってポルトガルのリスボン向け出発し、到着したのが、一五四八年十月八日であった。
こうして、延々十六か月にわたるわたしの航海は、ここにひとまず終わりを告げたのであった。その後、わたしは、疲れを覚えたので、一年余り、取りとめもなく過ごした。
ある日、たれからともなく、スペイン人が南米大陸に新領土を獲得して、渡航者を集めているという話を聞いた。わたしは、持ちまえの冒険好きな心をあおられて、大いに動かされた。
ついにリスボンからスペインにむかい、十数日の後サンタマリア港に到着した。ここでわたしの乗ったイギリス船は、葡萄酒を多量に積み、セルビーリヤに行った。このセルビーリヤ港で、南米のリオ・ダス・プラッタス向け出発するため、出

航の準備を整えている三隻の船に乗船を依頼した。

スペインでは、さきに南米の新領土リオ・ダス・プラッタスに数隻の船を派遣したところ、このほど一隻の船が帰国して、政府に対し、新領土がいかに金銀の宝物に富んだ土地であるかを報告した。そこでスペイン政府は、新たに三隻を派遣することに決し、総司令官として、有名な探検家、デイオーゴ・デ・サナブリアを任命した。

わたくしは、この船隊への乗船を許され、三隻の船は、セルビーリヤ港を出て、サンルッカ港に行き、そこで大航海の準備をして、いよいよ出航の日を待ったのであった。



ハンスターデンが砲手として乗組んだ船。

第六章

スペインより再びブラジルへ

輝かしい出発の日は、パスコア祭の四日目、すなわち一五四九年四月十日の朝であった。サンルッカ港を出港したが、風向きが悪いので、ポルトガルのリスボンにむかった。そして、風向きの直るのを待って、カナリア島に進路を取った。次に

パルマ島に立ち寄り、食料や葡萄酒を積み込んだ。ここで三隻の船長は会議を開き、航海の事について協議した。

万一、天候にわざわいされて、三隻の船が離ればなれになった時は、南緯二十八度の所で互いに船を待ち合わせることを取り決めた。

パルマ島より一路カーボ・ベルデにむかい、そこより新大陸むけ針路を取ったが、風向きが悪く、船はしばしば逆の方角に押し流された。この流されて行く先には黒人の多く住むギネー島がある。そこには何の用事もないので、針路を立て直しながら、ようやく、サントメに到着した。

サントメは、ポルトガル王家に属し、良質の砂糖を産出することで知られていた。

ここには多くのポルトガル人が住み、多数の黒人奴隷を使役して農園を経営していた。

わたしたちは、航海中水不足に悩んできたので、清水を十分に飲み、多量に積み込んで、船を大海に乗り入れた。しかし、その夜猛烈な暴風雨にあって、三隻の船は、散りぢりになってしまい、ついに連絡は切断されてしまった。

わたしの乗っている船は難破しつつ進んでいったが、依然として風向きは悪く、荒海とたたかい続けて航海を続けた。こうしてついにわたしたちは約四か月間大洋のただ中をさまよい、九月の中ごろようやく順風をむかえて、目的地たる南米に針路を定めることができた。

第七章
ついに南米に到着

十一月十八日、緯度をはかってみると二十八度であった。いよいよ新大陸に接近していることがわかったので、目を凝らして、西方を見張るうち、二十四日の朝、黒々とした大陸がはるかに望見きれた。スペインの港を出発してから約六か月、ようやく目ざす大陸に到着することができたのである。

わたしたちは、用心深く陸地に近づいていった。見知らぬ港に入港した時、どんな事件が起こらぬとも限らない、まず危険を予想して、その港を右に見て過ぎた時、突然猛烈な強風が吹きだした。

わたしたちは陸地の近くには、多くの岩礁のあることも経験をとおして知っているのであった。用心して、大樽に多くの火薬を詰め、その上に幾ちょうかの鉄砲をくくりつけ、多数を海中に投げ入れた。この火薬樽は、潮に流されて、海岸に流れつくことを知っていた。こうしておけば、たとえ船が岩礁にあたって砕けても、乗組員は海中に飛びこみ、陸地にむかって泳げばよいのである。泳ぎつくことができさえすれば、弾薬だけは得られるという仕組みになっている。

そのうちに、船は岸べの岩礁にむかって流されはじめたが、

神の助けか、はるか前方左側に船を乗り入れるに十分な自然の良港を発見することができた。わたしたちは大急ぎで、その港に入ることができて、万死に一生を得たのであった。

港に船を入れた時、一隻の船をはるかのかなたにみとめた。長い間、海と空ばかりを見て来たわたしたちは、人なつかしさに、その船の主にあいたく思った。ところが、先方は、わたしたちの船をフランスの海賊船とでも思ったのか、あわてて逃げだし島かげにかくれてしまった。

わたしたちは、ともかく、無事に港内に入り、波も静まったので、ぬれた衣服を干したり、品物を整理したりしているうちに午後になった。たしか、二時ごろであったと思う。森林の東側から、かなり大型のカヌーに土人が大ぜい乗って近寄って来た。土人たちはカヌーの上に立ちあがって、口々に叫んでいる。しかし、わたしたちの中には、土語を解する者が一人もいなかったので、彼らが、何を告げているのか、知ることができなかった。しかし、彼らの態度を見ると、わた

スペラギー港に到着。

したちに好意をもつもののように感じられたので、土人たちの好む、釣針や、小刀などを投げてやった。彼らは大そう喜んだが、自分たちの意志の通じないことがわかると、手を振りながら陸地の方にカヌーをこぎ去っていった。

夜になって、やはり昼間の時と同じように、大型カヌーに土人たちが乗って船のすぐそばまでやって来た。見ると、今度は二人の白人を乗せて来ていた。白人はポルトガル人で、わたしたちに向かい、「この船はどこの船なのか、君たちはどこから来たのか」と矢つぎ早にたずねた。

わたしが、大声で、「これはスペインの船だ」と答えると、彼らは大いに感歎して、

「はるばるよく来たものだ。察するに、腕のよい船乗りばかりだろう」と言う。わたしは、

「いや、腕ききなど一人もいない。ただ神の命ずるままにここまで来たのだ」と答えた。

彼らはますます感銘を深くして、しきりに、うなずいていた。

この二人のポルトガル人の語るところによると、この港はスペラギー港と言い、ポルトガル王家の所有港であった。そして、サンビセンテ港より約十八マイルの地点にあることもわかった。

そして、さっき見かけた船はポルトガル人の船で、やはり、わたしたちを海賊船と見て逃げだしたもので、一同その話を

して、大笑いをしたのであった。
わたしたちは、なおも、これから行こうとするサンタカタリーナ港についてたずねてみた。彼らの言うところによれば、サンタカタリーナ港は、ここよりさらに約三十マイル南下した所にあって、港の近くにはカリジョー族という土人が多数住んでいる。このスペラギー港の附近の土人はトピニンキン族といい、白人には好意的なので、自分たちは、土人とよく融和して植民の仕事を進めている。しかし、かのカリジョー族については、多くを知らないと答えた。
彼らは、わたしたちの無事サンタカタリーナ港到着を祈り、港の目印をも教えてくれた。

第八章
サンタカタリーナ港へ

強烈に吹きまくっていた東南風が、ぴたりとやんだので、わたしたちは、目ざすサンタカタリーナ港へと進路をとった。それから二日目、沿岸の山々の形からおしはかって、この附近と思われる所に船をとめ、探ってみたが港の入口が発見できない。行き過ぎているのではないかという者もある。船の進路は定まらず、途方にくれているうち、空の雲行きがあやしくなってきた。やがて強い北東風が吹きだし、海は三角波を

あげて荒れはじめた。やがて雷鳴を伴う豪雨がやって来た。うるしのような暗夜にいなずまの走るさまは、たとえるものもないほどの恐ろしさであった。船は木の薬のように翻弄され、乗組員は皆生きた心地もなかった。ある者は帆柱にからだをしばりつけ、ある者は船室深くかくれる者もあったが、やがて、神助を得て、荒天はおさまり、波はおだやかになったり

わたしたちはさらに勇気をふるいおこし、サンタカタリーナ港を求めて沿岸をゆっくりと航行した。このあたりには島が多く、海岸線は複雑をきわめ、港の発見はすこぶる困難であった。船長は、とある入江に船を入れ、そこに止まって、海岸の状態を調査することにした。入江の中に格好の停泊所を見つけたので、仮りに船を止めた。そしてボートをおろし、数名の乗組員に、海岸の調査を行なわせた。

第九章

探検隊上陸、岩礁の上に十字架を発見する

一五五〇年十一月二十五日、数人の乗組員はボートに分乗して、入江の探検に出発した。わたしたちの考えでは、この入江が、サンフランシスコ川の川口に相違ないと思われたので、事実を確かめる必要があった。

入江の奥深くボートを進めて行くと、しだいに眼界がひら

け、入江の幅が広くなっていった。はるかな対岸の林に人家らしいものが見えてきた。

わたしたちは、各自の銃を握りしめ、事ある時にそなえて、発砲の用意をした。そして、その人家を目ざして前進したのであった。やがて、岸にあがり、家を取り囲み近よってみたが、しんとして人のいる気配がない。戸を破って内部をのぞいたが、全くの無人であった。それまで、いきさか緊張していたわたしたちは、何か拍子抜けの感じで、互いに顔を見合わせたのであった。

わたしたちは再びボートに乗り、さらに奥へ奥へとこぎ進んで行った。しばらくすると、小島があった。そして、わたしたちは、この小島に上陸して、一夜を明かすことになった。

島には椰子の木がはえ茂り、露営に便を与えてくれた。夕食には、椰子を切り倒し、そのしんを煮て食べた。（註。椰子のしんはパルミットという。すこぶる美味）

その夜一人

スペイン船の号砲一ぱつの合図に，争ってこぎ寄せる土人たちのカヌー。中央に十字架が見える。左上部に見えるのは，上陸したスペイン人たち。

づつ交代の不寝番を立てて、わたしたちは椰子の木蔭に眠ったのであった。

朝をむかえ、わたしたちはまた入江を前進していった。すると、はるかかなたに巨大な岩礁があった。上陸してみると、この岩礁の上に高さ四メートルぐらいの木製十字架が建ててあった。

そして、葡萄酒樽の一片と思われる木片がしばりつけてあり、それに書き込んだ字の跡がみとめられた。幾年か風雨にさらされたものとみえて、十字架もふるび、字の跡もうすれて、何語で書かれたものか、何が書いてあるのかも知ることはできなかった。

そこで、わたしたちは、その木片を取りはずして、いったん本船まで持ち帰った。一行中の学者ピエールが苦心判読した結果、ようやく言葉の意味を解することができた。

その文字はスペイン語で、

Ｓｕ ｍａｊｅｓｔａｄｅ，ｔｉｒｅｎ ｕｍ ｔｉｒｏｙ ｈａｂｒａｎ ｒｅｃａｄｏ“

〝もし、この地にスペイン王家の持船来たらば、一ぱつの合図をなせ、しからば、直ちに、その答えを得べし〟と書いてあった。狂喜したわたしたちは、再び十字架のある岩礁に行き、一ぱつの銃声をあげてみた。すると、五分もたたぬうちに、向こうの森の岸より、わたしたちの方にむかって、五隻のカヌーがこぎ出して来た。見ると四五十人ぐらいの土人

が分乗していて、またたく間に近づいて来た。わたしたちは、彼らの攻撃も予想されるので、銃に弾丸を込め、戦闘の準備をして、彼らの近づくのを待ちかまえていた。しかし、彼らに戦意は無いもののごとく、さらに近づいて来た先頭のカヌーを見ると、中央に一人の黒衣をまとった老白人が立っていた。

そこで、その白髪の老白人にむかい、大声で言った。「土人たちは近よるな。あなただけ一人で来ていただきたい」と。すると彼は、他の四隻のカヌーをそこに止め自分の乗ったカヌーだけを進めて、わたしたちの船にやって来た。

わたしたちが、矢つぎ早に出す質問に対し、老白人は微笑をたたえて回答した。

「この港は、土語でジェルミリン（小さい口）といわれ、白人たちは、サンタカタリーナとよんでいる」と、答えた。

この言葉を聞いて、一同はどっと歓声をあげた。わたしたちは、目ざす地に到着していることを知らなかったのである。そして、この日は、デイア・デ・サンタカタリーナ（カタリーナ神の日）であった。偶然にも、その神の名の日に同じ名の港に入港していることを知るとは、神の導きというほかはなかった。こうして、わたしたちはキリスト教徒として、ますます信仰をかため、神に対する絶対服従を誓ったのであった。

今度は老人の方から質問があった。それに答えて、わたしたちはスペインより来た者であること、スペイン王の命令に

より、スペイン王家の持ち船に乗り、ラプラタに行く途中であることなどを語った。

そして、三隻そろって本国を出航したが、途中海が荒れて離ればなれになり、この港で待ち合わせることに約束ができている。わたしたちは三隻の船がここにそろうまで、この港に停泊することなど、事細かに話した。

すると老白人は、涙を流しながら喜んで、自分のことを語った。それによると、この老白人は、今より三年前、スペイン領リオ・ダス・プラッタ（スペイン人探検家サラザール隊長によって、一五三七年八月十五日に創設された町）のアスンソンより、約三百マイルの地点にあるこのサンタ・カタリーナに来た者である。彼は、スペイン人と友交関係を結ぶカリジョー族の土人の協力を得て、スペイン人の食料とするマンジョオカ（ブラジル産の木いも）を栽培している者であるとのことであった。そして、彼は、「同国の人々に、こんなに本国を離れた土地であえたことは、何にも増してうれしい」と繰りかえして述べ、自分の村へ案内することを申し出た。

彼の住んでいる土人部落にわたしたちが行くと、土人たちは、山海の珍味を集めて、わたしたちを歓待してくれた。

第十章

土人たちと共に本船へ

カリジョー族の部落に、ただ一人の白人として三年も住んでいる、その老人とわたしたちはさまざまな話をした後、彼を本艦まで案内することにした。

すると老人は、「まず土人の酋長やおもだった者を代表として、先に船にお連れなさい。わたしは、その後で、行かせてもらいます」というので、老人の意志を尊重して、土人の代表数名を連れて、本船に帰えることにした。

わたしは、ここで友人たちと別れ、カヌーに土人たちといっしょに乗り、入江の入口に泊っている本船に帰って来た。本船から約三百メートルほどのところに来ると、本船の乗組員が大声で叫んだ。

「一歩も近づくな。近よると撃つぞ。」

わたしは、大声でどなり返した。

「おい、おれだ、スターデンだよ」

本船の連中も、やっと、わたしであることに気がついたが、なぜ土人と一しょにカヌーで帰って来たか不審に思ったらしく、なかなか本船に近よらせようとはしなかった。

それも無理ではなかった。わたしたちが本船を出発してから六日も過ぎており、本船の者たちは、岸礁上の十字架についても、土人部落に一人いる老白人の事も知らないのである。本船の連中が、わたしの同僚は土人に食われ、わたしはまた

捕虜となって、本船に案内させられているのかと思うのも、当然であった。

わたしは、大声で叫んだ。

「心配するな。よい知らせをもって来た。皆無事でいるぞ」

これを聞いて、はじめて、わたしたちは乗船を許された。

わたしは、これまでの事をすべて話した。

皆は耳をかたむけて聞き入り、すぐに本船を入江の奥に入れ、土人部落の近くに停泊させることに決めた。

わたしたちは、そこで、大洋のまん中で散りぢりになった僚船の到着を待つことにしたのであった。

かの老人はジョン・フェルナンデスというスペイン人で、土人たちは彼のことを、クチーア（土語で、立って食う人という意）とよんでいた。

土人たちは案外温和で、わしたちが本船の連中を案内して再び部落を訪れると、酋長の命令によって、魚類・肉類・果物などをたくさん供給してくれた。わたしたちも、彼らの好意にこたえて、釣針を多数贈ったが、土人たちの喜びは非常なものであった。

彼らは石器時代からまだ抜け切っておらず、金ぞくの道具を作ることを知らない。そこで、小刀・はさみ・釣針などの鉄製品は、彼らにとっては、宝物に等しいものであった。

第十一章

轟然、母船大破す

サンタカタリーナ港で停泊すること約二か月目に、大洋で別れた第二船が入港して来た。しかし、第三船はいつまでも姿を見せず、かの暴風雨に奪い去られたものであろうと考えられ、あきらめるほかはなかった。

わたしたちは、約六か月分の食料を積み込んだほか、すべて必要な品物を備え、いよいよ出発という時、突発の事故によって、非常にみじめな状態に陥ったのであった。

それは、わたしたちの母船が、轟然たる大音響とともに大破してしまったのである。原因と思われることは、乗組員のたれかが、不注意に投げたたばこのすいがらから火薬庫に引火したのではあるまいか、というのが有力な説であるというほか、どう原因を追求することもできなかった。また、ここで原因を追求して明らかにしてみたところで、今更はじまらない事でもあった。

わたしたちはさながら羽を失った鳥のようであった。食料も乏しく海鳥・陸がめ・とかげ・山猫・その他奇妙な森の動物さえ捕えて食料とする有様であった。

こうしたみじめな生活を続けているうちに、歳月はようしゃなく過ぎて、二か年を夢のように暮らした。土人たちも最初のうちは、わたしたちの不幸に同情して、何くれとなく

世話をしてくれたが、年月のたつにしたがって、わたしたちには近寄らなくなってしまった。
いつまでも、とどまるわけにはいかないので意を決し、残ったボートで出発することにした。
しかし、一隻のボートに全員が乗り込むこともできないので、全員を二組みに分け、ひと組みはボートで、他のひと組みは陸路を徒歩で進むことにした。
サラザール隊長はボートで出発することになった。わたしは、今後の困苦は見えているので、どちらかに決まっても苦情は言わない覚悟でいた。やがて隊長の命令で組が分けられ、わたしはボートの組に入れられた。
この小さなボートで、これから三百マイルの航海を続けるのか、と思うと、前途の困難が想像されて、わたしは暗たんたる気持ちになった。

第十二章
勇躍サン・ビセンテ出発

わたしたち小船の一隊は、まず、約七十マイルさきにあるポルトガル人の開拓地サン・ビセンテに行くことにした。
サン・ビセンテ村にたどりつき、ポルトガル人たちに事情を話して、一隻の船を借り受けたいと思った。もし、この相

談が成立すれば、隊員全員を収容できるし、何かと心強いので、ここは是が非でも、その交渉を成立させたいと望んだ。

ボートはこの地ただ一人の案内人、ロマーノによって出発した。二日半を航海して、アルカトラーゼス島に到着した。島には、ちょうど産卵期にある巨大なあほう鳥が群をなしていた。この鳥は動作が緩慢なため、簡単に捕獲することができた。

その上、美味な卵を何百個も、たちどころに集めることができた。夕食は、まるでヨーロッパの一流ホテルの晩餐のような豪華なものとなり、一同久しぶりに顔をかがやかせて食事をとった。

ところが、にぎやかな夕食が終わったころ、南方より強風が吹きはじめ、大暴風雨の襲来が予想された。

わたしたちは、大急ぎでボートを岸より沖の方に出さねばならなかった。それは、わたしたちの船のような小船は、突風にあふられて岸の岸壁にたたきつけられ、みじんに砕ける恐れがあるからである。

わたしたちは、思い切って、強風と荒波をつき、次の目的地カナネーア港にむかうことにした。一同励まし合って出発し、星一つないまっ暗な空、逆巻く激浪に立ちむかった。

わたしたちの船はまるで一枚の木の葉のように波に翻弄され、たれの顔もまっさおとなっていて、目前に死をむかえたような表情をしていた。

しかし、こうした場合、わたしたちは、陸地より離れなければ危険であることを、長年の体験によって知っている。陸地より離れれば離れるほど、波はいっそう高くなるのではあるが……。

こうした絶望と焦慮を繰りかえしているうちに、夜はしらじらと明けてきた。波は静まるどころか、いっそう荒れに荒れるばかりであった。

ふと一人が気づいて見ると、ボートはいつの間にか陸地を余りにも沖に押し流されていた。帆柱の頂上によじのぼってながめても、一片の陸地さえ見ることはできず、見えるものは、ただひょうぴょうたる水ばかりであった。その上、暗雲はいよいよ重苦しくのしかかってきて、遠望がきかない。

中央の板ぎれに乗っているのが，ハンスターデン，左側上部に見えるのがベルチオーガ，上部中央にまるく見えるのがサン・ビセンテ島，ひょうたん型に見えるのがサントアマーロ島，スペイン人たちが上陸しているところがイターニャエーン。

一同は途方にくれ、ただ大洋の荒波にもまれ、流されるにまかせるほかはなかった。この荒天に船はくつがえりもせず、

浮かんでいることが、むしろ奇跡のようにさえ思われた。

十数時間をこうした状態で過ごすうち、雲は少しつつ晴れはじめ、やがて広びろと海上を見渡すことができるようになった。わたしたちは必死になって、四方に陸地を求めて見張った。

すると、はるかかなたの水平線に、かすんだ影のように陸地が見えた。案内人のロマーノは、「あれは確かに目ざすサン・ビセンテの山かげだ。あの山の右側に入れば、必ず到着する」と告げた。わたしたちは彼の言葉に従い、遠い水平線の山影を目ざして、ボートを進めていった。だが、悲しいことに、ロマーノは見あやまったのである。そこには、わたしたちを第二の悪魔が待ち受けていたのであった。

しかし、ロマーノもわたしたちも、神ならぬ身の知るよしもなく、一心にこぎ進んでみると、それは港ではなくて、前面に立ちはだかる岸礁の厚い壁で、荒披がしぶきをあげてたけり狂っている岩の山であった。これを見て、わたしたちは、不覚にも魔の入江にボートを乗り入れてしまったことを知ったのである。

「しまった」

と、みなが気づいた時にはすでにおそく、わたしたちのボートは、まるで吸い寄せられるように岸壁に走り寄り、あっというまに、身をたたきつけた。ボートは文字通り、こっぱみ

じんになって、砕け散ったのであった。
万事休す。ついに最後のボートも大破してしまったのである。だが、わたしたち一同は、ボートが魔のふちにはまり込み、岸礁にたたきつけられると見た瞬間、そこはいずれも海の古つわ者、ちゅうちょなく、一せいに海に飛び込んだのであった。ある者は、船の破片にすがりつき、泳ぎに自信のある者は、岸にむかって泳いでいった。

こうして、一人残らず、陸に上がることができたのは、不幸中の幸い、というべきであった。
わたしも木片にすがって、疲れたからだを陸にはらばわせることができた。
「ああ、助かった」
と思った時、からだの力が一時に抜け去って、砂浜に立ち上がることもできず、しばらく、そのままの姿で目をつぶっていた。そして、神の愛の手によって、生命を得たことに思いをはせ、神の御名を唱えたのであった。

第十三章
難破　せ　る　と　こ　ろ

わたしたちは互いに名を呼び合って、その無事をよろこん

だ。しかし、案内人ロマーノの不覚により、命の綱とも頼むボートを失ったことに大きな落胆を感じた。そして、このわたしたちのいる所は、いったいどこなのか、目ざすサン・ビセンテは、どの方角にあるのか、さっぱり見当もつかなかった。

わたしたちの仲間にクラウジオというフランス人がいた。彼は非常な寂しがり屋で、いつも仲間から冷笑をうけていたが、寂しさに堪えられないのであろうか、海岸を一人走りまわっていた。

彼の姿が見えなくなって、一時間も過ぎたころであった。大声をあげて駆けもどって来た彼は、息せき切って、どなった。

「おうい、人がいる、人が……白人が大ぜいいるぞ」

わたしたちは、それを聞いて、彼は気が狂ったのではないかと思った。しかし、彼の声は真剣なひびきをもっていたので、その指さす方向に行くだけは行ってみることにした。

行ってみて、彼の言葉が真実であることを知った。そこはイターニヤーエン（土語で、石の平の意）で、ポルトガル人たちによって、ささやかな部落が作られていた。

わたしたちを見て走り寄って来たポルトガル人たちは、話を聞くと、わたしたちに対して、大いに同情した。そして、各自の家に案内して、火をたき、ぬれた衣類をかわかしてくれた。また暖かい食物をたいてすすめてもくれた。

こうして、四、五日滞在するうちに、一同は元気を回復し、

陸地つたいに、さほど遠くないサン・ビセンテ村まで行くことができた。

サン・ビセンテ村では、ポルトガル人たちの仕事を手伝って、食料の供給を受けた。わたしたちが、インベアサンペー港に残して来た仲間の事を話すと、村の隊長、アントニオ・デ・オリベイラは、さっそく船を仕立てて、迎えに行ってくれた。

このサン・ビセンテ村のポルトガル人の親切は、今も忘れることができない。

第十四章
サン・ビセンテ村

サン・ビセンテは、大陸にあまり遠くない距離にある島で、その中央にポルトガル人たちは二つの小部落を作っていた。ポルトガル人は、その一つをサン・ビセンテ村とよび、土人たちは、ウパネーマとよんでいた。他の一つの村は、ウパネーマより二マイルばかり離れていて、土人はエングウアガガスーとよんでいた。そこには、ほかに小さな畠もあって、ポルトガル語で、エンジエニヨといわれ、砂糖を製造していた。

この島には、奥行き七十マイル、海岸の幅四十マイルを勢力範囲とするトピニンキン族という土人が住んでいた。わたしたちが行ったころは、すでにポルトガル人とこの土人たち

は融和していたが、最初この島にポルトガル人が上陸したころ、この種族に捕えられ、何人かのポルトガル人が食われたとのことであった。

ポルトガル人たちの話すところでは、この種族の住む所より南方に行くと、カリジョー族がおり、北にはトーピナンバー族がいる、これらの種族は強大で、トピニンキン族にとってはタバジヤーラ（土語で敵という意）として、手ごわい存在であった。

これまでにも、トピニンキン族は、これらのタバジヤーラと、十数年の長い期間にわたって、幾十回となく戦闘を繰りかえして来ているとのことである。そして、互いに戦闘によって捕えた捕虜は、片はしから食料としているとのこと、その数は恐らく数えきれまいとのことであった。

また、最近は、カリジョー・トピナンバーの土人たちは、トピニンキン族とよしみを通ずるポルトガル人たちをもねらいはじめ、サン・ビセンテ村は、いつ、彼らの攻撃を受けるかわからない。そこで、特に子供や婦女は、いつもびくびくしている状態である、とも語っていた。

第十五章

食人種トピナンバーの襲撃

サン・ビセンテ村より約五マイルの地点に、もう一団のポルトガル人が住むベルチオーガ村がある。ここには、多くのマメルッコ（ポ語土で人と白人との混血児の意）がいた。

このマメルッコの中に五人の兄弟がいて、長男はジョン・デ・プラーガ、次男はデイオーゴ、三男はドミンゴス、四男はフランシスコ、そして末弟はアンドレーといった。父はポルトガル人でデイオーゴ・デ・ブラーガといい、けいけんなキリスト信者であり、母は土人であった。

わたしたちが、ここに来る二年ほど以前の事であった。このポルトガル語と土人語をよくもやつるクリスチャンの混血児五人が中心となって、マメルッコたちを集め、このベルチオーガ（土語でボラの巣という意）に、ホルテ（ポ語で要塞の意）を築いた。

それは、このベルチオーガの地形が天然の要塞になっており、宿敵トピナンバー族の南下を食いとめるのに格好の地であったからである。

要塞を築いたといっても、土人一流の方法によるもので、もちろん幼稚なものではあるが、彼らなりに苦心を重ね、大木や土砂を積んで堅固なホルテを作った。

この要塞の構築を、日ごろから見張りを出してひそかに看視していたのは、村から約二十五マイルほど離れた地に住むトピナンバー族の一団であった。

トピナンバー族というのは、幾十種族もいるブラジル土人

種族の中で、最もからだが強大で、精悍無比、好戦的な種族である。男子は戦場にしかばねをさらすことをもって本懐とし、死を恐れない勇敢さは、想像に絶するものがあるといわれている。

そこで、ポルトガル植民者はもとより、近隣の他種族も、トピナンバー族を最も恐れていた。

このトピナンバーの大軍が、ある夜、七十五隻の大型カヌーを連らねて、ベルチオーガに攻め込んできた。

かのマメルッコたちが、苦心惨胆して築いた要塞を一挙に粉砕しようと、猛烈な夜襲をかけて来たのである。

そこで、マメルッコとポルトガル人たちはいっしょうけんめい防戦につとめ夜戦を展開したが、敵は目にあまる大軍であって、衆寡敵すべくもなく、戦いは大敗に終わった。

トピナンバーによって家屋は焼き払われ、部落の者は全部とらえられた。そして、男子の老壮青年者は、ことごとく頭をたたき割られ、目をえぐられ、手足を斬り離されて、殺された。若い女たちは片はしからはずかしめられて後、小児とともにくびり殺されてしまった。こうして、ベルチオーガ村は、血の海となって、さながらの地獄絵の姿となった。

第十六章
荒廃したベルチオーガ

ベルチオーガがトピナンバー族によって、全滅されたという急報を受けたポルトガルの軍令部は、ただちに緊急参謀会議を召集した。将軍たちの意見を総合すると、「ベルチオーガは、戦略上重要な地点なので、これまでにも増した堅固な町を建設すべきである」ということになった。

そして、この案は、ただちに実行に移され、まずポルトガルの兵隊が、多数ベルチオーガに派遣された。

一方トピナンバー族は、早くもそれを知って、今度は、深夜に乗じて、外海とサン・ビセンテに通ずる細長い入江から急襲して来た。ポルトガル兵は、有力な火器にたよって、防禦を怠っていたところ、たちまち打ち負かされて捕らえられ、みなごろしにされてしまったのであった。

ポルトガル軍は、この知らせを受けて驚いた。軍司令部では、再び会議を開き、今度はベルチサント・アマーロオーガ

トピナンバー族の襲撃に応戦するポルトガルとトピニンキン混成軍。右下部に立ち上がって砲をかまえているのがスターデン。中央の島の右上部に家があり，その下に，「この要塞にスターデンがたてこもっていた」と書いてある。

島の前面にあるサント・アマーロ島に堅固な要塞を築くことに決した。

もともとこのサント・アマーロ島は戦略上重要視されていて、すでに要塞構築に着手していたのであった。しかし、いつの間にか、工事半ばで放棄の形になり、今日にいたっていた。そこで、これに補強工事を加え、いっそう堅固なものにすることになった。

この事が決定した時、ちょうど、わたしたちがサン・ビセンテに滞在していたのである。そして、これにわたしがかかわりをもったということが、大きな運命の転機となったのであるが、神ならぬ身の知る由もなかった。

ポルトガル軍の司令官は、二度の敗戦によって、植民者たちの信を失いかけていた。名誉回復のためにも、この要塞の補強を完了し、すぐれた戦術家を配置して、トピナンバー族の侵入を食い止めたいと考えた。また、植民者たちも、この要塞を守る適材について、物色していた。

そうした彼らの目に止ったのが、わたしであった。というのは、わたしがドイツ人であり、砲術に関する技術と要塞構築に多少の知識とを持っていたからであった。

司令官および植民者の懇望もだし難く、わたしは、一応、その要塞を下検分して後、諾否を決めることにした。

司令官は、「もし、この要塞の防禦指揮に就任してくれれば、十分の報酬をし、かつ、ポルトガル本国政府に連絡して、そ

の功労を認めてもらい、叙勲のことも考慮する」という。
植民者も熱心に、わたしの決意をうながしたので、どの程度に要塞を補強し、どのくらいの兵力を配備するかを考えたいと、要塞に出かけてみた。
その結果、わたしは、まず、試験的に四か月だけ、この重任を引き受けてみることにした。
要塞というと、その名ははなはだりっぱであるが、実は名ばかりで、石材などほとんど用いられていない。ドイツの本格的な石造りの要塞を知る者には、ただの小屋というほかはないしろものであった。
こんな不完全な要塞で植民者の安全を守ることなど思いも及ばないので、わたしは、その旨を明らかに告げ、直ちに本格的要塞の構築を建策した。司令部では、この建策をいれて、本国よりの連絡船の到着次第、政府に申請して、構築費をあおぐ事を決議した。
わたしは、まず二名の部下を連れて、その丸太小屋の要塞に居を移した。そして、昼夜交代の見張りを立て、トピナンバーの行動を看視した。
ここで、わたしに予想されることは、トピナンバーが、この要塞の直下にある入江を通過してまたまた植民地を襲いはしないか、ということであった。
この予想は当たって、三、四回にわたり、トピナンバーは夜ひそかに、そこを通過しようとしたが、わたしの立てた見

張りの兵は、これを直ちに発見した。わたしは、すぐに砲門を開いて、彼らを常に撃退したので、事なくて終わった。

こうして、約三か月経過した噂、ポルトガル本国より初代の総督として、トメ・デ・ソーザが着任した。

総督は、わたしを招いて、大いに賞賛して功を認めてくれた。また司令官の要請をいれて要塞を補強するため、要所々々を熱心に視察した。

わたしは、約束の期間四か月が終了したので、任務を解かれるよう総督に依頼したが、聞き入れられなかった。是非とどまるようにとすすめられ、やむを得ず、二か年の契約で再び要塞にとどまることになったハ一　その契約書に、トメ・デ・ソーザ総督はポルトガル王の名によって署名し、わたしは二年の契約終了後、第一の便船でドイツに帰国するということも明記したのであった。

この契約書にわたしの署名が終わると、総督は大いに満足の意を表し、要塞の補強に着手した。今度の要塞は、巨石をもって構築され、かなりの程度に補強されたので、わたしは砲六門を備えて、要塞守備に万全を期したのであった。

第十七章
トピニンキンの恐怖

悪鬼のような暴虐さで、ポルトガル植民者や、他種族に恐れられているトピナンバー族の主力が、トピニンキン族の部落を襲うのは定期的といってよいくらいであった。その時期は大体、八月から十一月である。

というのは、十一月にはアバチー（土語でとうもろこしの意）が黄色に熟する時で、土人たちは、その時を楽しみにして待っている。

マンジョオカ（ブラジル産の木いも）の粉の中にアバチーをすりつぶして入れ、カウイン（土語で酒の意）を作る。彼らは、このカウインが大好物である。

他の種族を襲い、戦いに勝って大ぜいの捕虜をつれて帰ると、部落総出で、戦勝を祝う大焚火のまわりを取り囲み、飲めや、歌えの大饗宴を行ない、夜っぴいて踊り狂う。カウインを飲み、捕虜を火あぶりにして食い、酒と肉にたんのうして、英気をやしなうのである。

また、八月に襲撃するのは、その時期に土人たちがピラチーとよび、スペイン人はリーザとよぶ魚（ボラの一種）が、産卵のため、大挙して入江の河口に集まるからである。この魚は、長さ約四十センチぐらいで、土人たちの幼稚な捕獲法によっても大量にとらえることができる。彼らは、この魚肉を乾燥させ食料とレて保存するのである。また、ピラクイー（土語で魚粉の意）としても保存する。

この魚をうるために、その入江の河口を領土とするトピニン

キン族を襲うのである。

第十八章
ハンスターデン、土人の捕虜となる

わたしは忠実な一人の土人従卒をもっていた。彼は、なかなか気のきいた者で、カリジョー族の若者であった。彼は狩猟が待意で、時々出かけ、たくさんの獲物を持ち帰ることがあった。わたしも余暇をみては、彼とともに森の奥へ猟に出かけるのを楽しみにしていた。

ある日の事であった。不意に思いもかけない珍客の訪問をうけた。珍客というのは、ベルチオーガ島より約五マイルの地点にあるサン・ビセンテ島より来た人である。一人はスペイン人で、いま一人はわたしと同国のエリオ・ドウルス君で

中央サント・アマーロ島にて，トピナンバー族に捕へられたハンスターデン，左がベルチオーガ。ボート内にて連行されるスターデンが，立ち上がって神に祈っているところ。

あった。彼ら二人はいわゆる馬が合うのであろう。働き場所も同じエンジエーニョ（製糖工場）である。

彼エリオ君とは、ただに同国人というばかりでなく、かって、わたしたちの船が難破した時から親しんで来た。あの時、彼が親身になってわたしをいたわってくれたことを忘れない。今度の来訪も、風のたよりに、わたしが病床にいると聞いて、見舞いに来てくれたのであった。彼ら二人ながら、ほんとうに心の美しいのクリスチャンである。

ちょうど、わたしはきのう兵隊に命じて狩りをさせ、おいしい獲物の肉をある場所にかくしておいたことを思い出した。これを取り寄せて、珍客たちにふるまいたいと思った。そこで、わたしはただ一人、森の奥深く分け入ったのであった。

森の小道を歩いていると、不意に周囲から歓声がわきあがった。これは土人たちが敵を攻撃する時に必ずあげる一種の掛け声である。幾十人かのトピナンバーたちが、手に手に弓矢や太いこん棒を持って、わたしを、どっと取り囲んだ。

不覚にも、わたしは素手であったためどうすることもできない。「神よ、われを守り給え」と叫んだが、土人たちは、ようしゃなく、わたしの左右の腕をとらえ、わたしのシャツを引き裂き、次にズボンを引き破って地面に手荒く押し倒した。そして、頭部や顔面を力まかせになぐりつけ、そして所かまわず足げにした。

気がとおくなったまま、地面に倒れていた。ふと気がつく

と、土人たちは、わたしのかたわらでさかんに議論をしていた。それは、わたしをこの場で殺してしまうか、それとも捕虜として連れて帰るかということを論じているのであった。

やがて、話がまとまったのか、中の一人がいきなりわたしを肩にひっかついで、海岸目がけて一散に走りだした。海岸の森の木かげに岩が幾つもあって、その岩かげから幾十人もの土人が、眼を光らせていた。わたしをかついで来た味方を見ると、どっとはせ集まって来た。

彼らは、戦闘に出る時の常として用いる羽根の腰かざりをつけ、頭にも羽根の装飾物をかぶっていた。

口々にわたしをののしっていたが、中の幾人かが、いきなりわたしの腕にかみついた。これは、「もし逃亡したら殺して食うぞ」という意味の示威である。

トピナンバー族一隊の首領は、手にタカペー（土語で敵の頭をたたき割るこん棒の名）を右手に持ち、隊員にむかい激しい調子で言った。「今われわれは、ここに一人の憎むべきペロー（土語でポルトガル人の意）を捕えた」と。すると隊員の中から「わが愛する兄弟を何百人も殺した、こんちくしょうめ」と憎悪に満ちた声が、わたしに飛びついてきた。そして、力まかせに、わたしをなぐりつける者もあった。

やがて、木かげにかくしてあったカヌーを引き出し、その中にわたしを押し倒し、からだをしばりあげた。そして、彼らも、それぞれのカヌーに分乗して、沖を目がけてこぎ出し

た。
その時、わたしの遭難に気づいたわたしの部下たちが、威嚇の意味で大砲を二発ほど放ったが、その時は沖はるかにカヌーは浮かんでいた。
それぞれのカヌーに乗っている土人たちを見ると、それは、各種族の混成であることを知ったが、それも、ただそれだけの事であった。
こうして、とある海岸にカヌーは引き上げられた。ある者は、「何の獲物も持たず部落に帰ることはできない。ここで、このペローを殺し半分だけくれないか」と言い出し、彼らの間で口論があった。ついに酋長が、「この捕虜はまだ生きがよい。部落に連れて帰ることにする。そして、喜びを皆で分けようではないか」と言い、これで結着がついた。

第十九章
ああ、ついに万事休す

要塞の構築してある島の近くにグワラーという小さな島があり、そこにグアラース（さぎの一種）とよぶ水鳥が多くすんでいた。わたしを捕えて来たトピナンパーたちは、たずねた。
「トピニンキンの奴らは、もうあの島に渡り、グアラースの羽

棍を採取したかどうか、うそを言うと許さないぞ」
「ああ、トピニンキンたちは、もうとっくにあの島に渡ったよ」
わたしは、こう答えてやった。
土人たちが、なぜ、そんなにグワラー島のことを気にかけるかと言うと、この島にすむグアラースの羽根は非常に美しくて、土人たちの装飾品として、なくてはならぬものだからである。
このグアラースという鳥は実に妙な鳥で、成鳥になるまでに三度羽根の色を変えるのである。生まれた時は白色の勝った灰色で、一年ほど過ぎて、空に舞い上がるころになると暗灰色に変わる。そして、成鳥になると、燃えるような真紅の羽根を持つのである。
トピナンバーたちは、グアラースを捕えようとして、用心深く島にむかって海岸を進んでいた。ふと前方の丘を見ると、そこにはトピニンキン族が、立ち並んで、矢をぴたりとこちらにむけて、今にも一せいに射ようとしていた。驚いたトピナンバーたちは急いで逃げだした。

トピナンバーに捕虜にされたスターデン。足に負傷しているので立てず，一心に神に祈っている。

わたしは、トピニンキンを指揮しているのは、ポルトガル人であることをとっさに知った。わたしを助けに来てくれたのだと思った。「おれはここに居るぞ」と大声で叫びたくなったが、もし声を挙げればかたわらのトピナンパーに殺されるのは必定、のどもとまで出て来た声をのんで黙っていた。

丘の上のトピニンキンたちは、大声でどなっている。

「逃げるのか、憶病者のトピナンバーめ、勇気のあるやつはかかって来い」

一たん逃げ腰になったトピナンバーたちも、あざけられたので、また引きかえし、丘にむかって矢を射はじめた。トピニンキンたちも応戦しはじめた。見る見るうちに五、六人のトピナンバーが射倒された。かなわじと見て、もとの場所に引きかえし、岩かげのカヌーに分乗して、外海にむかってこぎ出した。わたしももちろん、彼らのカヌーの中の一隻に乗せられ、連れ去られたのである。

これを見たトピニンキンたちは、海岸まで追いすがり、集中攻撃を行ない、ポルトガル人も銃をもって射撃した。また要塞からも大抱を放ったが、目標をはずれた所に弾は落下して、なんらの威力も発揮しなかった。

そのうちにも、彼我の距離は見る見る大きくなり、いったんはカヌーに乗って、追跡して来たトピニンキンたちも、陸地に引き揚げてしまった。

こうして、わたしは、狂暴な食人種トピナンバーの捕虜と

なり、いつ命を奪われるかも知れない運命に陥ったのであった。

第二十章
トピナンバーに連行さる

わたしを乗せたカヌーは矢のように海上を走り、約七マイルはなれた海岸にこぎ寄せられた。彼らはわたしの両腕をつかんで引き立てた。

しかし、わたしは捕えられた時、顔をしたたか打たれたので両眼がはれあがり、前方をよく見ることができない。その上右足にも負傷しているので、一人で立つことができず、よろよろとして、砂上に倒れてしまった。

トピナンバーたちは、えい面倒と思ったのか、わたしをかついで行って、海岸の木の下におろした。トピナンバーたちの荒々しい行為を見ていると、自分の哀れな境遇が思われて心細く、涙が流れた。

わたしは心の中で、神の御名を唱え、「神よ、助け給え」と祈らずにはいられなかった。

彼らは、この浜べで夜を明かすことになったのか、さらに森の奥に進み、やがて、小さな小屋に到着した。これは、彼らが森の中に前もって造って置いたものとみえ、たれ一人居

らぬ無人の小屋であった。
夜になると、彼らは、その小屋の中にはんもっくをつって眠り、わたしは小崖のそばの太い樹にしばりつけられたまま眠った。
朝になった。五時ごろ彼らはみな眼をさまして、各自のカヌーにもどり、再び海上にこぎ出した。そうして、一日中、こぎにこいだ。ところが、突然はるか西方の空に黒雲がわきあがって、今にも大暴風雨になろうとする様子が見えた。すると土人の隊長が、手まねで、「白人には神があると聞いている。その神に、あらしを迫い払うよう願ってみろ」と言う。わたしも、仕方がないので、両手を合わせ、静かに十字をきって神に祈りをささげた。何度も繰りかえして祈っていると、不思議にも、低く垂れこめていた暗雲が吹き払われて、空が晴れ、日が照りはじめた。
土人たちはこれを見て、口々に「オクアー、アモン、マナスー。」（土語で風雨は去ったの意）と叫び、大いに喜んだ。
二日目の夜、カヌーは岸に漕ぎよせられ、前日のように彼らは森の中の小屋に眠り、、わたしは、大木にしばりつけられたまま眠った。しかし、わたしは、不安と極度の疲労から、一睡もせずに夜を過ごしたのであった。

第二十一章

土人部落での最初の日

夜が明けた。またカヌーに乗せられ海に出た。そして、太陽が空高くのぼったころ、カヌーは岸べにこぎ寄せられ、いよいよ彼らの部落に連れて行かれたのであった。わたしがベルチオーガの森の小道で捕えられてから、ちょうど三日目である。この三日間の苦しみは何にたとえることもできない。頭はなまりのように重く、からだ全体が紫色にはれあがって、ずきずきと痛んだ。

しかし神は、まだわたしを見捨て給わなかったのである。なぜならば、この苦しみは死にまさるかも知れないが、少なくとも、わたしはまだ死んではいないのである。ともすれば、失心しそうな状態であったが、わたしはわたし自身をむち打って、「ハンスターデン、お前は死んではならない。勇気を出せ」と何回も自分を励ました。

わたしは、そして、はじめて、トピナンバー族の部落を見たのである。

彼らの部落は小さなものであった。長方形で長さ十五メートル、幅七メートルぐらいのものであった。そこに丸太と椰子の葉で作った家屋があり、彼らは、この家屋をウバツーバとよんでいた。地点は海岸より二百メートルぐらいの所で、部落の人数も三、四十人そこそこであり、女や子供が多かった。

わたしたちが到着した時、彼女たちは、マンジョオカを植

えるため、畑を耕していた。
土人たちは、彼女らにむかい、大声でどなった。
「アジユ・ネエ・ペエエー・トミウラマ」（われわれは帰って来たぞその意）。
そして、青い目の背のひょろ高い捕虜が連れて来られたことは、またたく間に知れ渡った。女・子供・老人たちまで、どっと声をあげて、わたしのまわりに走り寄って来た。そして物珍しげにわたしを見ていた。まるで、わたしは見せ物である。
土人の男たちは、わたしをしばったままほうりだして、各自家に帰った。女や子供は、やがて手に手に棒を持って来て、わたしの首といわず胴、手足を打ったり、髪をつかんで引っぱったりした。中には、わたしのからだにつばきをはきかける者もあった。後には、皆で声をそろえて、動物とも人間ともつかぬ奇妙ななき声を張りあげて、ー　これは多分歌っているのであろう　ーうれしげな表情で、手をたたき足を踏みしめて、わたしのまわりを踊りまわるのであった。これは、彼女たちの戦勝祝賀の会であったのかもしれない。
一時間あまり過ぎて、この奇怪な儀式（？）が終わると、今度は、わたしをかつぎ上げ、カイサーラ（土人部落のまわりにめぐらせてある木柵のこと）のそばに持って行った。そして再び足げにしたり、つばきをはきかけたりして、「シエーアナマ・ポエピカー・アエー」「シエーアナマ・ポエピカー・アエー」（土語で、このこぶしで、わが愛する同志を殺したやつ

に復響してやるぞ！　の意）と、口々に叫んだ。

今度は、わたしの手どり足どりして、彼女たちの家の中に運び入れ、土間にほうりだして外に出ていってしまった。わたしは半ば気を失っていたので、これらの出来事を夢うつつのように見、されるがままに身をまかせていた。

一方、土人の男たちは、ショッサ（木柵の意）の中に集まって、カウイン（土語で酒の意）を飲み、マラカー（土人の神）を拝んで、異様な節と調子をつけた歌を合唱していた。

第二十二章　プレゼントとして引渡される

わたしは、こうした彼らのふるまいを見て、それは、やがてわたしを殺すその前に行なう演技であろうと思っていた。ところが、それは彼らの風習を知らなかったからで、実は、そうではなかった。

ハンスターデンが捕えられていたウバッーパ村の内部。右側は女たちの手によりまゆをそり落とされているところ。

わたしのそばにやってきた二人の土人は言った。

「お前をおれたちのおじさんにみやげとして贈ることにしたから、そのつもりでいろ」

この二人はナエポーオアスー（土語で、大きな深い鍋の意）とアルキンダル・ミリ（土語で小さな木鉢の意）という名の兄弟であった。彼ら兄弟のおじは、イピルー・グアスー（大きな蟻の意）という名であった。彼は、「もっとよくふとらせてから食べよう。そして、皆さんからあだ名をもらうのだ」と言った。（土人たちは、捕虜一人を殺すごとに一つづつ新しいあだ名をもらい、それが多ければ多いほど名誉としているのである。）

無理やりに女たちの間に立たされ，頭上に羽毛のかざりをかぶせられて，踊っているスターデン。

なぜ、わたしが、兄弟からおじに渡されたのかというと、以前にこのおじが捕虜を一人連れて来た時、それを友情のしるしとして、おいのアルキンダル・ミリに贈った。アルキンダルは、大ぜいの前で、その捕虜の頭をたたき割り、その勇敢さを皆から賞賛されて、りっぱなあだ名をもらったのだった。

その返礼に、今度兄弟が捕虜を連れて来た時、それをおじに贈る、という約束ができていた。

その約束どおり、わたしがおじに贈られたということなのである。

それはまるで、豚一頭をやり取りするのと変わらない、むぞうさな気持ちでいる彼らである。

二人の兄弟は、わたしにむかって、「女たちがお前をポラセーに達れて行く」といった。ポラセーとは何の事かわからなかったが、後になって、それは土語で、踊り楽しむことであることがわかった。

女たちは大騒ぎをしながら、わたしの首にかずらで作ったなわをかけ、そのはしを持って、家の外に引きずり出した。地面をずるずる引きずられるので、わたしの首の皮膚は破れて血が流れ、息がつまって死にそうであった。しかし女たちは、わたしの苦しみにはとんちゃくなく、どんどん引っぱって行く。

その時、わたしは、十字架にかけられた受難のキリストを想起した。わたしのこの姿は、余りにもキリストの悲しい姿に似てはいないかと思った。わたしは、キリストのように偉大ではないが、キリストになぞらえる事によって、苦しみに耐え、平静を保ちたいと努力したのであった。

女たちは、わたしをついに、グワチンガ・アスー酋長（土語で大白さぎの意）の家の前まで引きずって来た。酋長の家

の前には、新しく掘った土がこんもりと盛り上げてあり、その上にわたしをすわらせた。わたしは、いよいよ最期の時が来たと思い、観念のほぞをかためた。

すると、一人の女が水晶のかけらを木片にくくりつけたものを持って来て、それに水をつけ、わたしのまゆ毛を、ごりごりとそり落とした。次に、わたしが大切にして来たひげをそりに取りかかった。わたしががん強に抵抗したので、女は笑いながら、やめてしまった。

そして、二、三日小屋の中に放置され、わたしは無事であった。その間、毎日、毎晩、身の無事を神に謝していた。四日目の朝、女はさびついたはさみを持って来て、今度は無理にもわたしが自慢してきたひげをすっかり切り落としてしまった。

そのはさみは、時々海岸に立ち寄るフランス人との物々交換で手に入れたか、あるいは、ポルトガル人の部落を襲った時、盗んで来たものであろう。

第二十三章
マラカーを囲んで踊る女たち

女たちは土まんじゅうの上にまたすわらせた。そして、わたしの前にマラカー（土人の守護神をかたどる土偶）を置き、

わたしの頭に、おおむの羽で作ったアラソイアー（頭飾りの意）をつけた。それから今度は、わたしを立たせ、両ひざに鈴をむすびつけたのであった。

女たちは、声を合わせて歌をうたい、わたしには、歌の拍子にあわせて足踏みをすることを命じた。わたしが足踏みをするとひざがしらに取りつけた鈴は、シャンシャン鳴り、女たちの歌は、いよいよ高潮していくのであった。

しかし、鈴を鳴らしつづけることは、わたしにとって、耐え難い苦痛であった。捕えられた時ぅけた傷は、まだなおりきっていないので、足踏みのたびに頭にひびく痛みが全身を走った。でも女たちは容赦なく、少しでも怠ると、怒声をあげて、わたしに足踏みをうながし、やめさせないのであった。

第二十四章
イピルー・グアスーに連行さる

女たちの踊りが終わって、わたしはイピルー・グアスー酋長の手に引き渡された。それから後、彼の厳重な看視下におかれることになったのである。

土人たちは言った。

「まだすぐには、ささまを殺さない。数日の問は生かしておくのだ」

そして、部落の小屋にあるマラカー（神の偶像）を全部持ち出して、イピールー・グアスーの家に置いて行った。その時、彼らは、「このマラカーの神様が、この前ベルチオーガのポルトガル人を襲った時、必ずポルトガル人を捕えることができると予言したのだ。やはり神の予言は当たって、お前を捕えることができた。だから、お前をいけにえとして、神に供えるのだ」と言った。そこでわたしは、聞き覚えの土語に手まねをまぜて言った。

「お前たちの神に、そんな予言をする力などあるものか。お前たちは、わたしをポルトガル人だと思っているようだが、それはまちがいだ。わたしは、お前たちと仲のよいフランス人の友だちであるドイツ人なのだ」と言ったが、土人たちは信じなかった。

土人たちは、一年に一回ぐらい、海岸に来るフランスの海賊たちと、物々交換をしていた。彼らは安物のおの・小刀・ガラス玉・はさみなどとピメンタ（ポ語でこしょうの意）・毛皮・ブラジルの木などと交換していたのである。

トピナンバーは、そのため、フランス人には好意を持っていたが、その反面、ポルトガル植民者には、自分の領土を奪う憎むべきものとして、反感をいだいていた。

また、彼らがポルトガル人に憎悪を燃やしているについては、次のような事も理由になっていた。

数年前、この海岸に近づいた船をトピナンバーたちはフラ

ンス船と見て、物々交換のため、カヌーをこぎ寄せた。ところが、それはポルトガル人の船で、彼らが船に全部乗り移ると見るや、ポルトガル人たちは、いきなり彼らを捕えて片はしからしばり上げ、何百年来の彼らの宿敵トピニンキン族に引き渡した。そこである者は殺され、ある者は奴隷にされてしまった。また、ポルトガル人は、トピニンキン族をそそのかして、トピナンバー族の部落を襲撃させたり、部落を砲撃したこともたびたびだったので、トピナンバーのポルトガル人に対する恨みと憎しみは、いよいよ深いものとなっていたのである。

第二十五章

復　讐　の一念

わたしを捕えた土人の兄弟は、部落でも指折りの戦士だった。この兄弟の語るところによると、前述のポルトガル人たちに襲撃された時、この兄弟の父が傷つき、それが原因となって死亡した。そこで兄弟は父のかたきを討つことをマラカー（神）に誓った。こうして、さきのベルチオーガ攻撃となったのであった。

そして、わたしが捕えられたのであるが、ポルトガル人と見あやまられているわたしこそ災難である。

わたしは、そこで、ポルトガル人ではないこと、スペイン

船に乗り組んで来た者であり、サン・ビセンテ沖で難船したドイツ人であることを必死になって言いたてた。
このわたしの言葉をかたわらで聞いていた一人の土人青年が、サン・ビセンテ沖で、スペイン船の難破したことがあると証言した。この青年は当時、アントニオ・アグイデンというベルチオーガの富裕なポルトガル人に奴隷として使われていて、スペイン船難破の事実を知っていたのであった。
この青年は、トピナンバーがベルチオーガを襲撃した時に捕えられたが、同族の者であったので許され、現在は部落の一員となっているのであった。
彼らの話すところによると、この部落より数十マイル離れた地にフランス人が数名おり、ピメンタ（こしょう）を採取しているとのことであった。わたしは、このフランス人に、わたしがドイツ人であることを証明してもらいたいと考えた。
わたしは言った。
「そのフランス人を達れて来てくれ。そうすれば、わたしがポルトガル人でないことがすぐわかるだろう」
わたしの真剣な顔を見て、土人たちも、あるいはこの白人のことばはほんとうかも知れない、と思ったのか、すぐにはわたしを殺さないで、またもや厳重な看視のもとに、小屋に入れられたのであった。

第二十六章
フランス人の悪知恵

わたしの捕えられている土人部落より約四マイルの地に、一人のフランス人がいた。彼は土人たちが白人を一人捕えて来ていることをすでに知っていた。

土人たちは、わたしの言葉や態度から、わたしの国籍に不審をいだいた。ほんとうにドイツ人であるかどうかを確かめるため、そのフランス人に首実験をさせることにした。

わたしは、もしそのフランス人がキリスト信者であるならば、わたしがドイツ人であることを証言して、救ってくれるに相違ないと信じた。

土人たちは、わたしを丸はだかにして、フランス人（土人たちは彼のことをカルワター・ウァーラとよんでいた）の所に連れて行った。

フランス人は、わたしを見ると、すぐ早口のフランス語で話しかけて来た。しかし、不運なことに、わたしにはフランス語はわからないので、返事に困っていると、今度は土人たちにむかって、土語で、

「この男はフランス語を知らない。フランス人ではない。ポルトガル人だ。早く頭をたたき割って食うがいい」

彼はいかにも憎々しげに顔をゆがめ、吐き出すように言っ

た。
わたしにも、土語は多少わかるので、彼のことばを聞いて驚いた。わたしは、ドイツ語と土語に手まねなどを加えて、「君の言葉次第なのだ。わたしはほんとうにドイツ人なのだ。助けてくれたまえ」と毎回もたのんだがフランス人は冷然としてことわった。
「だめだね。そんなことはおれの知ったことか」
わたしは、この時、ふっとバイブルの中にある第十七章の唱句を思い出した。
「憎むべきは人が人をさばく事である」
わたしはからだがふるえるほどのいきどおりを感じた。土人がわたしの肩にかけた布を、ずたずたに引き裂き、フランス人の前の地面にたたきつけた。
こうなっては、とてものがれるみちはない。殺されるのは時間の問題だけになった。どうせ殺されるなら、ドイツ人らしく、キリスト信者として恥ずかしくない態度で死んでいこうと思った。
わたしの首実験がすむと、土人たちは、わたしを連れて部落に帰り、またもとの小屋に入れてしまった。
わたしは、もはや、死を観念したので、大声で神をたたえ、地上への別れのことばを述べた。
今こそ願う、天地の神に
すべてのまことと　総べての光を

集め給え。わたしの最期を
今まさに、このあわれなる生と決別の時
アーメン

このわたしの声を聞いた土人たちは、ポルトガル人め、死ぬのが恐ろしくて、わめいていると言いながら笑っていた。
土人たちは、定期的に付近の同族部落の者が集まって行なう祝日に、わたしを殺して食べることに決定した。

第二十七章
死ぬばかりに苦しい歯痛

不幸というものは、つぎつぎに重なるものとみえる。わたしが小屋に連れどもされてから、一時間ほどたって、猛烈な歯痛がおこってきた。その猛烈さは、これまで経験したことのないもので、わたしは、のたうちまわって苦しんだ。
看視に立っている土人は、わたしの苦しみを見、食物をとらぬのを見て、そばに寄って来た。
「どうした。どこか痛むのか」
「歯が痛くて困る」
「そうか、よしっ」
どこかへ出かけたかと思うと、すぐ一人の男をつれて来た。

見ると、その男は、大きな木製のくぎ抜きのような物を持っている。多分歯を抜く道具であろう。わたしのそばに来て口をこじあけ、その道具を押し入れようとする。

こんな野蛮な抜歯をされてはたまらないので、わたしはからだをもがき、口を閉じて、受けつけなかった。すると看視の男は、「お前が食物を食べないとふとらない。早く歯を抜いて痛みを止めて物を食え。いつまでもふとらなければ、殺すぞ」と言って、外に出て行った。

わたしは「おお　神よ、彼らの知らぬ間にわたしの命を断ち、彼らの惨虐な行為からのがれさせ給え」と、一心に祈った。

第二十八章
クニヤンベーバ大酋長と面接

激烈な歯痛に悩んだ日から四日目に、土人たちは、わたしを達れて、他の部落を訪問した。

彼らは、その

アングラ　ドス　レエイス湾に沿うアリラベ村。クニャンベーバ大酋長に両足を縛られたまま謁見させられているスターデン。

村のことをアリラベ村とよんでいた。この村の酋長は、トピナンバー族の問で最大の権威をもち、人望も厚く、近隣に威名をとどろかせていた。彼のことを土人たちはクニヤンベーバ（土語で女が舞うという意）とよんでいた。

彼の家の前はきれいに掃き清められていたので、何か祝宴でもあるのかと思った。わたしたちが到着すると、土人たちは待ちかまえていて、彼ら特有の縦笛のようなものを吹きならし、太鼓を打ちならし、その騒ぎは耳も聾するばかりであった。

彼の家の前方横よりに、高さ五メートルぐらいの木柱が十五、六本ずらりと並べて立ててあった。その柱の先頭には、山ねこの頭を干し固めたものが一つずつつけてあった。

彼らは、それを指さして、「よく見ておけ、お前も、あのようになるのだ」と言う。その気味の悪いことは何ともいえないくらいであった。

それから、次にわたしを一軒の小屋へ連れて行った。小屋の中には、十人ぐらいの小酋長たちが、カウインを飲んで、皆かなり酔っているとみえ、大声で話し合っていた。

わたしを連れていった男は、戸口に立って、「おーい、ポルトガル人の捕虜を連れて来たぞ」とどなった。すると、彼らは一せいに歓声をあげて出て来た。

こうしているうちに、わたしのまわりには部落中の男女、子供、老人が集まった。すると、各小部落の酋長たちは、群衆

の前に一人ずつ立って、つぎつぎに演説をぶっていた。この演説が一通りすむと、酋長の一人はわたしにむかい、「お前は、われわれの敵として、ここに来たのか」と問う。わたしはすかさず、「いいえ、わたしはポルトガル人ではなく、君らの味方として来たのだ」と答えた。すると、「そうか、このカウインを飲め」と言い、彼らの飲んでいた酒を、わたしにも飲ませた。

こういう彼らの態度をみると彼らもそれほど凶悪でなく、やはり人間だということを感じた。

わたしは、このようにトピナンバー族の捕虜になる前、ベルチオーガ砲台の台長をしていたころから、クニヤンベーバ大酋長の名声は聞いていたので、その男は土人ながら、相当の傑物であり、人望のある男に違いないと考えていた。どれがいったいその大酋長かと、注意して見ていると、酋長の一人に、背が高く、眼光の鋭いのがいた。きれいにみがいた青い石片を下くちびるにつけ、貝がらとおうむの羽根、それにトツカーノ（ブラジル産の美しい野鳥）の羽毛でつくった首かざりをつけている。わたしは、これこそ大酋長に相違あるまいと思った。

わたしは、その酋長にむかい、

「あなたが有名なクニヤンベーバ大酋長ですか」とたずねた。

その男は、うれしそうににっこりして、

「そうだ。おれがクニヤンベーバだ」と答えた。

わたしは、それからいっしょうけんめい、彼をほめあげ、大英雄という賛辞を奉った。すると彼は、いよいよ上気げんであったが、次のような事を言い出した。

「お前は、なぜベルチオーガの砲台から、われわれを砲撃したのか、お前のうった大砲の弾にあたって、われわれは同志を数多く失った。それから、われわれの宿敵トピニンキン族と手を握り、われわれを滅ぼそうとした。その後、トピニンキンとポルトガル人たちは、われわれを攻撃するために、どのような作戦を立てているか、それをすっかり話してみよ」

このようなことを言う。それに対して、わたしは、次のように答えておいた。

「わたしが砲撃したのは、君たちを憎んでしたことではない。なぜならば、わたしはポルトガル人ではないからだ。ただ、わたしは仕事として大砲をうったと言うまでだ、わたしが砲術にすぐれた腕をもっているので、ポルトガル人は砲台を守るよう、わたしに依頼した。それも半ば強制的に押しつけたのだ。そこで、わたしも不本意ながら、彼らの命ずるままに砲撃したというに過ぎない。わたしの立場を理解して、許していただきたい。」

クニヤンベーバは、しきりにうなづいて聞いていたが、

「しかし、お前はポルトガル人に相違あるまい。お前の首実験をしたフランス人が、お前はフランス語を知らないと言った。自分の国のことばを知らないという事はないはず、やはり、ポ

ルトガル人と思うはかはない」

クニヤンベーバ大酋長は、どうしても、わたしをポルトガル人だと言ってきかない。

「いや、わたしは、子供の時にフランスから外国に行ったので、残念ながらフランス語はみな忘れたのだ。わたしは、わたしのような境遇からフランス語を知らないフランス人をたくさん知っている」

クニヤンベーバは黙って、聞いていたが、また話をトピニンキン族のことにもどし、トピニンキンとポルトガル人の連合軍の状態についてたずねたり、ポルトガル人は、自分のことを、どのように思っているか、というようなことをたずねた。

わたしは、ベルチオーガ要塞の防備の厳重であること、トピニンキン族が、最近数十隻の大型カヌーを建造していること、などについて語り、正面からの攻撃は困難なことなど、戦術上のことまで話した。

大酋長は、それに対して、自分たちとしては、ちょうどわ

トピニンキン族のウバッーバ村襲撃の図。

たしを捕えたように、一人、二人ずつを捕えたり、殺したりするような戦法を執って、徐々にトピニンキンを滅していくつもりだと語った。

このような、わたしと大酋長との問答のつづく間、他の小酋長たちは黙って熱心に、それに聞き入っていた。また他の男女は、互いにカウイン酒を飲みかわして、陽気な叫声をあげたり、騒いだりしていた。

このようにして、部落中のカウインは飲みつくされ、わたしの大酋長面接は終わった。

土人たちは、さざめきながら、各自の小屋に帰ったが、わたしは動くことができない。わたしの足は、がんじがらめになわでしばられている。看視役の土人が、なわのはしをつかんで、「歩け」とうながすが、とうてい歩けない。うさぎとびで十歩ほど歩き出したが、なわが足首に食いこんでいて、飛ぶたびに、痛みがはげしく、とうとう止ってしゃがみこんだ。わたしは、決して逃げないから、なわを解いてくれと哀願してみた。看視役の土人は、「何もお前だけをこうしてしばるわけではない。捕虜は皆こうしておくのだ。神妙にしろ」と言う。それでもなお、わたしが動かないので、とうとうなわを解いてくれた。

歩いて行くわたしのうしろからは、それでも数人の土人たちがついて来ていた。彼らが話しているのを聞くと、わたし

の頭を指さして、一人は、「あの頭はおれのものだ」とか、もう一人は、「手はおれが食う」という。もう一人はわたしの足をさして「白くておいしそうだ」などと言って、はしゃいでいた。

彼らの話を聞くと、わたしは、まるで豚か、いのししのようである。彼らは、わたしにむかって、ポルトガルの歌をうたえと言う。わたしはほかの歌は知らないので、仕方なく、わたしの最も好きな賛美歌の一節をうたってみせた。彼らは手をたたいて喜び、「その歌は、どういう歌か」と聞く。わたしは、「これは、わたしの神さまの歌だ」と答えると、「お前の神は、テオンウイラ（ろくでなしの意）だろう」と言い、どっと大声をあげて笑った。

その日一日小屋に寝かされ、次の日になると、また他の部落から大ぜいの土人が、わたしを見物にやって来た。かの大酋長もやって来て、看視役に「見張りを厳重にしろ。このポルトガル人は逃亡のおそれがある」そして、わたしを捕えた土人の部落「ウバツーバ村に送りかえさなければならない。それまでに逃がしては困るから」と言った。

きょう新しく、わたしを見物に来た連中も、口々にポルトガル人に対する悪口雑言を吐き、そのたびに、わたしを打ちけり、つばきをはきかけた。わたしの胸は怒りにふるえたが、捕われの身ではどうすることもできない。ただ観念の眼を閉じて耐えるばかりである。

わたしの看視役は案外穏やかな男なので、わたしは聞いてみた。いったいわたしはいつ殺されるのか、そしていつどこで殺されるのか、と。すると彼は、「あまり心配するな。まだまだお前は殺されない」と言った。

第二十九章
トピニンキンの襲来

わたしが、クニヤンベーバ大酋長に尋問された時、トピニンキン族が、十数隻の大型カヌーを建造したと答えたが、ある日、トピニンキン族はウバツーバに攻撃をかけて来た。

夜明けがたトピニンキンは数十隻の大型カヌーに分乗してやって来た。トピナンバー族の部落は、騒然として、混乱をきわめた。伝令は部落々々へ敵軍襲来を告げに走り出す。戦士たちは、弓矢を持って防戦の位置につく。女や子供は、矢を運ぶ。小酋長の命令一下、各自が戦闘の持ち場、持場で、かいがいしく立ち働いている。

やがて各部落から、ぞくぞくと戦士は集まり、大酋長クニヤンベーバも出陣して、見事な戦闘隊形を作り、本格的な攻防戦がはじまった。

わたしは、心中ひそかに、逃亡の好機到来と考えた。この戦乱に乗じて逃げることができるかも知れない。しかし、手

足をしばられているので、どうすることもできない。だが、それさえ解くことができれば……と考えていた。わたしのかたわらにいる看視役を見ると、彼も戦開の様子が気がかりでならないと見えて、そわそわして小屋の外ばかり見ている。

わたしは、何気ない様子で話しかけた。

「だいぶ、味方も苦戦らしいね」

「うん、どうかな。負けはしないが、だいぶ激しい戦いらしい」

「君も行きたいだろう」

「うん、行きたいが、お前の見張り役だからしかたがない」

ここで、わたしは言った。

「わたしは決して逃げない。そして、もし、わたしのなわを解いてくれれば、君と一しょに戦さに出よう」と。わたしの熱心なすすめを聞いていたこの若い看視役は、さっきから戦場に出たくてむずむずしていたので、とうとう承知した。自分

月下の酋長会議。この会議でいよいよスターデンを殺すことを決議した。中央の彼の頭上に（おー神よ!!　この悲運にあるわれを助け給え!!）と書いてある。
酋長たちは皆たばこをすっているが，スターデンは，この事は何も書いてない。

の小屋に走って行き、二人分の弓矢を持って来ると、わたしをしばっていたなわを切った。
「さあ行こう。逃げたら承知しないぞ。」
「だいじょうぶだ。逃げはしない」
「よし、名誉あるトピナンバー族のために戦ってくれ」
「承知した。わたしの腕まえを見てくれ」
二人は戦場にかけつけた。わたしは必死である。逃亡の計画をみじんも疑われてはならない。あくまでも味方をそよおわなければならない。もし、少しでも疑われたらここは戦場である。その場で打ち殺されるは必定である。
わたしはトピナンバーの戦士の間にあって、懸命に矢を射た。しかし、その矢は、何ものをもねらってはいない。ただ一心に戦っているさまが、うまくよそおえさえすればよいのである。心中ではこの大混戦の中で、どうしてトピニンキン族の方に逃げ込むか、ということばかり考えていた。
察するに、今度のトピニンキン襲来も、あるいは、わたしを救うためのものかも知れない。わたしがトピナンバーに捕えられていることは、知れているはずである。
わたしは、逃亡の機をつかもうと、あせりながらすきをねらった。しかし、なかなかすきは見つからない。恐らく、これまでにもこのような戦乱に当たって、捕虜に逃亡された経験があるのであろう。土人たちは、防戦につとめているわたしの背後に看視の眼を放さないのである。

こうしているうちに、戦摘はトピナンバー族に有利に展開してきた。トピニンキン族は次第に押し退けられ、追いつめられていった。

その時、一きわ高く太鼓の音がひびき渡ったかと思うと、トピニンキン軍は、いっさんに原始林深く退却して、全く影をひそめてしまった。

わたしは逃亡の好機到来上、張り切っていたが、トピニンキンが敗退したのでは、どうすることもできない。ただけがのなかった事だけが一つの幸いであった。

トピナンバーの戦士たちは、敵軍退却と見ると、凱歌をあげて部落に帰って行った。部落中の女たちは総出でこれを迎え、その労をねぎらっている。傷ついた父や子を介抱しているもの、散乱している弓矢を集めているもの、傷の手当てに忙しいもの、部落は夜のふけるまで、戦闘のあと始末で騒がしかった。

わたしは唯一の逃亡チャンスを失い、再び暗い豚小屋同然の家の中につながれてしまった。

第三十章

月下に集まる酋長会議

トピニンキンを敗退させて部落に帰ったトピナンバーは、戦果を祝して後、深夜の酋長会議を開いた。彼らは円陣を作っ

て、この戦開について互いに意見を交換し合い、次の戦闘に対する備えについて語り合った。そして、次には、わたしを、いつ、どこで殺して食べるかについて協議した。
　すぐにわたしは、部落の中央に引き出された。酋長がわたしに死の宣告を下すのを聞いていると、わたしは無しょうに物悲しくなって空を仰いだ。空には月がこうこうと輝いていて、じっとわたしの運命を見守っているように思われた。
　わたしは月を仰ぎ、胸に十字を切って、
「おお神よ。イエス・キリストよ、お救いください」
と、一心に祈りをささげた。
　これを見て、一人の酋長が、
「お前は、なぜ月ばかりをながめているのか。」
　と聞いた。わたしは言った。
「月が怒っている」
「なぜ怒っているのか」
「なぜか知らないが、月がこの部落をじっと見ているのは、この部落に対して怒っている証拠だ」
「なにッ。そんな不吉なことを言うお前は、すぐに殺す」
　酋長たちは怒って立ち上がった。わたしは、観念はしているものの、なお一寸のがれの言いわけとして、
「いや、これは、わたしのまちがいだった。月は、この部落ではなくて、隣りのカリジョー族の部落を見ているのだ。月が怒っているのはカリジョー族だ」

と、あやうく言いのがれた。

第三十一章
マンブカーバ部落全焼す

次の日、このウバツーバ部落から四十キロメートル離れているマンブカーバ部落から、急飛脚がやって来た。

飛脚の急報するところによると、ウバツーバ部落を襲って敗退したトピニンキンは、帰路をマンブカーバ部落にとり、この部落に奇襲をかけた。

マンブカーバ部落は、この不意打ちに驚いたが、酋長の取った措置がよかったため、女や子供たちも全部森林中に退避して、難をさけることができた。しかし、ただ一人だけ子供が取り残された。トピニンキンは、戦闘の相手を失った腹いせに、部落に火を放ち全焼させた。また食料や武器をすっかり掠奪して、残っていた一人の子供をなぶり殺しにして引きあげていった。

ウバツーバ部落には、マンブカーバ部落の者の親類すじが多いので、さっそく、マンブカーパ部落再建に出かけて行くことになった。

彼らは出発の日、わたしのことをイピルグアスーという若者に託し、「この白人を逃がすな、白人はずる賢いから、だま

されないように」と言った。
また、カウイン酒と果物をたくさん持って帰って来ることも、残る女や子供たちに約束して、部落再建の手伝いに大ぜいで出かけていった。
こうして、両部落の協力により、約一か月の後、全焼のうき目にあったマンブカーパ部落は、りっぱに建て直された。

第三十二章
ポルトガル船来たる

ある日、わたしの捕えられているウバツーバ部落より数キロメートル離れている海岸に、一隻の大型帆船が来て、突然大砲をうった。この音にウバツーバ部落の者はみな驚いた。さきに苦戦の末やっとトピニンキンの大軍を撃退したところへ、その同盟者ポルトガルの船が来た。これは、攻撃開始のさきぶれであろうと思ったのである。わたしも、てっきりポルトガル人が、さきに敗れたトピニンキンのあだうちに来たものと思った。
部落では、さっそく船の様子をうかがうため、二、三の若者を海岸に送って調べさせた。ところが、そのポルトガル船は、この部落を攻撃する意図はなく、海岸に姿を見せた若者にむかい、「船まで来てくれ、尋ねたい事があるだけだ。何も

しない」と言った。

若者が帰って来てその旨を知らせると、土人たちは、わたしの所へやって来た。そして、ポルトガル船は、「お前を助けに来たにちがいない」という。私は「そうではない。あの船のなかにわたしの兄弟であるフランス人が乗っていて、そのものがわたしにあいたくて、来たのだろう」と答えた。

わたしは、自分がフランス人であることをこれまでも強調して来ている。それが、最もわたしの命を救うに確実な方法と考えているからである。そこで、今度も、ポルトガル船に、フランス人の兄弟がいるにちがいないと言い張った。しかし、彼らは、わたしを、どこまでもポルトガル人と信じているので、なかなかわたしの言葉に耳をかさないのである。

しばらく彼らは談合していたが、やがて、彼らの中で気のきいた者を四名選んで船に送ることにした。やがて彼らが帰って来てから語るところによると、彼らはカヌーをポルトガル船にこぎ寄せ、話し合ってみたという。

ポルトガル船は、やはり、わた

よろよろになってスターデンのところに救いを求めて来る土人たちと，死んだ土人を自分たちの家のすぐ前に穴を掘って葬るところ。

しを捜していたのであった。しかし土人たちは、「そんな白人は、この部落にはいない」と答えたので、ポルトガル船は、沖にたち去ったのであった。

わたしは、それを聞いて、残念でしかたがなかった。せっかくポルトガル船が、わたしを捜しに来てくれたのに、その所在を知らせるすべもない。ただねこのように小屋の中にうずくまっているよりほか方法はないのであった。

第三十三章

悪疫の流行

部落の者たちは、マンブカーバ部落の再建に行った者たちの帰るのを待っている。彼らが帰るのを待って、いよいよわたしを料理するつもりなのである。わたしは、日の過ぎるのが苦痛に感じられた。針のむしろに座らせられているような痛みを心に感じていた。

幾日か過ぎて、マンブカーバ部落の手伝いに行っていた一人の若者が帰って来た。そして、今マンブカーバ部落では、えたいの知れない病気が流行していることを告げ、わたしの看視役にむかって、「お前の兄もかかっている。おれの兄弟や、いとこもかかっている。そのほか、みんな、その病気に苦しめられている。」と言った。そしてわたしにむかい、「これは、お前の前の看視役ニヤエペポーのことづてなのだが、お前が

いつも拝んでいる神に病気をなおす力があるなら、お前の祈りによって、みんなの病気をなおしてくれ、こんな事を頼まれて来た」

と言った。

かたわらで、それを聞いていた他の土人たちも、

「その病気というのも、お前の神が、何かおれたちに怒っている現われではないだろうか。もしそうであれば、お前から、神に病気を取りのぞくように頼んでくれ」

と、口々に言う。わたしはこれを聞いて、内心喜んだ。何とか、この事を利用して、助かりたいものだと考えた。そこで、急に真剣な表情をつくって、おごそかな声で言った。

「まさに君たちの言う通りなのだ、君たちの兄弟たちが、マンブカーバに行き、帰ったらわたしをたべようという心仕たくをしていることを、わたしの神イエス・キリストが、大いに怒っておられる。また、わたしが、いくらポルトガル人ではない、と言っても、いっこうに信用しない君たちの心にも、わたしの神は怒っておられる。そこで、そのような君たちの悪い心に対する罰として、恐ろしい病気を与えられたのだ。もしその病気を追い払いたいなら、わたしに頼むしか方法はないだろう。マンプカーパ部落に行っている者たちは、帰って、わたしに頼むがよい」

このわたしの言葉を聞いた若者は、さっそくマンブカーバ部落にとってかえした。

第三十四章

病んで部落に帰るニヤエペポー

こうして、数日の後、マンブカーバ部落に行っていた土人たちは、ふらふらになって帰って来た。ニヤエペポー酋長は、わたしを呼びよせて語った。

「自分も病気には勝てない。こうなった時、思い出したのは、いつかの晩の事だ。お前が月を見て、『お月様が怒っている。』といったが、あれはほんとうかも知れない」と。

これを聞いて、わたしは言った。

「まさにその通りだ。君たちがまず病気になり、そうして、部落の者全部が病気になって、一人残らず死んでしまうだろう。それは、君たちが、なんら君たちにわざわいを与えようとしないわたしを捕え、殺害して、食べようなどという悪心をいだいているからだ。月の神は、そのむくいとして、君たちに病気を与えたのだ」と。

すると酋長は弱々しい声で、「お前に頼む、どうかお前の神に祈って、自分たちを助けてくれ」と哀願した。しかし、わたしは考えた。彼らがもし、健康を取りもどした時には、再び、わたしを殺す気持ちになるのではあるまるか。こうした懸念はあったが、酋長の熱心な頼みをいれて、病人の頭に手をのせ、占師よろしく、神に祈ってやった。

しかし、そのかいもなく、彼らは、一人、また一人とたお

れていった。最初に死んだのは子供で、次は酋長の老母だった。彼女は、わたしの肉を食べる日を祝うため、カウイン酒を作ることに夢中になっていたが、ついに病にたおれた。その次は酋長の兄弟、続いてその子供というふうに死んでいった。

ただ不思議な事には、こうして土人たちが死んでいく中にあって、わたしだけはすこぶる健康で、ますますじょうぶにさえなっていった。土人たちはこれを見て、何か薄気味悪く感じたらしく、じっとわたしの行動を見守っていた。特に母や兄弟を失った酋長ニヤエペポーは、いっそうわたしの健康を不思議として、再びわたしを招いた。そして、決してお前を殺さない事に決めるから、どうか、お前の神の怒りを解くよう願ってくれ、といよいよ熱心にいうのだった。そして、部落の者を集めて、わたしを殺さないように、という命令を発した。

ところが、これは奇跡というほかはないのであるが、その日を境にして、土人たちの間にひろがっていた病気は、次第に薄らいでいった。病人たちは、一日一日と薄紙をはがすように快方にむかい、ついに全部の者が健康を回復したのであった。

こうしたある日の朝、カリマンクイとグウアラチンガアスーという二人の土人が、わたしの所にやって来た。そして一人が、いかにもおびえた表情で、「昨夜お前がおれの家に来

て〝君は遠からず死ぬ〟と言った夢をみた」と真顔になって告げた。

わたしは、それは夢だから心配しなくてもいいが、わたしを殺すことだけは、やめた方がいい。何の罪もない人間を殺すことは、神様が喜ばれないのは当たり前だ、と答えた。

いま一人も、「わしも昨夜気味の悪い夢をみた」と言った。また、この土人は語をついで、次のような話もした。「今から約一年ほど前、一人のポルトガル人を捕えて殺して食ったことがある。それまでにも何人か白人を食べたが、あまりおいしくなかった。ところが、そのポルトガル人だけは、肉がたいへんうまかった。わしはその時脳みそを食ったが、うまいと思った。ところが、その後、どうも胸のあたりが痛んでしかたがないのだ」と。

わたしは、人肉を食うことがどれほど罪悪であるか、ということを話し、わたしの神イエス・キリストは、そういう事を絶対にお許しにならないのだ、と言った。

こんな事のあった後、わたしが特に、生命の安全について確信が持てそうになったのは、部落の老婦人たちの態度にあった。土人の婦女は意外に長命で、八十才から百才ぐらいまでの長寿を保っ者も少なくない。彼女たちは、わたしが捕えられた当初には、わたしを棒でたたいたり、つばきを吐きかけたりしたのであったが、今は、すっかり態度を変えたの

である。

彼女たちは、このごろになって、わたしのことをシエ・フイーラ（わたしの子の意）とよんで話しかけ、また互いに語り合うようになっていた。

そして彼女たちの語るところによると、これまでに何人もポルトガル人を捕えて食べたが、神の恕りにふれて部落中の者が病気になったことはない。今度は、まだ殺しもしないのにこんなことになった。お前は確かに神の子だ。そして、お前がポルトガル人でない。というのも事実だと信じる。第一お前のひげは赤いが、これまで見たポルトガル人のひげはみな黒かった。それだけでも、お前の言うことは信じてよいと思う。

こんな事を言うようになったので、わたしもやや安心した。しばらくは、殺されることもあるまいと思われたが、それでも、彼らはわたしに自由は許さなかった。一人歩きなどは厳重に禁じ、必らず、看視役がついていた。

第三十五章
再びフランス船来たる

ある日、フランス人カルワター・ウアーラが、久しぶりにウバツーバ部落にやって来た。彼はわたしの首実験をして、

「これはフランス人ではない。早く殺して食ってしまえ」と土人たちをそそのかした者である。
彼は部落に来て、いまだにわたしが生きのびていることを聞き、信じられないといった面持ちで、わたしを見に来た。彼は、とっくの昔にわたしは食われていると思い込んでいたのである。
彼がこの部落に来たのは、一隻のフランス船がニテロイとマングウアペーに帰るので、これまで彼が採集したピメンタ（こしょう）やヨーロッパでは珍重されている珍しい鳥の羽毛、珍奇な小ざるなどを持ち帰るためであった。
わたしは、彼に平然と冷やかな態度であいさつをした。彼も不思議なものでも見るように、わたしの顔ばかり見ていた。やがて、わたしは、土人たちのいない所に彼を導いた。
彼は初対面のとき、わたしがフランス語を解さないことを知ったので、今度は土人語で話しかけて来た。
「君は、どんなにして、この食人種の中で生きのびて来たのだ」
「生きているよ。こうして君の前に立っているのは、まぎれもないハンスターデンだよ。神のお恵みによって、生きながらえて来た」
「神のお恵みで……そうか」
「そうさ、君は初対面の時、わたしをポルトガル人だと言った。しかしわたしはポルトガル人ではない。ドイツ生まれ、ドイツ育ちのドイツ人だよ。君の隣国者なのだ。わたしはスペイ

ン船の船員となって、ブラジルを探検しにやって来た。だが不幸にも難破した。わたしは・やっとイタニヤエンの岸にたどりついたのだった」
「そうか、そうだったのか。それはすまなかった。しかしあの時、君はフランス語を話さなかったので、てっきりポルトガル人だと思ったんだ」
「だがね、あの時の君には、名誉あるクリスチャンとしての人類愛はただの一かけらもなかったらしいね。キリストは、あんな場合にこそ、愛をあらわすことを望んでおられると思うのだが…」
　わたしの言葉には多少の皮肉があった。彼は苦笑して言った。
「そう言われれば一言もないが、フランス人は皆ポルトガル人を憎んでいる。それはポルトガル人だって同じことだ。フランス人と見たら生かしてはおかないからね」
「それはわかる、だが、同じヨーロッパ人同志が、こんな地球の果てまで来て勢力争いにうきみをやつすなんて、ばかげた事じゃないだろうか」
　彼は黙って、わたしの言葉を聞いていた。わたしはさらに言葉をついで言ってみた。
「それはそうと、今この沖合にフランス船が来ていて、君はそれに乗って帰るそうだが、わたしもいっしょに乗せていってくれないか」

「もちろん、ぼくに出来ることだったらなんでもしよう」
こんな話をしているところへ、土人たちがぞろぞろやって来た。わたしは土人たちにむかって、わたしを、このフランス人といっしょにフランス船に乗れるようにしてくれと頼んでみた。
すると彼らは言下に、わたしの頼みをたち切った。そして、「お前の父か兄弟が来て、たくさんヨーロッパの珍しい品物をくれれば帰してもよいが、さもなければ帰らせることはできない。お前は、自分たちが敵地から捕えて来た大切なとりこなのだ」
と言った。
フランス人も「君、土人たちは簡単には君を手ばなさないよ」と言う。わたしは仕方なく、フランス人にむかって、「もし次の便船があったら、その時には帰れるようにしてくれ」と何回も頼んだ。彼は、うなずいただけであったが、土人たちにむかって、「この人はフランス人の友人であるから大切に保護してくれるように。」と土人たちに頼んでくれた。
フランス人が立ち去ると、わたしの看視役アキンダリは、わたしにむかって、「あのカルアター・ウアーラは、お前に何も持って来てくれなかったか」と聞いた。わたしが、何ももらわないと言うと、「けちなやつだ。お前の友人ならナイフの一つも置いて行けばいいに」と言った。
やがて部落から病気はなくなり、土人たちはもとの明るさ

を取りもどした。すると、土人たちは、だんだん病気の時苦しんだことや、必死になってわたしに助けを求めたことも忘れ、わたしに対する待遇も悪くなり、またまた、わたしにむかって悪口を吐くようになった。わたしの一時明るかった心も、また暗いものになってしまった。

第三十六章
人肉を食う土人たち

フランス人が立ち去ってから数日後のことであった。ウバツーバ村から約六マイルほど離れているチュアリペー村（土語で井戸の水という意）から使いが来た。この村は小さな部落であるが、その村で、マラカジャー族の一人を捕えたと言うのである。

同族の土人間の風習として、他種族の者を捕え、それを殺して食べる時には、隣り部落の者をも招待することになっている。ウバツーバの者は、この招待に大そう喜んだ。

それはちょうどドイツで隣村の教会の落成式に招待された時と同じような喜び方である。いざ出かけるという時には、頭は羽毛で飾りたて、首飾りをつけ、女や子供もつれて行く、数隻のカヌーに分乗して、にぎにぎしく出かけて行った。わたしも、その同勢の中に加えられて、連れて行かれたのであっ

た。
チュアリペー部落では、われわれを出迎えてさかんに歓待した。彼らは、とりこを殺すに当たって、まずその前にアバチー（マンジョオカ）で作った酒を飲み、歌い踊るのである。土人たちが盛んに、その儀式に興じている間にわたしは、そっと捕虜を見に行った。捕虜は体格のよい若い青年であった。
わたしは、この土人青年に近づいて行った。そしてたずねてみた。
「君は心静かに死ぬ心の用意はできているのか」
すると、その育年は白い歯をにっと見せて、
「おれはマラカジャー族の若い戦士だ。自分たちは敵地で死ぬことを名誉としている。捕えられて殺されることなど覚悟の上だ」
と答えた。そして、青年の前においてある一本のムツスラーナ（土語でなわの意）を指さし「トピナンバーは、おれの首をしめるのに、あんな短く細いものしか作らない。おれたちの村には、もっと太く長いものがいくらでもある。持って来て貸してやりたいくらいだ」と言い放った。
わたしは、捕虜のそばをはなれて木陰に行って、持参した本を読みはじめた。この本は、ポルトガル語の本である。土人たちがポルトガル船を襲撃して奪った物の中にまじっていたものであろう。わたしに読めといってくれたものである。
しばらく本を読んでいたが、どうもマラカジャー族の若者

のことが気にかかって仕方がない。わたしは再び彼のそばに近づいた。

マラカジャー族というものはトピニンキン族とは違うが、やはりポルトガル人と同盟を結んでいる種族である。そこで、わたしは彼から最近のポルトガル軍の動静でも聞き出したく思ったのである。

わたしは青年にむかって、わたしがここに来ているのは、君の肉を食べるためではなく、部落の土人に連れて来られたので、わたしも、君と同様トピナンバーの捕虜であることを語った。

若者はうなずいて聞いていたが、自分はポルトガル人もフランス人も人肉を食わないことを知っていると答えた。

わたしは彼に平安をあたえたいと思い、

「君の肉体は、食われてしまうだろう。しかし、君の魂は、殺された瞬間に、別の世界に行くだろう」

と言った。すると若者は、それは、どこに行くのかとたずねた。

「パラダイスだ。そこには、この世にあるみにくいものは何もない。美しい、しあわせな世界だ」と言うと、彼は、急に生き生きとした顔になって、「それはほんとうのことか」と真剣にたずねた。わたしは大きくうなずいて、「これは、わたしたちの神イエス・キリストの教えで、決してまちがいない」と強く言うと、彼は安らかな表情で深かくうなずいた。

土人たちの歌と踊りが高潮に達したその夜、急に空がくもり雷が鳴って、大雨が降ってきた。
土人たちは興をそがれ、不平を鳴らしながら小屋の中にはいったが、大風が吹き荒れて、小屋の屋根を吹きとばした。土人たちは、大いに怒って、アイポーマイル・アンガイパーバ・イビイツー・グウアスー・オモウ（土語で、この悪いやつ、昼間、雷の皮ー土人は書物のことを雷の皮というーを読んでいたから、こんな悪い風が吹くのだ）と言った。彼らはわたしが昼間、書物を読んでいたことや、捕虜と話したことを知っていたのである。
土人たちは、わたしが、その若い捕虜を殺すことをさまたげるため、書物を読んで神に祈り、暴風雨をよんだのだと言って、わたしを責めた。わたしが、どんなに、それはまちがった考え万だと言っても、なかなか聞き入れない。そして、雨風をおさめるよう神に祈れと言う。そこで、わたしは、彼らの言うにまかせて、神に祈った。
翌日になって、風雨はおさまり、太陽がかがやいた。土人たちはよろこんで、またぞろ、酒を飲み、歌い踊りだした。
わたしは、例の捕虜の所に行き、
「昨夜の大暴風雨は、神が君の魂を迎えによこされたものだ」
というと、若者は、にっこり笑ってうなずいた。
こうして、その翌日、若い土人はトピナンバーによって殺

され、切り裂かれ、食べられてしまったのであった。

第三十七章
奴隷を食った土人

三日間にわたる大宴会が終わり、わたしたちの一行はウバツーバ部落に帰ったが、その途中またも大暴風雨にあった。普通一日で帰れるところ、三日間もかかってしまった。

ウバツーバ村の近くに来たポルトガル船の船員たちと，話をするスターデン。

彼らはマラカジャー族の若者を丸焼きにして食べたが、みやげに小量を持ち帰っていた。その中の骨つきの肉の一片をわたしにくれて、「食べろ」という。わたしにはとうてい食べられない　ので、そっとかたわらのくさむらに投げ拾てた。

わたしたち一行のなかに一人の少年がいたが、彼はうまそうに舌を鳴らしながら骨をかじっていた。わたしは、少年に

むかって、「うまいか」とたずねると、「たいそううまい」と答えた。

わたしは、わたしの知っているだけの土人語をあやつって、人間が人を殺し、その肉を食べるこ　とが、どれほど深い罪悪であるか、ということを説いてきかせた。しかし、わたしの言葉はいっこうに理解されたらしくもなく、少年は、ただ目をぱちぱちさせて、わたしの顔を見ているだけであった。

ウバツーバ部落に帰る途中海が荒れたので、カヌーを海岸にこぎ寄せ、カヌーは森林の中にかくして、一行は陸路を帰ることになった。

わたしは、彼らに、「かわいそうなマラカジャーの若者などを食べるから、海が荒れるのだ」　と言ったが、彼らには悔いる様子はさらに見えなかった。

こうして、わたしたち一行は無事に部落に帰りついた。すると待ちかまえていたアルキンダルは、わたしの看視役にむかい、「この白人にすべてを見せてやったか、どんな様子をして見ていたか」などとたずねた。看視役は、「殺す場面よりも、皆でごちそうする場面の方が、白人には恐ろしかったらしい」などと言っていた。

アルキルンダルは、わたしにむかって、「今にお前も、あの通りにしてやる」と言う。このアルキンダルは、日ごろから、わたしを屠殺する日がのびのびになっていることを、いまいましく思っているのであった。

さきにも述べたように、わたしはアルキンダル兄弟から、おじイピルー・グアスーに贈られたもので、彼はわたしが殺され、食われることによって、返礼の意味を早く果たしたいのである。

ところが、アルキンダルの弟は部落で最も心のやさしい者で、わたしに対しても同情的で、わたしが屠殺される日をながびかせてくれるように取り計らってくれていた。

しかし、もうアルキンダルはがまんができなくなっていた。わたしが部落に帰るのを待ち、皆にはかって、二、三日中には屠殺したいと考えていたのであった。

わたしの運命も、いよいよここにきわまったかにみえたが、神助によって、わたしは、またも命びろいをすることができたのである。

それというのは、アルキンダルの家族が眼病にかかったのであった。次第に悪化して盲目に近い状態になって来た。アルキンダルも病気にはかなわず、わたしの所にやって来た。

これまで、わたしが数々の奇跡を行なったように思い込んでいる彼は、「お前の神の力で、おれたち家族の眼病をなおしてくれ」と頼み込んで来た。そこでわたしは、「絶対にわたしを殺さないと誓うなら、わたしの神に願ってやろう」と言った。アルキンダルは、殺さない事を何回も誓ったので、わたしは、いつも祈っているように、神の御名を唱えて、彼のために祈ってやった。

十日ほど祈りつづけていると、不思議にもアルキンダル一族の眼病は次第に快方にむかい、やがて、すっかりなおってしまったのであった。

第三十八章
はるかかなたにポルトガル船見ゆ

月日の過ぎるのは早く、わたしが捕えられてから五か月は過ぎ、一千五百五十四年六月の中ごろ、ウバツーバ部落の沖に一隻のポルトガル船があらわれた。船から大砲をうつ音を聞いて土人たちは驚いた。すわこそと大騒ぎになったが、様子を調べにやった者の報告により、ポルトガル船は攻撃を目的とするものでなく、物々交換を目的として来たものであることがわかった。

少しは安心したが、土人たちにはポルトガル人に対する恐れがある。しかし、物々交換はしたい。小刀・はさみ・鏡・ガラス玉など、彼らは欲しくて仕方がないのである。

決して危害を加えぬという誓言を取りつけて、物々交換を行なうことになった。さっそく三隻のカヌーにマンジョオカ（木いも）粉を蒲載して、ポルトガル船にこぎ寄せた。

相手がフランス船の場合は、気を許して物を交換するのだが、ポルトガル船の場合は、不意打ちをくう恐れがある。そ

こで、三隻のカヌーが、船に近づいて交換をしている間、その百メートルぐらい後ろに多くのカヌーに分乗した土人たちが並び、弓に矢をつがえて見張っている。交換の中途でポルトガル船の方に、もしも怪しい気配でもあれば、一せいに矢を放って、味方のカヌーの逃げ帰るのを守るのである。

それほどポルトガル人を憎みまた恐れるのであれば、物々交換などしなければよいと思われるのだが、土人たちはヨーロッパの進歩した器具は何よりも欲しいので、こうした危険をおかしても交換を行なうのである。

マンジョオカ粉と小刀・ガラス玉などいろいろな雑貨との交換が終わった時、ポルトガル船から呼びかけた。

「お前たちの部落に白人が一人いるだろう。まだ生きているか」

「いるよ。生きている」

見ると、ポルトガル船から叫んでいるのは、もとわたしがスペイン艦隊に乗り組んでいたころわたしの従卒をしていたクラウデイオ・ミランダというフランス人であった。

わたしは、土人たちに、「あれは、わたしの兄弟のフランス人だ」と告げた。ポルトガル人たちは、相手も危害を加える意志のないことを見とどけて、上陸して来た。

わたしは土人たちにむかい、兄弟がたくさんの品を持参して、わたしに会いたく思っているのだから、彼らの方へ連れて行ってくれ。そして、しばらくの間話だけでもさせてくれ、と懸命に頼んだ。しかし、土人たちは決してわたしを彼らの

そばに行かせようとはしなかった。
なぜならば、トピナンバーたちは、この八月ごろを期して、ベルチオーガのトピニンキン族とポルトガル人植民地に一大夜襲を敢行することに決し、今その準備を進めている最中なのである。もしも、彼らとわたしの会見により、この秘密がもれては一大事と考え、わたしをポルトガル人には一歩も近寄らせまいとしているのであった。
そこで、わたしは、彼らに、心配しないように、君らの不利になるような事は決してしゃべらない。わたしは、ただ兄弟に会って、故郷の父母が健在であるかどうかをたずねたいだけた。そして、ポルトガル人たちは、わたしたち兄弟のしゃべることばを知らないから、決して心配ない、と言った。土人たちも、それで、やっと安心したらしく、しばらくの時間だけ会わしてくれることになった。
わたしは大声で、ポルトガル人たちにむかって、だれか、一人だけ前方に出て話してくれるように頼んだ。すると、以前から、わたしもよく知っているポルトガル人、ジョン・サンシエスが前方に出た。わたしが近づくと、彼は大声で話した。「自分たちが来たのは、ハンス君のためなのだ。このたびはブラスクーバス師令官の命令で、君の生死を確かめに来たのだ。土人たちとの物々交換は、その手段に過ぎない。われわれは君を救い出す義務がある。土人たちは物と君とを交換してくれるだろうか。それとも、土人を四五人捕え、それと君とを

交換してくれるだろうか。どちらか可能性のある方を選びたいのだ」

上部　ハンモックの中にいるカリジョー土人の，脈をとっているスターデン。中部　今まさに処刑されんとしている捕虜土人，下部　胴体をばらばらにされて火で焼かれているところ。

これを聞いて、わたしは、どの方法もだめだと思った。「君たちの努力と好意は感謝するが、今のところ、どちらも見込みがないと思う。土人たちは、物品とわたしとは交換しないだろう。また、土人を人質として捕えるというが、もしその挙に君たちが出たら、たちどころに、わたしは殺されるだろう。しかし、なるべく早く、助かりたいと思っている。捕えられてから苦しい目にあって来た。もし神の特別な恵みがなかったら、とっくに死んでいたはずだ。今はただ、次の事だけを頼みたい。わたしはそのうち安全な方法で助かるように機会を待っている。頼みというのは、土人たちに、わたしはフランス人だと思い込ませるようにしてくれ。そして、で

きるだけ多くの小刀や釣りばりを置いて行ってくれ」
ジョンは大きくうなずいた。それから、わたしは、ひとりごとのように、「こちらの土人たちが、ベルチオーガに夜襲をかける準備中だ」というと、ジョンも「トピニンキンと白分たちも、ウバツーバ攻撃の準備をしている」と答えた。
以上で、ジョンとの話し合いも終わり、わたしは土人に引ったてられて、彼らといっしょに村に帰ることになった。
わたしは、ますます勇気を出して、毎日の生活を神の指示のままに送ることを決心した。今までの経験によって、神はわたしをお捨にはならないという強い信念を持っている。神はわたしを罰したい時には、いつでも罰し給うであろう。その時は、よろこんで神のみ心のままにするつもりだ。ほかに何のなすことができようか。こう思うと、心は安らかになり、苦しみも軽くなるようであった。
部落に帰ると、わたしはみやげにもらった小刀や釣ばりを土人たちに分けてやった。
わたしの兄弟のフランス人はポルトガル人の船に乗っているが、すぐフランスに帰ることになっている。国に帰ったら、ヨーロッパの珍しい品物をたくさん持って、わたしを迎えに来るといっていた。その時はまた君らにみな品物を分けてやる。と言うと、土人たちは、非常に喜んだ。
そして、「お前はフランス人に相違ない。きようは、確かにそうだということがわかった」と言う。わたしは、土人たち

に、わたしがフランス人であることを信じさせたかった。現在は、それが唯一の延命の方法だったからである。

この事があって後、彼らのわたしに対する待遇はぐつと改善された。小屋に閉じこめておくことをやめ、狩猟にもわたしを連れて行き、大幅に身体の自由を許してくれた。また果物なども分けてくれるようになり、好意を示すようになった。

第三十九章
捕虜のカリジョー土人、ついに屠殺さる

ウバツーバ部落に一人の奴隷がいた。彼はカリジョー族の土人で、いつかの戦闘で捕虜となり、運れて来られたものであろう。このトピナンバー族の間にただ一人の奴隷として生活していた。彼は奴隷としてよく働くので、これまで殺されもせずにいたのであった。

海に飛び込み，フランス船に救助を求めたが，悲しくも拒絶されたスターデン。海中に立って手を合わせているのが彼である。

しかし、このカリジョーはわたしに対してだけは、意地の悪いことを執ようにし続けて来た。わたしの悪口を言ったりわたしをのろったりしていた。

たとえば、わたしがポルトガル軍要塞の砲手であったことを強調して、わたしを悪しざまに告げた。「あいつの弾丸でトピナンバーはたくさん死んだのだ。あいつの弾が酋長を殺したのだ。それをいつまで生かしておくのか」などと、土人たちに言うのである。

わたしは、土人たちから、奴隷の 讒言を聞くたびに、「神よ、奴隷の讒言より守り給え」と祈って来たのであった。

このカリジョー奴隷が、ふとしたことで病気になってしまった。土人たちは、わたしに、その病気を見てやってくれといって来た。行ってみると、なるほど元気がなく、ハンモックに寝ていた。土人たちは、この病気はなおるかなおらないか、なおればよし、なおらなければ、殺して食べるという。わたしは、なおるはずだから手当てをするように言った。

土人たちの間には、一つの荒い治療法がある。それは、パッカという山ねこの一種のけものののきばをよくといで、病人のからだの一か所を傷つけ、そこに悪血を集め、後にそこを破って悪血をふき出させるという方法である。

カリジョー奴隷が病気になってから、九日目にその治療法をほどこした。ところが、きばのとぎ方が悪かったため、失敗に終わったのであった。すると、土人たちも面倒になった

と見えて、「いっそのこと、屠殺しょう」などと相談しはじめた。わたしは驚いて、病気は必ずなおる。なおるはずだから決して殺してはならないと、しきりに止めたが、もうわたしのことばは聞かれなかった。

グワラチンガ酋長の家の前の広場にカリジョー奴隷を引きすえ、太い棒で、ただ一撃のもとにたたき殺してしまった。激しい打撃により頭は破れ、脳みそが二メートルあまりも飛び散った。

見物している土人たちにとって、そんな光景は子供の時から見なれているので、いっこうに平気らしい。ちょうどヨーロッパの子供たちが、一羽の鶏が殺されるのを見ている様子と少しも変わらない。ただわたしにとっては、こんな無惨な光景は、はじめての事で、胸のつぶれる思いがした。

そのうち女たちが出て来て、どんどん火をたきはじめた。ある者はカリジョー奴隷のからだを、部分々々に切り離していた。そして土人たちは、それぞれに分け与えられた腕や足の一片を、火にあぶって食べはじめた。

もちろん、おとなたちも上機げんであるが、子供たちは特別にはしゃぎまわり、このごちそうに満足しきっていた。

そのうち、頭部と内臓だけを残して食べてしまい。骨片だけが残った。土人たちは、この奴隷が病気だったので、頭と内臓は食べなかったのであった。

わたしはただ一人、彼らから離れて、静かに神に祈りをさ

さげたのであった。わたしに対して悪口を投げつけ、讒言の数々をもってわたしを苦しめたカリジョー奴隷は、ついに病気になり、その果てに屠殺され、この世から消えてしまった。

神は実在して、わたしたちを見守り給うのである。イエス・キリストは、神を信じるわたしを守り、広い広い愛と恵みを賜わっているのである。

このようにして、数か月も前から、この部落の土人たちが準備をととのえ、敵の部落を襲撃しようとする時が近づいてきた。

そのときにこそ、私に与えられた脱走のときなのだ。そのとき彼らはわたしを女や子供たちといっしょに、この部落に残していくだろう。近ごろ、彼らのわたしに対する態度は、きわめて寛大になっているので、そういう予想も描くことができるのである。

サン・セバスチョン島における土人の夜営。右がわのはしに立って胸に十字をつけているのがスターデン。

第四十章
フランス船再び来たる

トピナンバーが、ベルチオーガに大攻撃をかけようという予定の日の八日ほど前のことであった。突然、ウバツーバ部落の沖にフランス船がやって来た。その船は、ポルトガル人たちはリオ・デ・ジヤネイロと称し、土人たちはニテロイとよんでいる所で、ウバツーバより八マイルほど離れた所から来たのであった。

フランス人たちは、パウ・ブラジルや小ざる・おうむなど土人の持っている物と、ヨーロッパの雑貨とを交換するために来たのである。

これらフランス人の中にジャコーという人がいた。この人は土語をたくみに話し、土人たちとの交易は巧妙であった。わたしは、ジャコー氏に、ヨーロッパに帰れるよう尽力してくれることを頼んだ。ジャコー氏は、土人に交渉してくれたが、それは成立しなかった。

ジャコー氏も、わたしがフランス人でないので、強いては成立させようとせず、土人たちを不快にさせてまで、わたしを引き取ろうとはしなかった。

次の日の朝海岸に出て見ると、フランス船は出帆しようとしていた。わたしは、この好機を逃がしたくなかったので、海

にとび込み、船を目がけて、泳いでいった。やっと船のそばまで泳ぎつき、大声で乗船させてくれるように頼んだが、フランス人たちは、土人の怒りや、今後の商談への悪い影影をおもんばかってか、乗船させてはくれなかった。

わたしは仕方なく、またもとの浜べへ引きかえした。浜べにつくと、そこには土人たちが来ていて、たいへんな怒りようであった。てっきり、わたしが脱走したものと考え、後を追って来たのである。

わたしは、逃亡しようと思って、フランス船まで泳いだのではない。次に来る時は、もっとよい品をたくさん持参して、わたしがフランスに帰ることができるよう取りはからってくれと頼みに行ったのだ、と極力言い張った。

こうして、やっと土人たちの怒りをなだめたのであった。

第四十一章
トピナンバーの出動

フランス船が去ってから四日目、ウバツーバ部落に、近隣の土人がカヌーに乗って続々集まって来た。それは各部落よりすぐりの精鋭で、クニヤンベーバ大酋長も先頭に立ってやって来た。

彼はわたしにむかい、「お前もわれわれといっしょにこの戦

闘に参加するのだ」と命じた。わたしは、何とかして部落に残りたいと考えていたので、あれこれと理由を持ち出し、居残りを申し出たが、がんとして聞き入れない。やはり、わたしを残しておくと逃亡すると思っているのであろう。

残留をあまり強く主張して、かえって怪しまれてもいけないので、わたしは、彼らとともにこの戦闘に参加することを承諾した。次々と集まったカヌーは、およそ六十八隻、一隻のカヌーにたいてい二十人ぐらいは乗っており、手に手に弓矢と盾を持ち、ものものしく武装している。

トピナンバー族と戦うポルトガル・トピニンキン混成軍，左上部に見えるのがベルチオーガ要塞で，すぐその前に見えるのが，サントアマーロ島とサンフエリッペ要塞。

彼らは、大いに気勢をあげ、ある者が、「昨夜夢に大勝を神が告げた」と言うと、さい先きよしと喜び、はやりにはやっていた。

彼らは、これより宿敵トピニンキン族とポルトガル人の部落を攻め、それらを捕虜として連れ帰る目的をもっていた。

それは、一千五百五十四年八月十日のことであった。この

八月には、タイーニヤ（ポルトガル語）　ー　日本語ではボラ、スペイン語ではリーザ、土人たちはピラチーとよぶ、ー　という魚が産卵のため、川に上ってくる月である。丸々と肥えたピラチーが、大群をなしてどんどん河口に押しよせ、上流をさしてのぼるのである。土人たちは、このピラチーの押しよせる時期をピラセーマと言い、この時期に好んで戦闘を開いた。この時期になると、トピナンバーもトピニンキンも、ツピー・カリジョーも、各種族は申し合わせたように戦瑞を開き、猛烈な闘争を繰りひろげるのであった。

わたしの同行する土人軍は、ベルチオーガ部落に攻め寄せる途中、多数のピラチーを捕え、焼いて食べた。

土人たちは、わたしにむかって、この戦闘に自分たちが勝利すると思うかどうか。また作戦の上で、何か良い方法はないか、というようなことを何回もたずねた。

大勝利をえたトピナンバー軍の上陸，ここで捕虜が十数人も処刑された。一人が今まさになぐり殺されようとしている。火にあぶられている人間の手足に注意。

彼らは、わたしが、かってベルチオーガ要塞長をしていたことを知っており、わたしが戦いについてはかなり専門的な知識を持っていると信じているので、熱心に質問するのである。

わたしは、彼らを不必要に不安がらせるのも得策とは考えられないので、勝利はこちらにあり、という意味のことを答えておいた。

だんだん近づいたある夜、浜べに上陸した。そこは、わたしたち一行の部落と同じ名のウバツーバという部落であった。

夕食のため、土人たちは多数のピラチーを捕えて来た。野火を囲んで魚を焼き、油が火の上に音をたてて落ちる。土人たちは、それを見て相好をくずして喜ぶ。焼けた魚を手づかみにしてほうばるうまさは、また格別である。

土人たちは食べながらも、やがて来る戦いについての予想を語り、意見を並べ、大いに気勢をあげた。その時は、わたしたちは何も知らずにいい気になって騒いでいたのだが、ちょうどそのころ、味方のある一隊は、他の方面で敵に遭遇して激戦をまじえ、大勝利を得たのであった。

夜営を重ねて敵地に近より、いよいよ目的地到着という前日、わたしたちは、サン・セバスチョン（土人たちはメニビッケとよぶ）という地に夜営した。

クニヤンベーバ大酋長は、さすがに総大将だけであって、慎重にかまえ、付近を踏査して地理を調べたり、「敵地は近い、

皆の者用意はよいか」と言って、しきりに、部下を激励していた。

その夜は、マラカー神を祭って夜半まで踊り、互いに「よい夢を見ようぜ」と言いかわして就寝した。わたしにむかってさえ、「いい夢を見ろ」と言うことを忘れない彼らである。

朝になった。各隊長はクニヤンバーバ大酋長の所に集まって来た。そして、昨夜の夢について、神のお告げなるものを熱心に語り合っていた。中でいちばん皆の気に入ったのは、ある隊長の語った「敵を捕えて屠殺する夢」であった。朝から大はしゃぎで、マラカー神を抱いて踊っている者もあった。

しばらくして、大酋長の命令一下、大部隊は出発した。

部隊長たちは、わたしを軍事顧問ぐらいに見ているのか、戦闘についてさまざまな質問をする。どんな隊形で戦うか、どういう攻撃の仕方が良いか、どこらで戦うのが有利かなどと、なかなか熱心な質問である。

わたしは、「この調子で進むと、多分ボイスカンガ附近で敵に接近するだろう。戦闘の要領は、味方が一致団結して敵に当たることだ。どんな事が起こってもあわてず、心をはげまして勇ましく戦うことだ」と教えてやった。

しかし、わたしに取っては、彼らがどのように戦うか、というような事は問題ではない。彼らが戦闘を開始したら、機会をうまくとらえて、ポルトガル人部隊の側へ、どんなにうまく脱走できるかどうか、それが問題なのである。

わたしたちはやがて、ベルチオーガより六マイルほどの地点に来た。先発のカヌー部隊が、とある島をぐるっとまわった時、ふと前方を見ると、五隻の大型カヌーが失のように進んで来るのが見えた。

土人たちは、それを見ると、すぐ島陰にかくれ、そのカヌーを引き寄せ、一挙にだ捕しょうとはかった。しかし敵側も、それに気づいてたちまち方向を変え、引きかえして行った。

それと見ると、こちらは大挙して迫いかけて行く。進むこと四時間の後、五隻のカヌーと四十メートルぐらいの距離にまで追いすがった。五隻のカヌーも今はのがれぬところと覚悟して、応戦しはじめた。矢がものすごいうなりを生じて飛びかうさまは、実に壮観であった。

近距離なので、相手方の顔がはっきり見える。驚いたことに、ほとんどみな、わたしの顔見知りの土人たちばかりである。中に、わたしがよく知っている六人のマメルッコ（白人と土人との混血児）が、きわめて、勇敢に戦っていた。わずか五隻のカヌーが、四十数隻に包囲され、約二時間がん強に抵抗して、一歩も近寄らせない戦闘ぶりは実にあっぱれであった。

しかし、衆寡敵すべくもなく、やがて、矢数は尽き、全員降伏を申し入れた。その中には、どうしたことか、一人の女さえ混じっていた。

第四十二章

捕虜を食う土人たち

トピニンキンたちを捕えた所は、昨夜の露営地より二マイルほどの海上だったので、土人たちは、もとの露営地に引きかえした。

土人たちは、捕虜を、等分に分け合った。それは、ちょうど狩猟仲間が、獲物を分けあっているような図であった。捕虜のうち無傷でがんじょうなのはそのまましばっておき、負傷している者は、さっさとこん棒でたたき殺し、手早く料理した。次に生木を切り出し積み重ねて火をつける。火がさかんに燃えだすと、その上に、肉をのせ焼けるのを待っている。ほどよく焼けあがると、カウイン酒を飲み飲み、大騒ぎをしながら食べはじめた。

その夜、あとかたもなく土人たちに食われてしまった十数人の中に、わたしのよく知っているマ

オカラスーの夜営，帰途二晩目のこと。捕虜をまん中に，よろこんで踊るトピナンバーたち。

メルッコのキリスト信者が二人いた。その一人をジョルヂ・フェレイラという。これは有名なポルトガル提督のジョルヂエ・フェレイラ将軍と、これまたブラジル開拓者初期の史上に有名なジョン・ラマーリヨの娘ジョアナ・ラマーリヨとの間に生まれた混血児である。いま一人のマメルッコはジェロニモと言い、気のよい若者であった。この二人は、わたしが寝床を作って横たわっている所より二メートルも離れていない所で、土人たちに食われてしまった。

夜半になると、さすが戦勝の酒と肉にうかれ、踊りくるっていた土人たちも疲れたのか、それぞれの寝床に帰り、ひっそりと静かになった。

土人たちが寝静まるのを待って、わたしは小屋を抜け出し、捕虜たちのしばられている所に行ってみた。

捕虜たちは、わたしの顔を見て、涙を流していた。明日は、どんな運命がこの捕虜たちにおとずれるのだろうか。さっき、この地上から姿を消した彼らの友人と同じ運命が待ちかまえているのかも知れない。それを思うと哀れでしかたがなかった。

彼らの中に、わたしのよく知っているマメルッコが二人いた。わたしは、何とか二人を励ましてやりたいと思った。そこで、二人のそばに近より、静かに話して聞かせた。

「このわたしをごらん、わたしはベルチオーガで捕えられてか

ら、すでに何か月かをトピナンバーの中で生きて来た。わたしは、今まで、何度も生命の危機にさらされたが、その都度、神は奇跡をあらわして、わたしの命を助け給うた。君ら二人はキリスト信者だ。一心に祈って、神の奇跡を待つがよい。神は必ず君らに力を与え給うだろう。心を強く持つことがいちばん大切だ」

わたしのことばに少しは力を待たのか、涙にぬれた顔をあげ、負傷して、連れ去られた二人のことをたずねた。

「わたしのいとこのジョルヂと、それからジェロニモは、どうしていたか、ひどくけがをしていたが」

「さっき、トピナンバーたちに、他の負傷者たちといっしょに屠殺され、食べられてしまった。」

わたしは語るにしのびなかったが、やがてはわかることであるから、真実をそのまま伝えた。

二人は、「そうだったか、知っていれば、キリスト様にお別れの祈りでもささげたのだが」と言って、首をうなだれた。

わたしが、マメルッコの捕虜二人と話していると、わたしたちを見つけた土人がやって来た。

用事もない者が来てはいけない、帰って寝よと言う。わたしは、自分の寝床に帰ると見せて他の捕虜の様子も見てまわった。捕虜たちは興奮しているらしく、眠りもせずにうごめいていた。

この地は、かって、わたしが捕えられたベルチオーガから

約十マイルの地点で、逃亡しょうと思えばできないことはない。しかしきのうの戦いで捕えられた捕虜八人はまだ生きている。わたしが、ここで逃亡すれば、土人たちは怒って、八人の捕虜をすぐに殺すだろう。そう思うと、キリストを信ずる者として、それは許されない。ここにふみとどまって、八人の捕虜の生命を助けるために力を尽さなければならぬ。もしかなわねば、その最期なりと見届け、神に祈りをささげて、彼らに魂の安らぎを得させなければならぬ。わたしは、自分の寝床に帰って、静かに横たわった。

朝になって、ベルチオーガにむけ出発することになった。それにさき立ち、わたしが土人たちに予言した事が、的中する事件が起こったのである。

わたしは、彼らに、「きのう、敵を攻撃して捕虜を得たが、敵はそのままにしておくはずがない、今に逆襲をかけて来るであろう」といっておいた。それが事実となったのである。

第四十三章
捕虜を囲んで踊る土人たち

次の日、出発地よりほど遠くないオカラスー（土語で大きな広場の意）とよぶ所に到着した。

土人たちは、今晩ここに夜営することになったので、わた

しは期を見て、クニヤンペーバ大酋長の所へ行き、彼の機げんを見ながら、捕虜たちをどう処置するのかたずねてみた。すると大酋長は、もちろんあれらは屠殺してごちそうにすると言い、破顔一笑した。そして、目の前に立っているわたしをすごい眼でにらみつけ、

「お前は、捕虜などと親しく話などしているといけない。身のためにならないぞ」

と言った。しかし、わたしは、何とかして、捕虜を助けてやりたいと思った。

「大酋長、あの八人はまだからだがかんじょうだから、部落へ連れて帰り、あなたからの贈り物だといって、隣村の酋長にさし出したらどうでしょう。あなたは昨夜は隣村の酋長イガリーさんに何もさし上げなかったでしょう」

わたしは、こう言ってみた。すると大酋長は不愉快そうな顔をして、

「なにイガリーなどに、何も贈り物をする必要はない。あいつこそ、おれの所へ贈り物を持ってくるべきだ」

と言う。

わたしは、大酋長とこんな話をしながら、ふとかたわらを見ると、大きなかごが置いてあって、その中には昨夜食べました人肉が一ばいつめてあった。

大酋長は、まっ黒で太くたくましい腕をのばし、その中の肉塊の大きいのをかごから出し、おいしそうに食べ、わたし

にも、遠慮せずに食べよと言い、かごの中から一本の腕を出して、わたしにつきつけた。

わたしは、わたしと同じ人間の肉など絶対に食べぬと言った。すると被は、鼻先で笑い、物すごい形相をして、ジャウラーイシエー（土語で、おれは豹だの意）と言って、なおも、むさぼり食べる。それを見ていると、わたしは自分のからだの一部を食べられているような気がしてきた。

その日の午後、原始林の境界に、各自捕えた者を連れて来るよう、大酋長から命令が下された。捕虜を一か所に集め、その周囲を取りまいて円陣を作り、マラカー神に祈りをささげた。それから、土人たちは、手拍子をとり歌をうたった。次に、各小酋長が立ちあがって、激しい口調で戦果を述べ、マラカー神をたたえ、激励のことばを部下に与えた。

それが一とおりすむと、各自の捕虜を伴って小屋に帰っていき、その夜は、ここに

十字架にひざまずき，神の奇跡にお礼の祈りをささげるスターデンと，子供を背におって働く土人の女たち。

泊まった。
こうして、その日から三日目に、意気揚々と凱旋した。捕虜の中には、わたしの顔見知りがいた。中には三人のマメルッコ、六人のキリスト信者のマメルッコ、そのうち二人は重傷を負うていたので、トピナンバーに屠殺されてしまった。

第四十四章
まだいたフランス船

部落に帰りついた一行は、大観迎をうけて大喜びである。わたしは、土人たちに対して、次のような希望を述べて、彼らの意向をさぐってみた。
「わたしは君らの望むままに戦闘に参加して、君らと生死をともにして来た。君らは多数の獲物を持って帰ることができた。君らが日ごろから憎むポルトガル人と、わたしとの相違を理解したはずだ。わたしがポルトガル人ではないことが、はっきりしたと思う。
わたしは、祖国に帰りたいと思う。どうか、今、この部落の沖に泊っているフランス船まで、わたしを連れて行ってくれ」
わたしは熱心に彼らを説き、懇願したが、彼らは戦開の疲れを言い、言葉をにごして、わたしの願いをいれようとはし

なかった。

「まあ、その話は、われわれの大好物、モツケン（土語で白人肉のあぶり焼き）をごちそうになってから、後のことにしよう」

と、にたにた笑って、なかなか取り上げてくれなかった。

立上がって祈るスターデン。奇跡により，雨がぴたりとやむ。

第四十五章
ポルトガル大尉の子ついに殺さる

わたしの住む小屋のすぐ前に、タタミリー酋長の小屋があった。彼は小屋の中に屠殺した捕虜の肉をたくわえ、今酒造りに余念がない。

土人の習慣として、人肉を食う時には、部落中の者が集まり、大宴会を開き、酒を飲むのである。

タタミリーは、酒が出来上がると、人々を集め、宴会を催した。次の朝おきだしてみると、昨夜の残り肉を、また火に

あたため、朝食がわりに食っている者も見られた。
捕虜になった哀れなジェロニモは、いぶし焼きにされ、燻肉の丸焼きとなり、保存されるように、加工された肉塊と化していた。
ところが、土人たちは、まるで、その燻肉を忘れたかのように手をつけない。わたしは、そのわけをたずねてみた。それには、こんな理由があった。それは、この肉塊の持ち主パラグウアーが、酒の原料となる木の根を捜して森林深く分け入つたまま、すでに数日を過ぎているのにいまだに帰って来ない。そのためこうして保存されているのである。
土人たちは、パラグウアーが帰り、この肉塊をたいらげてしまうまでは、決して立ち上がって、わたしをフランス船に連れて行く気配はなかった。わたしはあせっている。しかし、彼らは平然としている。その間にフランス船は沖はるかに立ち去ってしまったのであった。わたしは、すっかり悲観した。二度と再び祖国の土を踏むことはできないかも知れないと思うと、心は鉛のように重かった。
ひとり黙然としてうなだれているわたしを見て、さすがに土人も心を動かされたのか、「あのフランス船は毎年一度は必ずやって来る。心配しないで来年を待て」と言って、わたしを元気づけようとした。

第四十六章
キリストの奇跡

わたしは、自分の小屋の前に丸太を組み合わせたに過ぎない粗末な十字架を立て、毎朝起床すると必ず礼拝することを日課としていた。いつか、土人たちが、わたしの不在の時にこの十字架にいたずらをするらしい事に気づいた。そこで、わたしは、土人たちにむかって言っておいた。

「この十字架はわたしの神、キリストが宿って居る。もしも、この十字架にいたずらをすると天罰が当たるから、よく覚えておけ」

すると、土人の中には、あざ笑って、

「ばかばかしい。こんな丸太を組み合わせたものに神さまなどいるものか」

と言う者もいた。人の形に作ったマラカー神を拝む土人にとって、十字架は、ただの木片としか受けとれなかったのであろう。

ある日、わたしが海岸から帰って見ると、十字架がなくなっている。それは一人の土人の女が引き抜いて、白分の小屋に持ち帰り、自分のていしゅにやったのであった。

土人のていしゅは、その丸太を首かざりを作る台にして用いた。土人たちは、海岸から貝がらを拾って来て、きれいにみがき首飾りを作る。そのみがき台に、わたしの十字架を使っ

ているのであった。
わたしはあきれもしたが、怒りを感じた。しかし、無知な土人女のこと、むきになって見てもはじまらないので、胸をさすってがまんするよりほかなかった。
だが、神は、この仕打ちをお怒りになったのであろう。突然、空はかきくもり、大暴風雨がこの地一帯をおそって来た。森の中の直径二十センチメートルもある木々が根こそぎなぎ倒したようになり、土人の小屋も吹き飛ばされた。そして雨は降りつづいて、いつやむとも思えなかった。
四日間も小やみなく降り続く雨に、土人たちも、不安な様子を見せはじめた。それは、とうもろこしやマンジョオカ(木いも)を植える時期が迫っているからである。この時期をはずすと、来年度は全くの無収獲となり、飢えにせまられなければならないからである。
大ぜいの土人たちは、わたしの小屋にやって来た。そして、しきりに怨願するのであった。
「お願いだ。お前の神さまに頼んで、この雨を止めてもらってくれ、でないと、われわれは、何も植えつけができない。是非お願いする」
しきりに彼らが哀願するので、わたしは、二度と、わたしの十字架にいたずらをしないということを誓わせ、彼らの手で、元の場所に十字架を立てさせた。そして、
「さあ、キリスト様におわびするのだ。みんな、ひざまづいて」

彼らは、わたしの言うとおりに土にひざまずき、十字架にむかって礼拝した。
すると、その日の午後になって、あれほどすさまじく降りつづいた雨がやみ、雲はおさまって、太陽が輝きはじめた。
これを見て、土人たちは、いまさらのように驚き、十字架の奇跡に恐れいったのであった。そして、互いに肩を抱き合って喜んでいたが、やがて、わたしにむかって、
「やっぱり、お前の神は、すばらしい、全く万能の神だ。おそれ入った」
口々にキリスト教をほめたたえ、わたしに感謝して、それぞれの小屋に帰っていった。

第四十七章
キリストの奇跡再び

ある日の午後の事であった。わたしは、パラグウアーという土人、ー　この土人は、部落ではかなり信望のある人物である。ー　この土人といま一人の若い土人と三人で海でつりをしていた。
ところが、あいにく雨が降りだした。雨が降ると、魚類は水底深くもぐるのでつりができない。雨と共に一匹もつれなくなってしまった。

パラグウアーはわたしにむかって、
「お前の神に祈ってくれ、この前のように雨をやめてくれ」
わたしは、部落に食料が欠乏しかけていることを知っていた。食料が無くなると、土人たちは、どういう手段に出るか、ということをわたしは知っているので、是非、ここでつりに成功させたかった。そこで、静かにカヌーの中に座し、天にむかって十字をきり、真心こめて、祈りはじめた。
「神よ。この無知な土人たちをあわれみ給え」
何度も祈っているうち、わたしたちをぬらしていた雨はむこうに移動して、太陽が照りだした。これを奇跡といわずして、何と言おうか。
こうして、土人たちは再び魚をつることができた。それも思いがけぬ大漁だったので、喜びいさんで部落に帰った。
パラグウアーは、目前に見たこの奇跡に驚き、その事実を部落の者たちに話して聞かせた。さすがの土人たちもみな、これを聞いてキリストの力におそれ、その偉力をたたえるのであった。

第四十八章
逃亡したデイオーゴ兄弟

パラグウアーは、森林の奥から採集して来た木の根を持ち出し、仲間をさしずして、宴会にそなえて酒を作らせた。

すでにジェロニモは、彼らの餌食となるべく焼かれ、燻肉と化している。彼らは、酒をのみ、ジェロニモの肉をむさぼって、歓をつくした。

この酒宴が終わると、捕虜となっているデイオーゴ兄弟と、いま一人アントニオというマメルッコ（土人と白人との混血児）の三人を小屋から引き出し、さかんにからかって、さも愉快そうに笑いさざめいていた。

三人の捕虜を取りかこみ、髪を引っぱったり、ほほを打ったりしては、また酒を飲みあおるのであった。

土人たちの習慣として、捕虜を他部落の酋長とか、特に懇意な仲間とかに贈呈することがある。捕虜は彼らの飼っている家畜に等しいので、これを贈答することは、何の不思議もないのであった。

わたしも、ついこの間捕えられた者たちとは、少し事情はちがうが、捕虜に相違はない。そこで、ある日、わたしも、他の酋長の所へ贈り物としてつかわされることになった。

わたしは、他部落に贈り物として連れて行かれる前に、デイオーゴ兄弟にあっておきたいと思い、兄弟の小屋をたずねた。兄弟は、薄暗い小屋のかたすみにつながれて、うずくまっていた。

だが、さすがに、幼い時から原野に野獣のような暮らしをして来ているので、それほどの衰えは見せていなかった。

わたしは、内心二人の健康を気づかっていたので、この元気な様子を見て、いささか心が安らかになった。わたしは二人に近づき、

「君らは、まだ身も心もすこやかだ。逃亡するなら今のうちだと思う。君らとわたしとは事情がちがう。君らは日ならずして屠殺される。うかつに日を過ごしてはならないのだ。この裏山に入りこむと、そのむこうに海岸山脈がある。その山脈づたいに北に走れば、君らの部落に帰ることができる」

わたしは小さな声で逃亡の要領をこまごまと教え、道順を話してやった。

そして、その夜、兄弟は、首尾よくのがれて海岸山脈深く入りこんだ、ということが、土人たちの報告によってわかった。土人たちは、わたしが逃亡の秘策を授けたこととは夢にも知らなかった。兄弟が、うまくのがれ去ったことを知り、わたしは、ひそかに安心の胸をなでおろした。

第四十九章
贈り物にされたスターデン

ついにわたしは、近くの部落タクワルスーチーバ（タクワルスーの農園）に贈り物として、やられることになった。二、三人の土人たちに連れられて出発した。部落を離れて数十

メートル行った時、わたしは立ち止って土人たちに言った。
「わたしは、久しく住みなれた自分の小屋をもう一度見ておきたい」と。そして、わたしはふりむき、小屋をながめた。すると、わたしの小屋の上にまっ黒い雲がたむろしていた。わたしは、それを指さし、
「君らは、神の子であるキリスト信者の肉を食べた。それで、神は怒っておられるのだ。このさき、きっと、この部落にわざわいがあるにちがいない」
と言って、再び出発した。

わたしたちは徒歩で十数時間を費やして、タクワルスーチーバに到着した。
ここに、わたしは以前一度来たことがあった。土人たちは、わたしを贈り物として、この部落の酋長アバチーポサンガ（土語で、とうもろこしの汁の意）に引き渡した。
その時、土人たちは酋長にむかって言った。
「この白人捕虜は、普通のものとは少し異なっている。この白人は生かしておく価値のある人間だから、決して屠殺しないように。もし、この白人を屠殺すると、この白人の神が怒って、復讐する」
と何回も言い置きをして帰って行った。
彼らが帰った後、わたしは酋長にむかって、おごそかな調子で言った。

「やがて、海のかなたから、わたしの兄弟が、山のようなみやげ物を船に積んで来る。そして、そのみやげとわたしとを引きかえにするのだ。わたしに危害を加えないのが得策というものだ」

酋長はたわいもなく喜んで、子供たちを呼びよせ、「お前たちは、この白人を山に案内して、方々を見せてやれ」と上気げんであった。

第五十章

フランス船、マヅエ・ベルエテー号の出発

新しくわたしが住むことになった部落の土人の語るところでは、この部落をおとずれた最後のフランス船は、マリエ・ベルエテー号であることがわかった。

マリエ号は、フランスのデイエッペから来たもので、新大陸ブラジルの物産を山のように積んで帰った。それは、当時ヨーロッパでの珍重品であったブラジルの木、こしょう・おうむ・さる・綿花・羽毛・等々である。

マリエ号は、リオ・デ・ジャネイロ港を襲って、一ポルトガル船を捕獲し、船長を付近の土人部落イタプーの酋長に贈った。イタプーは喜んで、さっそく、その船長を屠殺して食料とした。

またマリエ号には、わたしが土人たちに捕えられた当時、土人たちが、わたしの首実験をさせたあのフランス人も一時乗り組んでいた船である。そして、わたしがウバツーバ部落に住んでいた時、ウパツーバに立ち寄った船でもあった。

マリエ号は、フランスに帰っていった。ブラジルの物産を山のように積んで……。しかし、途中おそらく難破したのであろうか、ついにフランスには帰らなかったらしい。というのは、後年わたしが他のフランス船で、無事ヨーロッパに帰った時、土地の人々にマリエ号の消息をたずねてみたが、だれも、その帰着について、はっきりとした回答を与えなかった。マリエ号は、大洋を航海中、行くえ不明になってしまったものと思うほかはない。わたしに数々の不満や苦しみを与えたマリエ号の運命は、何かを暗示しているように思われた。

リオ・デ・ジャネイロ湾におけるフランス船の攻撃。相手はペードロ・ロエゼルと称するポルトガル人所有の小船である。

第五十一章
ついにフランス船に救わる

わたしが贈り物にされて、タイワラスーチーバ部落のアバチーポサンガ酋長の所に来てから、十四日目の事であった。一人の土人があわてて走って来た。そして、遠くはるかな海のむこうで、大砲をうつ音が二度聞こえたことを告げた。

わたしはその音の聞こえた所に連れて行ってくれとたのんだが、何日たっても、連れて行ってくれなかった。

そのうち、他の部落からも、情報が次々とはいってきた。それによると、ニテロイ港に大型のフランス船が入港したことがわかった。

そして、そのフランス船の船長は、わたしが、この土人部落に軟禁状態のまま住んでいることを聞き、他部落の土人二人の案内で船員二名を派遣してくれた。

船員二名は、最初、コオオー・ウアラアスー（土語で大食漢の意）酋長の小屋をたずねた。その小屋は、わたしの住む小屋とはだいぶ離れていたので、使いの土人がわたしを迎えに来た。わたしが出かけようとした時、むこうから船員たちの来るのが見えた。

わたしは、土語で、彼らに初対面のあいさつをした。彼ら

は、わたしの着ている着物のみすぼらしさにまゆをひそめた。それもそのはず、わたしが土人たちに捕えられてから、すでに十数か月は過ぎている。その間、ただ一枚の着物だけを身につけていたのである。幾十回となく洗って着るばかり、シャツなどは、破れはててていた。あちらこちら、破れを縫い合わせて、かろうじて文明人の体裁をつくろって生きのびて来たのである。

船員は、フランスの乞食にもおとるわたしの服装を見て、自分の着物をぬぎ、わたしに着せかけてくれた。わたしは、久しぶりに人間の温情に接し、涙を流して感謝した。

わたしは、彼らの目的をたずねた。すると彼らは、「船長の命令により、あなたを本船まで案内するために来た」と言う。この言葉を聞いて、わたしは天にものぼるほどのうれしさに飛びあがって喜んだ。

二人の船員のうち一人はペローという名で、土語を少し解した。わたしはペロー氏に言った。

「この土人たちは、一とおりのことでは、わたしを釈放しないと思う。そこで、あなたは土人たちにむかって、このスターデンは、自分の兄弟であるから連れて帰りたい。その代償として、船に積んで来た多くの品物を君たちに贈る」

このような言葉で土人を説得してもらいたいと頼んだ。ペロー氏は熱心に土人たちを説得したので、土人たちもようやく納得し、わたしはペロー氏たちといっしょに船に行くこと

になった。
土人たち数名も、わたしの付き添い兼看視役といった格好で、フランス船に行くことになった。
船では、皆わたしのこれまでの身の上に同情して、さっそくごちそうを食べさせてくれた。久しぶりに食べるヨーロッパの食事に、わたしは、ともすれば気が遠くなるようであった。
こうして、四、五日過ぎたころ、不慣れな船の生活に飽きて来たのは土人たちである。土人の組みがしらアバチーは、「お前を船に来させてやったのだ。早く品物をくれ、おれたちは部落に帰りたい」と言いだした。
このことをわたしが船長に告げると、「船はもうしばらくで荷物の積み込みが終わるので、それまで、何とか土人たちをなだめておいてもらいたい」と言う。
わたしが、あれこれと、土人たちをなだめているうちに、一日二日と過ぎて、船はどうやら積荷を終わった。
船長は甲板に全員を集め、フランス語で相談をはじめた。それは、わたしを、再び土人部落に返し、来年来た時に連れて帰るか、それとも、このままヨーロッパに連れて帰るか。という事であった。
船長は、酋長にむかい。ペロー氏の通訳で話しかけた。
「わたしたちの兄弟スターデンをよく大切に生かしておいてくれてありがとう。君たちに、そのお礼として、贈り物をした

いと思う。この船にはスターデンの兄弟もいる。その兄弟たちは、スターデンを本国に連れて帰りたく思っている。本国にはスターデンの老父母もいて、スターデンの帰りを待っている。ここでスターデンを釈放してくれないか」

このことばを聞くと、酋長は、わたしにむかって、怒りを爆発させた。

「この恩知らずめ、おれたちが、お前を生かしておいたその恩を忘れたか。何一つ品物もくれないで、おれたちを追い返すなら、ただではおかないぞ。」

物すごい形相で、つめよった。船長は、彼らをおしなだめ、代償なしにスターデンを本国に達れ帰るのではないことを述べ、船員に命じて、土人の好みそうな品物を持ち出させた。斧、小刀、鋏・鏡・等々。土人たちは、それを見て、はじめて笑顔を見せ、これらの品物とわたしとを引きかえにして、カヌーに乗り、部落をさして帰っていった。

ああ、ついに神は、わたしを見捨て給わなかった。

おお神よ、全知全能のイエス様よ。アブラハムのゼウス様よ、神はついにわたしを悪魔の手から連れもどし給うたのである。

おお、わが世界人類の救主よ。わが祝福を受け給え。アーメン。

わたしは、船長をはじめ、船員一同に感謝するとともに、神にかぎりない感謝の祈りをささげた。

第五十二章
一路なつかしの祖国へ

狂暴で無知な土人の手から、わたしを救ってくれた温情の偉丈夫船長はギレルメニア・モーネルと言い、船の名はカタリーナ号という。

カタリーナ号は、出航の準備を終えて、リオ・デ・ジャネイロ港を出帆することになった。その朝八時ごろ、港のはしの方から、一隻の小型船が出港して行くのが見えた。この小型船は、ポルトガル人と同盟を結んでいるマラカジャー族と、交易を終えたものと思われた。そして、このマラカジャー族は、長年にわたりポルトガル人と争い続けているトピナンバー族の勢力範囲にあり、そのトピナンバーはフランス人と同盟を結んでいるという関係であった。

当時フランス人とポルトガル人は、これらの土人種族間の争いを利用して、同盟を結び、ブラジルで互いに勢力を競っていた。その時、小型ポルトガル船を発見したのであるから、

フランス船が、それを見のがすはずはない。
船の上では、非常呼集の鐘が鳴らされ、大砲には巨弾がつめこまれた。船は全速力で、かの小型船目がけて突進する。
船長は　わたしに、「一つ君が大声で、降伏をすすめてくれ」と言った。わたしは、それに従い、船が近づいた時、大声で、降伏を勧告した。その間にも、船は間かくをつめ一発威嚇の大砲を放った。相手は小型船のこと、何ほどのこともなかろうと、油断していたのが不覚であった。
ポルトガル船は、降伏勧告などには耳もかさず、猛然として挑戦して来た。いきなり五、六弾をフランス船目がけてうちかけた。中の一発は命中して、ただちに、五、六名の負傷者を出した。
わたしも、その砲弾の破片を左のももにうけ、どっと転倒した。そして、意識を失い約二時間の後、自分を取りもどした。
わたしは、それから一心に神に祈って、一身の無事を願った。願いは有利に展開し、ポルトガル船を打ちくだくことができた。
こうして、一千五百五十四年十月三十日リオ・デ・ジャネイロ港をあとにしたフランス船は、一路、祖国にむかって大洋を進航したのであった。
海はおだやかで、鏡の上をすべるような航海を続け、三か月と二十日間の航路の旅を終え、一千五百五十五年二月二十日、フランスのノルマンヂー・ホンフェルに到着した。長い

間陸地を見なかったわたしたちは、感慨無量の面持ちで上陸した。

わたしは、乗組員たちのなみなみならぬ好意にむくいるため、荷物の積みおろしを手伝い、ギレルメ船長に厚く礼を述べた。

船長は「もしあなたさえよければ、この船の乗組員となって、さらに航海を続けてみないか」とすすめてくれた。しかし、わたしは、故郷のドイツに一日も早く帰りたかったので、船長の好意を謝し、お別れすることにした。

船長は、わたしのために旅行通行証を取得してくれたり、旅費まで贈って、わたしを見送ってくれた。わたしは、心をはずませて、デイッペにむかって出発した。

第五十三章

ディッペにてベレテー号船長宅に招かる

ベレテー号といっても、読者の中には、記憶しない方もあろうと思う。わたしが、土人に捕えられていた時、ウバツーバ部落をおとずれたフランス船である。わたしが、必死になって救助を願った時、土人たちにむかい、「この白人は、お前らの敵に当たるポルトガル人だ、屠殺して食べてしまえ」と言って、わたしを見殺しにした船員たちの乗っていた船である。

このベレテー号は、わたしを救助してくれたカタリーナ号より約三か月も早くブラジルを出航しているはずなのに、まだフランスに到着していないのである。

ブラジルから、わたしたちが無事に帰省したことを知り、ベレテー号の船長や乗組員の家族は、わたしを招き、夫や兄弟の消息を聞きたく思ったのであった。

わたしは、ベレテー号の乗組員が、土人部落に訪れた当時の事を思い出し、その無著悲な行為、非人道的なやり方に、あらためて怒りを新しくした。そこで、その家族の者たちにむかって、船長以下乗組員が、どのように無情であったかを語った。そして最後に、神はいかなる場合にも、正義の味方である。わたしを救助してくれたカタリーナ号は、全員無事に帰国することができたのである、と付け加えておいた。

ベレテー号乗組員の家族は、ベレテー号の運命について真剣に心配していた。わたしは彼らをなぐさめるため、まだ難破したとも、他国に漂着したとも知らせがないのであるから、気長く待つうちに帰って来るだろうと言ったが、内心難破したのではないか、という疑いが強くわたしの心を支配した。

そして最後に、「もしベレテー号の乗組員が帰国したら、気の毒ながら、このスターデンは、諸君より一足先に無事祖国に帰ったということを伝えていただきたい」と一言い残して、デイッペを出発し、ロンドンで数日を楽しく過ごした。次いでゼランデイアを経て、なつかしの故郷アントエルピアに到

着したのであった。

捕虜期間中のわたしの祈り

雄大なる天地を御手により創造し給える神よ。吾らのパトリアルカ・アブラハム、イザアキ、そしてまたジャコーよ。汝よくイスラエルの民を引具して紅海を渡り、悪魔の手より救い給う。汝よく猛り狂う雄獅子の魔口よりダニエルを守り給う。

おお神よ、願わくは、この鬼蓄の如き土人どもの手より、このわたしを救い給え。

おお、全知全能なる神よ。愛するキリストよ。この無知にして狂暴なる食人種どもに、神の御力を知らしめ給え。

神よ。神よ。わたしの生命の危機に当たり、わたしを救い給わば、この身を、この身の非力を顧みず、全力をつくして、生ある限り、神のまことを人に伝えるであろう。　　アーメン。

第二部　新大陸ブラジルの住民と風物

第一章

ポルトガルより、リオ・デ・ジャネイロへの航路

ポルトガルのリスボンは、赤道より三九度北にある都市である。このリスボンよりブラジルのリオ・デ・ジャネイロに行くには、まずスペイン領に属するカナリヤ諸島に行かねばならない。

トピナンバー族の酋長二人が盛装したところ。左側の土人が持っているのが，イビラペーマと称し，捕虜の頭をたたき割る道具。

このカナリヤ諸島のおもなる島々は、ランザロッテ、フェルテベンツーラ、フェーロパルマ、テネリッフェ等である。

次にこのカナリヤ諸島より、カーボ・ベルデ諸島にむかう

わけである。この青緑色の岬には黒人が多く住んでおり、ポルトガル王家の所有地であって、ギネーとよぶ地である。

カーボ・ベルデより、南西南にむかって航海する。海は広大で、最初に夏至線を通過し、次に赤道を越えなければならない。

赤道を過ぎて、さらに南下して行くと、北の空に輝いていた北極星は、その美しい姿を見せなくなる。それは、船が冬至線に近づいた証拠である。

完全防禦された土人部落，中央の正門に山ねこや人間のしゃりこうべがつけてある。

船が、この付近にさしかかると、毎日晴天が続き、空には全く雨というものがなくなったのではないかとさえ思いたくなる。この二つの回帰線の間には、猛烈な暑さがあるが、ブラジルは、この回帰線の外にあり、正確な位地はまだ不明である。

第二章　ブラジルの風俗

ブラジルは南米大陸の大半を占めて、広大な面積をもつ国である。幾千、幾万の珍奇な動物と、幾十種族にも分かれた多くの土人種族が住んでいる。これらの土人種族は、それぞれ異なった言語を使用している。

おもしろいことには、冬がないので、ブラジルの山々は年中育々とした樹木におおわれている。そして、それらの植物は、わがドイツ国の植物とはたいそう異なっている。

気候は概して温暖であり、回帰線の中にある地方は年中ほとんど同じような暖かさで、冬至線の南にある地方には、やはり寒い時期がある。

この南部地方は、カリジョー族の大勢力範囲である。カリジョー族は、ブラジル土人の中でも、やや進歩しており、男は狩猟を事とし、動物の毛皮をまとっている。女は木綿の糸で厚い布を織って、それをまとっている。

この着物のことを土人たちは、テイポイとよんでいた。

ブラジルは全土にわたって、野生の果実がきわめて豊富で、動物や土人たちのため絶好の食料となっている。

土人たちは、みな黒く日に焼けており、皮膚の色は赤銅色である。彼らは意外に賢く、行動はさるのように機敏である。ひまさえあれば、敵の種族を一人でも多く捕えて屠殺し、食べることを考えている。

ブラジルの国は実に広い。船に乗って、幾日も幾日も、約

五百マイルも沿岸を航海しても、やはりブラジルの国の岸べであった。

第三章　大山脈

海岸の三マイル近くまで迫る大山脈がある。トードス・オス・サントス湾からはじまって、赤道線南方約二十九度辺まで、全長約二百マイルにわたるものである。幅は約八マイルもあろうか、それらの山脈の中腹からは、幾百となく、美しい清水が流れ出している。夜になると、その水を飲もうとして、大小さまざまな動物たちが集まってくる。

土人の火造り。

この山脈にはグウアイアナー族が居住しており、彼らは他種族のように定住することなく、部落を作らない。この種族はぎわめて好戦的で、自分たちの領土内に他種族の者が入りこめば、見つけ次第に屠殺し、食べてしまう。

この種族も弓矢とわなをもって狩猟を行ない、動物を主食としている。また山脈中には、かなり豊かに蜂蜜がある。このおいしい蜜が、土人の食料となっている。

土人たちは、鳥獣の鳴き声をよく識別し、夜でも昼でも狩猟している。狩りでとった動物はたいていの場合、火で焼き、

そのまま食べてしまう。火をうる方法は、他種族と同様、二本の棒をきりもみして、発火させる。

彼らが敵種族を襲い夜営する時には、必ず小屋の周囲に丸太を立て並べる。これは敵の攻撃を防ぐばかりでなく、ジャガールとよぶ山ねこの一種を防ぐためでもある。

ジャガールのからだはそれほど長大ではないが、さながら豹のように敏捷で、どう猛な動物である。夜行性で、女や子供を襲うので土人たちは常にこれを警戒している。

土人たちは、丸太や木の枝を並べるだけでは心もとなく思うのか、その内がわにマラカイバーというとげのあるものを地面に立て並べる。

そして夜営の時は、敵がいつ攻撃に出るか不明なので、夜じゅうたき火をして、必ず一人以上の者が不寝番をつとめる。そして翌日他の地に移動する時にはたき火の跡を消し、小屋を取りこわして、居住の跡を全く止めぬまでにしておく。

グウアイアーナ族は、他種族と同様、髪を長くのば

土人の漁。

し、爪も長くのばしている。彼らはマラカーという神をまつる。物を切るには動物のとがった歯をもちい、木を割るにはかたい石で斧を作って用いている。

ヨーロッパ人たちが来るようになり、彼らが自分の妻子と交換してでも手に入れたいと思うのは鉄製品である。

グウアイアナー族ばかりでなく、トピナンバー族、グウアラニー族などでも、他種族の者を捕えて食べる。

まず敵部落近くの森林にひそみ込む。樹木のかげにかくれて、部落より木を切りに来るのを待つのである。敵種族の者が近づくと、やにわにおどり出て捕える。グウアイアナー族は、その捕虜の手足を生きたままきり落とすという残酷なことを平然としてやってのける。そして、女子供総出で、その肉を焼いて食べるのであるが、そのむごたらしさは目をそむけさせるものがある。

だが、他種族はたいていの場合、まずこん棒で打ち殺して後料理し、火あぶりにして食べるが、グウアイアナー族のやり方は、特別である。

第四章

トピナンバー族

わたしが捕えられていたトピナンバー族は、彼らが「巨大な山」とよんでいる海岸山脈の前方約六十マイルの間に居住

していた。

彼らトピナンバー族は、なかなか苦しい立場にあった。それは、この大原始林の中で、常に土人間の闘争が繰りかえされており、トピナンバーは外敵に包囲された形になっていたからである。北部にはグワイタカー族がおり、南部にはトピニンキン族がいる。西方の森林には、その武力を南米全土にほこるカラジャー族がおり、その隣にマラカジャー族の精兵がいるといったぐあいであった。その上に、すぐ手前の山脈には、さきにも述べたどう猛そのもののグウアイアナー族が住んでいて、四方八方みな敵なのである。

第五章
トピナンバー族の住居

トピナンバー族は、居住地を決める時、その条件として、水とたきぎが近くにあること、狩猟地があることである。一定の期間そこに居住して、動物や鳥類をとりつくし、食料が不足してくると他の地に移動する。たいていの場合、酋長が、他に適当な場所を見つけ、最初四十人ぐらいの男女を率いて移って行く。まず一軒の小屋を作らせる。家の周囲をかこうには丸太または椰子を二つ割りにして用い、屋根は普通椰子の葉でふく。小屋の大小は、居住する家族の大小に合わせて作られるが、たいていは幅約十四フイト、長さ百三十フイト

ぐらいで、時には百五十フイトに及ぶこともある。
屋根の高さは約三メートルぐらいで案外ひくい。屋根は円状形に作る。珍しいのは、小屋の内部に全くしきりを設けないということである。だから、かなり大きな小屋でも中はがらんと空どうのようである。

その中央部に酋長夫婦とその子供たちが住み、そのまわりに各家族が住む。家族の占める場所は大体十二フイトぐらいで、家族別にいろりを所有している。
小屋は長方形で、三つの出口が設けられている。一つは中央に、他の二つは両瑞にある。ところが、その戸口は余りにも低く小さいので、出入りにはからだを丸めなければならない。
トピナンバー族の習慣として、この約四、五十人が住める小屋を一つの場所に七戸以上は作らない。これらの住居の中央に広場がある。その広場は、会議場に用いたり、子供の遊び場にもなる。また捕虜の屠殺場でもあり、宴会場ともなるのである。
彼らは、わたしたちヨーロッパ人とは、考え方が根本的に異なっているので、人を殺し、その肉を食べることになんらの罪意感をいだいていない。ちょうどわたしたちが山に狩りに行き、獲物を料理するのと同じように考えているのである。
土人たちは、自分たち共同の住居をめぐって、円形に椰子

や巨木を立て並べ防壁とする。この防壁の中央正面に、多くのしゃれこうべを掲げる。これは軍功を物語るものであろう。

この防壁の所々に穴をあけ、敵襲を受けた時、ここより矢を放って応戦する。

第六章

土人の火種をうる方法

土人は火を非常に大切にする。それは、種火をうるのに、時間がかかるからであり、火を神聖視するからでもある。

彼らは、ウバスイーバとよぶ堅い木を森の中から採って来る。それを幾日も日にあててかわかす。よくかわいたウバスイーバから、親指ぐらいの一本を作り、他に人間の腕ぐらいの太さの一本を作る。細い方の木を太い方の木にちょうど錐をもむようにして強くすり合わせる。すると、その部分に熱が生じ、根気よく摩擦を繰りかえしていると、木粉が作られる。さらに進むと、その木粉に引火して、種火が作られるのである。

第七章

土人の寝具

土人は、ハンモック状の物を編み、これを樹間につり下げ、その中に寝る。彼らは、この寝具をイニとよんでおり、寝る時には、その周囲に決して焚火を絶やさない。そして夜間は、余ほどの事がない限り、決して外部には出ない。それは、迷信深い原始人の常として、彼らはアニヤンガとよぶ悪魔が森に住んでいると信じているからである。

土人の中には、この悪魔アニヤンガを幾度も見たという者がいた。しかし、わたしは一度も見たことはなかった。

第八章　土人の狩猟

土人たちが鳥獣をとりに行く時には必ず弓矢を持って行く。森林に入ると全神経を集中して鳥獣を求める。その態度は真剣そのもので、一歩なりとも、おろそかには歩かぬといった体のものである。

そして、鳥獣の鳴き声に注意を払い、声によってその居場所をつき止めるのである。

ブラジルの山野には鹿・山豚など、大小の動物や鳥類が多く、その肉はほとんどがきわめて美味である。土人たちで食料に困難するというのは余ほどのなまけ者である。

狩りに出た土人は、ただの一度も獲物を持たずに帰ること

はない。必ず何かをとって来るのが常である。
また魚をとるには、ヨーロッパでは、つりかまたは網でとるのであるが、土人たちは、弓矢で射てとるのである。
木陰の深い淵のそばに忍んでいて、魚が水面に浮き上がるのを見張っている。魚が水面に現われると、さっと弓矢を放ち命中させるのである。その見事な手練は驚嘆に値するものがある。
幼少の時から修練を積み重ねているので、弓矢さばきは実にあざやかである。一度魚をねらえば百発百中、魚は矢を受けたまま、一度は水中深くもぐるが、土人はそれを追って水中に飛びこみ、捕獲する。そこで土人たちは、小魚はねらわない。五十センチメートルより一メートル以上の大魚にかぎり捕獲する。
そのほか、土人の魚獲法に、ツクーンとよぶ植物の葉からとった繊維で作った網を用いるのがある。浅瀬をせき止め、上手に張ったその網の中に魚を追いこんで捕える。
わたしの感心したのは、土人たちの仲のよいことであった。七、八人もいっしょに漁に行く、多くとった者は、少なくとった者と分け合って、等分にして帰る。彼ら土人間には、文明人に見られるような物欲または一種の所有欲というものは薄いように思われた。
土人たち、同種族の部落では、さかんに贈答する。たとえば他部落で大漁の場合、多くの魚が贈られる。また、当部落

で何か大きくとれた場合は必ず贈り返す。魚が大量にとれた時は、これを乾燥させて粉にし、壷に入れて保存する。

これは賢い保存法である。土人たちは、塩を用いないので、焼いただけではたいてい二、三日で腐敗してしまう。この粉にして、マンジョオカ粉とまぜて壷に入れると、長く食料とすることができるのである。

第九章　土人の体格

ブラジル土人の多くは、その体格が堂々としていて、背だけは高いといえる。女も概して体格がよい。ヨーロッパ人と大差はないが、土人は日焼けして黒くなっている点が異なっている。

そして、女も子供も全くの裸体で、原野を走りまわっている。人間にとって大切な場所、わたくしたち白人が恥部とよぶところも、彼らは平気でさらけ出している。

それは、本来の習慣であるから、恥ずかしいなどとは思わないのである。かえって、白人のズボン姿など、彼らは、なぜあのような物を身につけるか、さぞ暑苦しく、面倒なことであろうと思っているようである。

しかし、種族によっては、恥部を赤や青の塗料でぬってい

るのもあった。
また興味深く思ったのは、文明人の間で、ひげは重要な意味を持っているが、彼らの間では、全く存在価値が認められていないことである。土人は決してひげをたくわえない。土人たちはひげが生ずると、一本も残さずみな抜き取ってしまう。また下くちびるか耳たぶに穴をあけ、そこにひもを通して、石または貝がらをぶら下げて得意とする。その他、鳥の羽毛で頭を飾る者も多く見られた。

第十章
土人の道具類について

わたしが捕えられていたトピナンバー族の間には、鉄製のおのや小刀を持つ者がいた。これは、物々交換によって得たものであろう。しかし、まだまだ土人の大部分は、祖先伝来の石器を用いていた。
彼らは、鉄で道具を作ることを知らない。土人たちは、黒緑色の堅い石をとがらせ、木の柄を作り、先にそのとがった石をしばりつけておのとする。また、山豚の歯も小刀として用いていた。またパッカとよぶ小動物の歯は、非常に鋭いので好んで小刀代用に用いる。
土人たちは手足にはれものができると、そのパッカの歯で、

その箇所をひっかき、多量に出血させて治療する。いわゆる、毒血を外に出してしまう方法である。

これは何も学理的な研究によるものでなく、彼らの経験から発見した治療法である。

第十一章
マンジョオカいもの栽培

土人たちの食料は、その大部分が狩猟によってうるのであるが、不足を補うため、きわめて幼稚な方法で農業も営んでいる。しかし、これも全種族がそうだというのでなく、北部に住む種族の中には、全く農業を知らないのも多くいるのである。

農業といっても簡単なもので、まず適当な場所の樹木を全部きり倒し、三か月ぐらいかわかして火を放つ。焼き払った地面に適当な間隔をおいてマンジョオカとよぶいも（南洋では「タピオカ」という）を植える。このマンジョオカは、ブラジルの原野では、どこでもよく育つ植物である。成長も早く、六か月ぐらいで木の根元にいもがつく。土人たちはこのいもを掘り出して食料にするのである。

マンジョオカを食べる方法はだいたい三種ほどある。第一は、平たい石の上にいもをのせ、石のつちでたたきくだく。水分を去ってでんぷんだけを残し、よく乾燥すると純白の粉が

できる。この粉で彼らはだんごを作って食べるのである。

第二の方法は、生のマンジョオカいもを幾日も水につけて腐敗状にする。それを煙でいぶし、乾燥させておく。土人たちは、これをカリマンとよんで、長期の貯蔵食料とする。このカリマンはそのままでは食べられない。これを食べるには、まずすりつぶして粉にする。この粉をやはりだんごにして食べるのである。土人たちはカリマンのだんごが好物で、これをベイジュとよんでいる。

土人女の酒造り。

第三の方法は、第二の方法のように長く水につけて腐らせたいもを他の生いもまたは干しいもと混ぜ、火で焼いて食べる。土人たちは、これをウイタンと称する。

さらに土人たちは、魚粉や肉粉を作って食料としていた。魚または物動の肉を火の上にかざし、煙でいぶしてかわかす。そのかわかした肉をさらにイニエポアンという土器で焼き、焼き上がったものをうすでひく。そして肉粉、または魚粉とするのである。

土人たちは、この肉粉や魚粉をマンジョオカ粉と混ぜて水でこね、だんごにして食べるのである。
おもしろいことに、土人たちは、魚や獣肉を塩づけにすることを知らない。これは不思議なことである。

第十二章
土人の料理法

わたしの見聞によれば、ブラジル土人の多くは、日常の料理にほとんど塩を使用しなかった。
わたしが十か月間軟禁状態におかれたトピナンバー族の土人たちは、食事の時、塩を小最使用する者と、全く使用しない者とあった。
塩を用いる者は、フランス人たちの料理を見まねたものであることがわかった。しかし、彼らにとって、塩気のある料理は美味とは思えぬらしく、塩を用いても、おいしそうな顔では食べてなかった。隣のカラジャー族にも、やはり、塩を用いる者と用いない者がいた。
彼らの語るところによると、塩を多く用いると若死にをするということである。それはそれとして、塩は、どういう方法で採取するかというと、かなりの老樹をきり倒し、それを細かく割って木片にする。そして、別にかわいた木を山のよ

うに積み、その上に、くだんの木片を並べて火をつける。木片は燃えて灰となる。その灰を集めて灰汁をつくり、灰汁を煮つめると、やや透明な灰色の物体が残る。それが土人たちの貴重な塩なのである。はじめ、わたしは、それを硝石ではないかと思って、火にかざして実験してみたが、それは硝石ではなく、不純ながら塩であった。

テンベターと称する土人のかざり。

この製塩法を土人はたれかに教えられたのか、それとも自然に知ったのか、それはわからないが、これが彼らの塩をうる方法である。しかし大部分の土人は塩を全く用いない。

土人たちは普通、魚肉を料理する時、必ず青いピメンタ（こしょう）を肉の内部につめこんで焼く。肉が焼けると中からピメンタを取り出して汁を作り、魚の頭を茶わん代わりにして、その汁を入れて飲む。この汁のことを、土人は、ミンガウとよんでいる。

土人たちが、肉を貯蔵しておきたい時には、いろりの火元から三十センチメートルぐらいの所に肉をくしざしにして立ててておくか、または煙でいぶしてからからに堅くし、乾煉した場所に保存する。

この干し肉を食べる時には、水につけて柔らかくし、煮て

食べる。彼らは、このいぶし肉のことをモッケンとよんでいる。

第十三章
土人の法律と社会

土人の社会には、法律とか租税とかいうようなものはない。ただあるのは、部落の中に、部落長であるところの酋長がいる。その酋長が、ほとんど一さいの権利を行使する。その酋長の態度が実に堂々たるもので、戦争・狩猟などの時は、一さい酋長の命令によって行なわれる。他種族とは相憎み相争う彼らは、その反面同種族間には美しい友情をつちかっている。全部がさながら親類か縁者のような観さえある。互いに親しむばかりでなく、よく他人の人格を尊重しあう様は妙な法律があったり、強制的な義務などを課す文明国家社会より、どれほど自由でよいかわからないほどである。

戦争の時、特に抜群の働きをした者は勇者として仲間から尊敬され、その勇者が重要視される人物になる。

部落内で土人同志けんかをするということはほとんど起こらない。万一争って、相手を傷つけるようなことが起こると、けんか両せいばいで、他の者が二人をその場でたたき殺してしまうことになっている。しかし、そんな事は一度も見なかった。

子供たちも互いに親愛していて、争いを見ることはなかった。彼らの美点は、いかなる場合にも酋長の命に従うことであった。それも、不平不満があるか、罰が恐ろしくて従うというのではなく、みな喜んで、服従していることである。ちょうど家庭で、年長者をうやまうという、そうした自然な形で、酋長を大切にし、尊敬しているその風習には感心した。

第十四章
土器の製造法

土人が土器を造る方法は、きわめて幼稚であるが、なかなか巧妙なものもある。彼らの用いる器は土器以外には何もない。鉄製品は持たないのであるが、もしあるとすれば、フランス人かポルトガル人たちと、その原価の何百倍かで物々交換をして得たものか、あるいは、他の種族を攻めて奪って来たものかである。

おもしろいと思ったのは、彼らの社会では、土器製造は女の仕事としてあることである。男は絶対といっていいほど土器製造には手を出さない。

何か彼らの社会にも規約・規定があるかと注意してみたが、別段何もなく、ただ昔ながらの習慣に従っているというに過ぎないのであった。

土人の女たちは実に器用に土器を造る。手なれたものである。まず適当な粘土を練り合わせ、なべ・つぼなんでも、その形を造り上げる。それを一週間か十日ぐらいかわかして、その中によく燃える樹皮をつめ込む。そして、その土器を石の上において火で焼くのである。土器が火で赤くなるまで十分に焼き、時を見はからって火気を去り、自然に冷却させるのである。

土人の中には、幼稚ながら図案を描く心得のある者もいて、土器の外面に動物の顔、植物などを描いて焼くこともある。美しい花模様のある土器、赤や青の色に色どった土器も見られた。

第十五章

土人の飲酒と酒の製造法

土器の製造と同じく、酒を造るのも女たちの仕事である。女たちは、マンジ。オカいもを畑からたくさん掘って来る。きれいに洗ったいもを大きななべに入れて煮る。煮えたいもを今度は他のなべに移して冷却させる。

今度は部落中の女の子たちを集め、そのいもを口に入れてかみくだかせ、唾液と混じり合ったいもをまた他のなべにはき出させる。それにある程度水を加えると、だぶだぶな液と

なる。

これを火にかけて沸かすのである。そしてこれを、土中に半分ぐらいうずめた大壷の中に入れ完全に密閉しておく。そのまま二日間おくと発酵して、強烈でおいしいマンジョオカ酒ができあがるのである。

わたしたち文明人からみると、口でかみくだき、だえきの混じったものなど、何かきたならしい感じがするが、彼らは、そんな事は眼中にないのである。

土人たちはきわめて野蛮ではあるが、なかなか社交家で、毎月一回ぐらいの割合で、近所の同族部落を互いに招待し合う。そして大宴会を催すのであるが、この時、ありたけの酒や肉をふるまうのである。

隣部落の客が来ると、部落総出で大歓迎をする。大がめの中になみなみとたたえているマンジョオカ酒を、どしどし茶わんでくみ、男も女も老人も子供もさかんに飲むのである。中には酔って何かわけのわからない事をどなり散らして、はしゃぐ者もいる。

わたしは捕虜ではあったが、特別待遇を受けていたので、この宴会にも出席させられ、酒をむりに飲まされたものであった。

飲み慣れないと強烈に過ぎて、おいしくは思われないが、だんだん慣れてくると、なかなか捨て難い味の酒である。今思うに、あの酒を少しでも国に持ち帰っておけば、話の種になっ

ただろうと、残念に思うことがある。
この大宴会には、干し肉やいぶし肉をたくさん持ち出して、飲みかつ食って、大騒ぎをする。おもしろいことは、土人でも、やはり女が酒の酌をすることである。
宴会はにぎやかであるが、なかなか秩序正しく、どんなに酔っても、仲間同志でけんかをするようなことはなかった。彼らはふだんから、何の代償を求めるでもなく、食料を互いに分けあう仲なので、けんかなど起こらないのかも知れない。また社会そのもののあり方が、文明社会とは根本的に異なっているためかも知れない。

第十六章
土人のおしゃれ

何千年、何万年の昔から、ブラジルの原野に、全裸の生活を営んでいる彼らにも、やはり、おしゃれがあり、土人女の間には、化粧もある。男のおしゃれには、髪をまげに結うのがある。まげといっても、頭のまん中をそりおとし、周囲の髪だけを残して後部の髪をたばねるのである。
わたしは最初、その異様な頭に少し驚いたが、それはドイツの侶りよのそれとよく似ていることに気づいた。
わたしは不思議に思ったので、土人の一人に、その原因を

たずねてみた。土人の話によると、昔、メイレ・ウマーネという人がいた。その人は人格者で、皆から神のようにあがめられていた、たびたび奇跡を現わして、土人たちを危険から救った人であった。そのメイレ・ウマーネを尊敬して、彼の髪形をまねるようになったのが、このまげであるとのことであった。

土人の話から想像するに、このメイレという人物は祈祷師のような者ではなかったかと思われる。

わたしがトピナンバーに捕えられたころには、すでにはさみを用いていた。しかし、はさみを入手する前にはどうして髪を切っていたか。

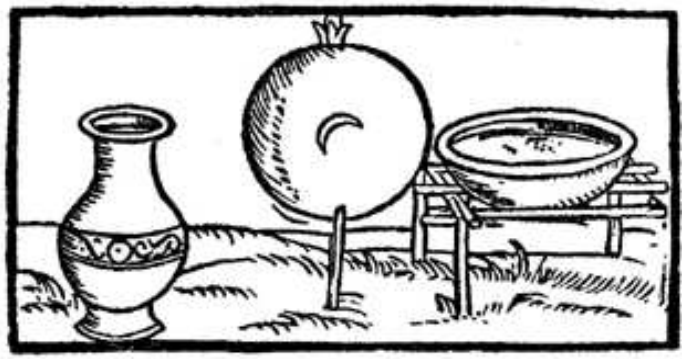
それについてたずねてみると、まず二個の堅い石をとがらせ、それで髪をすり切ったものであると答えた。また頭のまん中をそるには特に堅い石をよくみがき、根気よくそったものであるという。

このほか、土人の化粧にはいろいろあるが、赤や青の羽毛で作る頭飾りは美しいものである。

それから、土人全部がするのではないが、土人のおしゃれの中には、文明人から見ると、「どうして、こんなばかげたことをするのか」とあきれるようなものもある。それは下くちびるのまん中に穴をあけ、その中に大きな石をはめ込んでいるのである。その下くちびるの穴を彼らは、いったいどんなにしてあけるのかというと、子供が二、三才ごろになると、鹿

の角をするどくみがいたもので、下くちびるに小さな穴をあける。はじめは小さな石をはめ、子供の成長とともにだんだん大きな石と取りかえて行くのである。おとなになるとかなり大きな石になるので、下くちびるは石の重さで、だらりと下がっている。これは何としても美しいものではないが、彼らにすれば得意なのである。少し上品なのになると、ただの石の代わりに水晶などをはめ込んでいるのもあった。

そのほか、貝がらの装飾品を好んで用いる。マタブーという貝を採って来て、首飾りに作る。



中央にあるのが有名なマラカー。

首飾りのことをポジェスイーと詩的な美しい言葉で表現していた。青赤の羽毛を採集して、それを束にし、両腕に飾るのがいるかと思うと、樹脂から取った一種ののりで羽毛をからだ一ぱいにはりつける者もいた。その他、右腕をまっ赤に、左腕をまっ黒に、やはり樹木から取る塗料でぬる方法もある。時にはからだ全体をまっ黒にぬりつぶすこともあった。

また、巨鳥の羽を採って来て、その根元を集めて、直径一メートルぐらいの旗のようなものを作る。これをエンドアペといって、戦争の時、軍旗のように、これを押し立てて進軍する。

次に土人たちが子供に名をつけるのがおもしろい。その大かたは、野生の動物の名をそのままとってつけるのである。そこで子供は生まれるとすぐ一つの名をもらうのであるが、成長して戦闘に出る。そして、敵一人をたおすごとに新しく名をもらうのである。

そこで、部落の勇者は幾十となく名をもっている。名が多ければ多いほど、仲間の尊敬を一身に集めることができるのである。

第十七章
土人娘のお化粧

土人の娘も主婦たちも、顔の下部とからだ全体とを赤や黒の色で塗る。その塗り方は大体は男たちと同じようである。ただ女たちは男より髪を長く伸ばしている。これはヨーロッパ人と同じである。だが、ヨーロッパの女たちのように、髪にくしやかんざしをつけない。普通には耳たぶに穴をあけ、直径十センチメートルぐらいの白くみがいた貝がらを下げている。その耳飾りのことを、ナンビパイという美しいことばでよんでいる。

それから彼女たちの名前はたいてい鳥の名や、魚類の名や木の実の名を取ってつけている。彼女たちも男と同じように

たくさんの名前をもっている。中には二十も三十も名をもつ者がいる。
それは彼女たちの夫が捕えたり、殺したりした敵の人数だけ、夫と同時にその妻も名前をもつことになっているからである。
土人の女は、野生の雑草のように強健である。お産の時には別に産婆などはいない。その場に居合わせた者が、男でも女でも、産婆の役をつとめるのである。そして驚いた事には、お産がすむと、三目目ぐらいには起き出して歩きまわっている。またヨーロッパで見られない風習は、子供を布に包み、頭部と顔だけを外に出し、背にしばりつけて、女は洗濯をしたり、たき木を割ったりして働いている。子供は母親の背に負われて、すやすやと眠っているのは、まことにほほえましい風景である。

第十八章
子供の命名

ある土人の妻が出産した時のことであった。夫は、隣近所の友人を七、八人も招いて、新しく生まれた子に名をつけることを相談した。すると友人たちは、いろいろな意見を出すので話がまとまらない。父親は、勇ましい名がよいと言い張って譲らない。そこで先祖の名にりっぱなのがあるので、それ

をつけようということになった。最後にキリマン・エイラミタン、コエマという三つの名が残った。この三つのうちどれが良いかということで、またなかなか意見がまとまらなかったという。それで、いよいよどれが子供の名になったか、わたしは失念したが、このようにして名前がつけられる。わたしたちキリスト教徒には信じられないが、彼らは洗礼も何も受けずに、勝手に名前をつけるのである。

第十九章
一夫多妻の土人たち

土人は、だいたい一夫一妻であるが、中には、ある特殊な権力者で多くの妾をもっている者もある。わたしの知っている者の中でも十三人の妾を一人でもっている者もいた。

また、わたしが贈り物として送られたアバチーポサンガ酋長は、十数名も女を擁していた。おもしろい事に多くの妾たちの間には、自ら一つの秩序が保たれていた。第一番目の妻がいちばん権力をもち、第二第三というふうに順に権力のあり方が少しずつ小さくなっていく。この女たちが仲良く、だれも夫の愛を独占しようとしない。

大きな住居の中に整然と各自の寝具をおき、別々にいろりをもって、別々に食事をしている。

女たちは、夫にだけ働かせるようなことはなく、自分たちも畑に出てマンジョオカやとうもろこしを栽培した。この点、ヨーロッパの妾とはたいへん異なっているようであった。

これら多くの妾は、自分の子供を大切に育てていた。その子が男児である場合は、幼時から森に連れて行って狩りを教え、成長するにつれて、子供はひとりで魚や動物をとって来るようになる。また行儀のしつけは、ヨーロッパ良家の子弟のように厳格なものである。自分でとったものも、自分で勝手に処分することは許されない、みな母親に渡す。母親は、子供たちに公平に分配するのである。それからヨーロッパ人として理解に苦しむのは、土人の間では、自分の妹や娘を他人に贈る習慣がある。贈られた方は喜んでいるが、贈られる本人も至って平気である。

第二十章

婚約

トピナンバー族の婚約は、親同志で取り決めるのが普通である。婚約は当人たちが全くの子供の時、双方の親たちによって取り決められる。両方の少年少女が成長して結婚期が近づくと、親は子供の髪を全部かり取ってしまう。

それから背中を動物の歯で傷つけ、首のまわりに動物の歯

をつけさせる。こうして月日がたつにつれ、背の傷は固まりはじめる。すると、何か知らぬが、黒い液をその傷の上に塗る。するとちょうどヨーロッパ人のいれずみのようになる。このいれずみは土人の間でたいへんとうとばれ本人自身も、その見事さを誇るのである。こうして、一人前となった婚約者たちは、晴れの結婚を行なうのである。土人たちの間には結婚の儀式はない。二人で夫婦になり、いっしょに暮らすようになるのである。夫婦の営みは、やはり文明人と同じく密め事とされている。

第二十一章
土人の財産

土人の間には私有財産というものはない。もちろん貨幣はない。彼らの財産というものをしいて言えば、鳥の羽毛ぐらいのものであろう。赤・青・黒・緑などの美麗な羽毛をたくさん所有している者がいわゆる資産家なのである。

そのほかに、下くちびるとほほに水晶をつけている者も財産持ちとされている。しかし、文明人とは異なり所有慾がない。それは、魚や動物が豊富で、食料に困難しないためかも知れない。

各家族が一定量のマンジョオカいもとその粉を所有してお

れば、生活の心配は無用である。

第二十二章
土人の名誉心

土人の社会で名誉とされているのは、一人でも多くの敵種族を捕虜にするか殺傷することである。つまり戦闘で武勲を立てた者が勇者として尊敬され、部落の長となる。そして敵一人をたおすごとに名をもらい、幾十となく名前を所有している者が、最高の英雄であり、名誉の保持者でもある。

第二十三章
土人の宗教

土人たちは音楽が好きである。しかし音楽といっても原始的なもので、単調なものである。この音楽に必要なものにマラカーがある。

マラカーというのは、かぼちゃのような植物の果実で、よく熟した果実で表皮の堅くなったのを森から採って来る。それの中味をくりぬいて拾て、表皮をよくかわかす。そして、その中に小石を入れて振ると、なかなか美しい音がする。この

マラカーを振りながら、彼らは踊ったり歌ったりするのである。

彼らの宗教はパジェーと称して、ちょうどヨーロッパの祈祷師のような者と深い関係がある。このパジェーが一年に一回ぐらいの割合で各部落を巡回する。原始人の常として、彼らは迷信深い。このパジェーは、彼らの持っている原始的な楽器マラカーを入神させることができる。マラカーに神通力を与えうる神の使徒であると信じている。

そのパジェーが頭にたくさんの羽毛を飾り、手足にいろいろな貝がらや小石などをつけ、からだ全体を飾りたててやって来る。すると部落中が大騒ぎである。酋長をはじめ、土人は総出で土にすわって出迎える。そして土人たちは、各自が持っているマラカーに神通力を与えてもらうため、盛大な酒宴を催してパジェーをもてなすのである。

こうして、夜を日につぐ大宴会が終わると、その翌日か翌々日にパジェーは、うやうやしく一軒の小屋をあけ渡すことを命ずる。次に女・子供の出入りを禁じ、小屋の中央に祭壇を設け、土人たちの持って来るマラカーを赤く塗るように命ずる。そのマラカーに羽毛をかざって小屋に入るよう命令する。まず一番にパジェーが入り、中央に座し、そのまわりに土人たちが神妙な顔をして立っている。それから、各自持参のマラカーをパジェーの前に置く。それから貢物の意味であろう、彼らが何か月も費して作った弓矢・羽毛の首飾り、貝がら細

工などを、みんなが贈る。

こうして、全員が集合したころを見はからって、パジェーは、マラカー一つ一つを手に持ち、礼拝し、ピチンという植物で一々清める。やがて多くのマラカーの中の一つを口元に持って行き、ネー・コラッ（土語で口を開け）と言い、次に何か早口に祈る。大体このようにして、一個一個のマラカーにいわば入神の式を行なって終了する。これにより、土人たちは各自のマラカーに神が移ったと信ずるのである。

こうして、楽器は神に昇格し、軍神とあがめられる。このマラカーの神こそ、戦闘に当たり、大勝をもたらすものと信じられるのである。

入神式が終わると、皆マラカーを大事そうにかかえて小屋を出る。そして、部落共同で、一軒の神殿というようなものを作る。その奥探くマラカーをまつり、彼らの信仰の中心となるのである。

さて、前述したように土人の宗教的な行事を観察したわたしは、彼らの無知をあわれまないではいられなかった。一個のかぼちゃに似たマラカーを神と信じているのである。

彼らは、何万年かの昔、この世界に大暴風雨があって、いっさいの物も人間も押し流されてしまった。その時、運よく神の助けにより生きのびたのが自分たちの先祖である、と信じて疑わない。

最初わたしは、土人たちがマラカーということをたびたび言うが、マラカーとは、いったい何の事かと思った。土人の一人が、マラカーという丸い物が口をきくなどと言うので、土人たちが何かにだまされて、そんな事を言うのだろうと思っていた。そして、パジエーの儀式を見て、はじめて、土人たちが迷信にこり固まっているわけがわかったのであった。

第二十四章

女　占　師

土人の杜会には、当然のこととしてきわめて迷信が多い。男たちが大ぜいで、一つの小屋から全部の女たちを戸外に出させ、広場に集めて力の限りわめかせ、地上を飛び歩かせる。すると、女たちも身も心も疲れ果て、地上に倒れ死んだように動かなくなる。すると、土人部落に一、二人は必ずいる占師が皆にむかい、「この女たちは死んでいる。しかし、わたしが魔術で生きかえらせて見せる」と述べたて、まじないをする。女たちは、やがて息を吹きかえす。そこで占師は

「この生かえった者は、末来の事をりつぱに予言できる」

と告げる。こうして、部落には新しく女占師が生まれるのである。この女占師たちは、男が戦いに出る時、その戦局について、いろいろと占うことになるのである。

第二十五章

カヌーの製作

ブラジルの沿岸によく育つ植物に、土語でイガーイビラという木がある。その木の皮を破らぬようにはぎ取り、土人たち唯一の水上交通機開のカヌーを作る。

土人たちは先祖より伝承した方法そのままで、カヌーを作っているのである。まず森林の中を歩きまわり、通当なイガーイビラを見つける。その木のまわりに柵を作り、高い足場をこしらえて、石おので根気よく皮をはぎ取る。その大きさは木の大きさに比例するので、小さいのは三、四メートルから、大きいもので十五メートルぐらいなのもある。幅は約一メートル四十センチぐらいもあろうか。

はぎ取った皮を海岸に運び、たき火にかざして気ながにかわかす。先端をうまく折り曲げると舟ができる。つぎに船尾を曲げて、水が浸入しないようこ作る。

土人たちぐら
いも乗る型の
ものは遠わし

左側のはムツスラーナと称し，処刑用のなわ。右側のは，イビラペーマと称し，捕虜の頭をたたき割る道具。

い土人たちも海洋の知識は零に等しい。そこで遠く行く時も、必ず海岸にそって航海する。大型のカヌーをそろえて、矢のように海上を走るのは実に壮観である。遠く離れた所に軍を

進める時は、昼間波の静かな時に全力をあげてこぎ、波が高くなると海岸にこぎ寄せて、波の静まるのを待つのである。

第二十六章
食人の心理について

前にも述べたように、彼らは敵種族の者を捕えると、屠殺して食べてしまう。わたしははじめは恐ろしくて直視できなかったが、後には慣れて来た。でも、いくら空腹になったからといって人肉はただの一片も食べることはできなかった。

彼らがおいしそうに人肉をむさぼり食うのを見て、果たして、心から美味を賞して食べているのかどうか、わたしは疑いをもっていた。いろいろな面から、これを調査し、研究してみると、彼らは、空腹を満たすために、または、人肉の味を賞美して食べているのではないことがわかった。彼らが敵を捕えて食べるのは、激烈な復讐心と猛烈な敵愾心を満足させるためであることがわかった。これは、キリスト信者であるわたしにとっては、大きな発見であった。

彼らが戦闘に当たり、いよいよ戦いが白熱化してくると、敵にむかって、怒りと憎しみに満ちた声でののしるのである。

○デベ・マランパー・シエー・レミウ・ベゲー（この畜生めくたばりやがれ）

○ヌデ・アカンガ・ジユカー・アイポター・クリーネ（きょうこそきさまの頭の肉をかじり食ってやるぞ）

○シエ・アナマ・ポエピカー・ケー・シエアジユー（今こそなき友のあだをとってやるんだ）

○ヌデ・ロオオ・シエ・モカエン・セエラン・アル・エイマ・リレー（きさまの肉をきょうの日暮れ前におれはごちそうになるぞ）

このような言葉を敵に浴びせかけながら、敵と渡り合うのである。

上部は処刑されんとする捕虜。下部はイビラベーマを盗っているところ。

捕虜もともに，酒を飲んでいるところ。今まさに処刑されんとしているのであるが，実にゆうゆうたるものである。

第二十七章

攻撃の　準備

トピナンバー族は、敵種族の部落に攻撃をかける時は、まず各部落の酋長を集めて会議を開く各部落の酋長は熱心に各自の意見を述べる。その意見を総合し作戦を練るのである。こうして全酋長の意見が一致した時、攻撃に関する具体的な事がらを決定し、各部落に通報される。

それで攻撃の時期についてであるが、彼らは四季すなわち春夏秋冬の区別を知らない。それはブラジルは年中同じような気候で、冬がないからである。土人たちは裸休生活をしていて、ヨーロッパ人のように風邪を引くことがない。こういうぐあいなので、出陣の時期を定めるには、ある木の実の熟するころとか、ピラチー（ぼらに似た魚）が産卵のため川をさかのぼるころとか、そういった時機を選んで決定する。

こうして時期が決まると、女も子供も総動員して、

捕虜がばらばらにされているところ。

カヌーを製作する者とか、弓矢ややりを作る者とか手分けをして昼夜兼行で準備を急ぐのである。

ここには、ウイアタンというマンジョオカとは別に、森林にあるいもから作る粉がある。これは土人たちの最も好む食料であり、彼らはこれを戦時の食料とするので、採集に励むのである。

戦闘準備が完了すると、パジェー（占師）に武運を占わせる。たいていの場合、このパジェーは「軍神われと共にあり、わが軍の大勝利疑いなし」と予言する。

これで、彼らは気をよくするのであるが、その上に、夢占いを重要視する。そして各自夢を見るように心がけるのである。

彼らが夢で、敵をたおして、その肉を食うとみれば、それは勝利を占することであり、もし反対に、敵にたおされると見れば、敗北を語るものとした。

このように、パジェーの占いと各自の夢占いのほかに、女たちの占いをも合わせて最後的な決定を行なうのである。土人といえども、簡単には戦争は行なわない。「勝利疑いなし」と信じた時だけ、行動を起こすのである。

しかし、その場合、部落では大騒ぎである。まず大宴会が催され、一晩じゆう飲みかつ歌って、まず士気をさかんにする。マラカーの軍神を頭上に高くささげて、熱心に祈る。そ

して、部落に残る女や子供と少数の防衛隊に送られて、出陣するのである。

かくて、首尾よく敵部落の近くに忍び寄ると、隊長は部下を励まし、明日の戦闘にそなえる。

戦闘前夜の夢は非常に重視され、首領株は、一人一人、各自の夢について語らなければならない。

この夢物語りをすますと、食事をする。動物や魚類をとり、たき火にあぶって十分に食べる。

次に気のきく者を放って敵情を探らせる。攻撃は大体、夜中の一時ごろから夜明けにかけて敢行するのがならわしである。真夜中の森林を全軍粛々と敵部落に近づくのである。最近距離に到着した時、隊長の命令一下一せいに喚声をあげて襲いかかる。まず火矢を射かけるのであるが、花火のあがるのを見るようで美しい光景である。

しかし、それを花火に見たてたりしているのはわたしぐらいのもので、土人たちはいっしょうけんめいである。

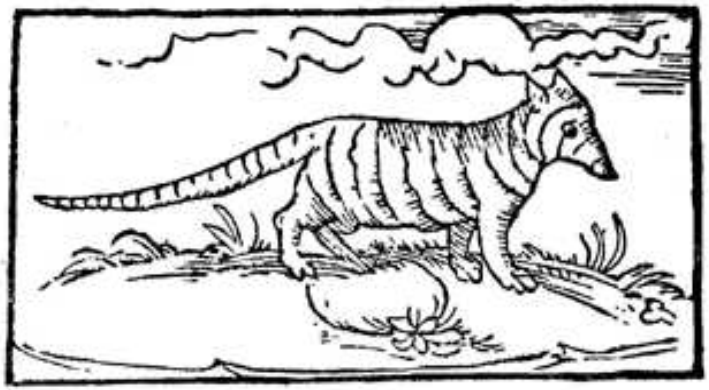
急襲を受けた部落は、たちまち大混乱に陥る。しかし、降伏などはなかなかしない。すぐに防御の体制をととのえ、暁の森林中に、すさまじい攻防戦を展開するのである。

土人たちは敵を捕えた時の用意として、幾本ものなわを腰につけている。捕えたならば、直ちにそのなわでしばってしまうのである。

この攻撃にあたっては、やはりヨーロッパの軍隊と同じよ

うに、一種の楽器を嶋らして攻めかかる。敵の重傷を見つければ、すぐに殺すが、軽傷者はなわでしばり、自陣に連行して捕虜とする。味方に負傷者が出れば、用意の薬草などで手当てをして、自陣に引き取らせるのである。

第二十八章
土人軍の兵器



タッー

土人の兵器といっても、別に珍しいものはない。おもなものは弓矢である。弓は、ヨーロッパで見るものと大差はない。矢じりは、鉄製ではなく、動物の歯か骨を削って作ったものである。

この矢の先端に木棉に樹脂をしみこませて結びつけ、火をつけて射放すのである。これにより、まず敵部落の家屋を焼くのである。

次ぎに盾であるが、これは動物の皮や樹皮をもって作る。この盾で敵の射る矢を防ぐのである。

この盾にとげを植えこみ、敵に接近した場合も奪い取られないようにくふうしてある。

そのほかに、火煙戦法というのがある。それは、その日の風上にピメンタ（こしょう）を積み上げて火を放つ。すると敵はピメンタのにおいと煙りにまかれ、ついに逃げ出すのである。

このピメンタ戦法というのを聞いて、わたしに思い出すことがあった。それは、わたしがまだ捕われの身となる以前の事で、ペルナンブッコという所に船を泊めた時の事であった。船が岩の上に座礁したので、船内に止ってしばらく暮らしていた。すると土人たちがそれを見つけて、襲撃してきた。彼らは、まず海岸に伺か木のようなものを積み上げていたが、それに火を放った。

サルニー

しかし、その時風向きが変わり、わたしたちは煙にまかれることもなかったが、別に寒さも感じないのに、火をたくとは、どうしたことかと、当時いぶかったのであった。

しかし、ピメンタ戦法の話を聞き、その時の土人の採ったのは、それで、わたしたちを煙攻めにするつもりだったのであることがわかった。

第二十九章
いけにえの祭り

トピナンバーが捕虜をどういう風にして、いけにえとするかということについて、少し述べてみる。

最初に一人の捕虜が小屋に連れて来られると、女や子供が出て来て、口々にわめきののしって、その顔といわずからだといわず、打ったりけったりして散々な目にあわせる。次に捕虜のからだに灰色の羽毛をはりつける。女たちは、用意の石のかみそりで眉をそり落とし、なわで完全にしばり上げる。

今度は男女幾人かで捕虜を中にして円陣を作り、手拍子おもしろく、ぐるぐるまわり歩いて、歌をうたう。この儀式が済むと、女が監視役兼食料支給係として捕虜を見張るのである。

捕虜の中に子供がいることがある。子供の捕虜は殺さない。しかし、これも、育てて後には殺される運命にあるのである。

捕虜には十分に食料が与えられる。そして、部落の女たちは、戦勝を祝う宴会のため酒を作りはじめる。また捕虜を屠殺する道具をきれいな羽毛で飾りたてる。また捕虜をしめるなわムツスラーナが作られる。

屠殺の用意が終わると、執行の日を決め、近隣の部落に通知する。通知を受けた各部落では、その日にぞろぞろと集まって行く。ちょうどドイツの青年たちが、友人の結婚式に招待

された時のように、子供たちは、クリスマスのプレゼントをもらいに行く時のように、大はしゃぎで屠殺場に集まって来る。

女たちはおめかしをし、老人は隣村の祭りを見物するような顔でやって来る。すると、招待した側は、珍客到来とばかり、酒・肉・果物をふるまって歓待する。

女たちが客をもてなしている間に、勇たちは屠殺の用意をする。タカッペーの上に、マカグウアーという鳥の卵のからを焼いて作った粉をふりかける。次にやはり屠殺用具のイビラペーマの用意をする。イビラペーマというのは、細長い棒に色とりどりの羽毛を束にして結びつけたものである。それら用具の準備が終わると、それらを小屋の中につり下げる。そして土人たちは、歌をうたって、そのまわりで躍るのである。用具をある一種の液体で塗ると同時に捕虜の顔も同じ液体で塗ってしまう。これもやはり儀式の一つで、その間じゅう、女たちは奇声をあげて騒ぎまわるのである。

次に酒宴がはじまる。捕虜にも酒を飲ませるのであるが、捕虜も平然として酒を飲んでいるからあきれたものである。

この酒宴がすむと、手早く一軒の小屋を作り、その中に捕虜を入れて、一人の番人をつけておく。

次の日、朝薄暗いうちから起き出して、歌をうたいながら、小屋のまわりをまわる。日の光がさしはじめると、小屋から捕虜を引き出して、小屋を取りこわしてしまう。

次に首に巻いてあったなわを解き、腹のあたりをしばり直し、そのなわのはしを大ぜいで持つのである。このなわのはしを持つということは、憎むべき捕虜を屠殺するに、自分も参加しているという意味が含まれているのである。

こうなると、捕虜には、いよいよ最期の時が来ているのである。今度は腹部をムツスラーナで強くしばる。すると、この光景を見ようとして各部落の女たちがつめかける。女たちは手に手に小石を持っている。合図があると一せいに捕虜目がけて投げつける。この女たちは、捕虜の手や足を欲しがる。最初に手足の四片を得た者が、部落最高の幸福者と言われているからである。

捕虜の立っている所から三メートルぐらいの所で、どんどんたき火をする。いよいよ用意が終わると、酋長がやって来る。そして、イビラペーマを受け取り、自分のまたの間に差し込む。これは彼らの間では最も高い名誉のしるしだという。次にそのイビラペーマを屠殺係りの男に手渡す。男はつつしんで、それを受け取り、捕虜のそばに立つ。そして叫ぶ。

「おれの顔をよく見覚えておけ、今こそ、われわれの兄弟のかたきを取ってやるのだ」

すると捕虜の方も負けてはいない。

「殺すなら早く殺せ。この次には必ずおれの味方が、この恨みを晴らしてくれるんだ」

この捕虜の声が終わるか終わらぬかという時、イビラペー

マがうなりを生じて打ちおろされ、捕虜は頭を打ちくだかれて、どっと倒れる。緊張した顔でながめていた女たちが、いっせいにはせ寄って死体をひきずり、たき火のそばまで持って行く。そして包丁で皮膚をきれいにすり落としてあおむけに寝かせる。一人がさっそく手足を切りはなす。するとすばやい女が、その一本を奪い取る、次の女がすぐまた一本を奪い取る。こうして、あっという間に四本の手足は女たちに奪い去られてしまう。女は奪ったものを高くさし上げて、自分の家の中にかけ込み、歓声をあげている。

次に土人たちに肉が分配され、内臓は女たちに与えられる。内臓は水で洗いスープにして、子供たちもいっしょに吸うのである。この人間スープのことを彼女らはミンガウとよんでいた。こうして捕虜はただの一片も余さず、全部食べられてしまうのである。

その時捕虜を屠殺した者は、酋長から腕のつけ根に動物の歯でかき傷をつけてもらう。この傷あとは、本人にとってこの上もない栄誉なので、部落の者は、この傷あとをもつ者を尊敬する。

そしてまた、捕虜を屠殺した者は、その日一日だけ、ハンモックに寝て休んでいなければならない。酋長から小さな玩具のような弓矢が与えられると、彼は起き出して的にむかい、その弓に矢をつがえて射るのである。それは、捕虜の憎悪心が乗り移って、その男の弓射力をにぶらせると信じられてい

るので、それを払うため、一日じゅう弓矢のけいこをするという意味から、玩具の弓矢を射るのだということである。

土人たちは物を数えるのに、五以上は知らない。それ以上を示す時は、手足の指を示して数を知らせる。

第三十章
ブラジルの動物

ブラジルの原野には鹿がたくさんすんでいる。鹿は、大体、わが国のそれと似ているといってよい。ほかに二種の山豚がおり、一種はわが国の山豚と同じようであるが、他の一種は、小豚のようでかわいらしい。

この山豚のことを土人たちは、タニヤスータツーとよんでいる。さらに、何十種あるいは何百種かの雑多な猿がいる。しかし、わたしはこれを三種ぐらいに大別してみる。一種は、土人たちがカイーとよび、わが国ドイツの猿とよく似ているが、他の二種は全く珍奇なものである。その中の一種はアカキーと称し、何百匹何千匹という大群をなし、木から木へと奇妙な鳴き声をたてて渡り歩く。この様は実に壮観である。この大群に森林中で行き当たると、猿に狩り取られそうな気さえする。他の一種はブリキーといい、からだ全体が赤く羊のように長いひげをはやし、わが国の犬ぐらいの大きさである。

第三十一章
タ　ツー

珍しい動物にタツーとよぶのがいる。これはヨーロッパでは見られぬ珍奇な動物である。タツーには大小さまざまのものがあるが、普通体長七十センチメートル、小さいのは三十センチメートルぐらいである。色は白黒まだらなのと、黄色なかぼちゃのようなのがある。このタツーは腹部をのぞいて、他は全部堅い牛の角のような角質で武装されている。そこで、他の動物がタツーを食べようと思って襲いかかっても、全く歯がたたない。

タツーの鼻先は長く伸びていて、尾はかなり長い。この動物は一名あり食いともいい、彼の大好物はありである。タツー肉は美味である。わたしは、土人たちといっしょに、このタツーを捕え、肉を焼きピメンタをつけて食べた。このごちそうは、わたしの捕虜生活中最も上等のものであった。

第三十二章
サルエーやとかげなど

ブラジルの原野にすむ動物の中に、サルエーというのがいる。体長はわが国ドイツの猫より少し大きい。毛色は灰色で

尾の形も猫に似ている。このサルエーは子を六匹生む。興味探いことに腹部に袋を持ち、その中に六匹の子を入れて歩く。わたしは土人たちとともに、このサルエーを何度も捕えたことがある。そのほかにライオンに似た動物がたくさんいる。またカピバーラ（河豚）もいる。これは川べにはえている植物を食べる。物音がすると、カピバーラは川に飛びこみ水中にもぐってしまう。地上でも速く歩きまた走りまわる。このカピバーラには、体長が子牛ぐらいのも見られた。耳は平たく、足は長い。毛色は薄黒く足指は三本に分かれている。肉はちょうど豚肉と同じでおいしい。その他とかげに似た巨大な動物がいる。大きなのになると八メートルぐらいのがいる。その肉はやはりおいしく、何回となくとって食べた。

第三十三章

ツ　ン　ガ

ブラジルには、土人たちがツンガとよんでいるもので、わが国の蚤によく似た小動物がいる。

土人たちの不潔な小屋の中に生息している。そして人間の手足の指の爪の間に入りこみ、肉の中にひそんで成長する気味の悪いものである。

体肉に食い入り、人間が気づかないでいると、えんどう豆ぐらいになる。ツンガはまっ白い袋のような形になる。その袋を掘り出してみると、中に卵がはいっている。掘出した跡は穴がぽつんとあく。わたしはスペイン人たちとこの地にはじめて到着したばかりの時、スペイン人たちがこのツンガに悩まされていたことを記憶している。

第三十四章　ブラジルのこうもり

こうもりは、わが国のそれと形は大体似ていて、やはり黒いが、わが国のよりは三倍ぐらい大きい。

夜になって空中を舞いとぶさまはドイツのと同じである。だが、性質はそれより悪い。とくに人間が寝ているすきを見て、とびかかってきて生き血を吸おうとする。それで十分に注意する必要がある。

また、このこうもりは、どういうわけか、人間が寝ているとその額に止まりたがる。わたしは一度寝ている時に足首にかみつかれ、血を流したことがあった。

第三十五章　蜜蜂

ブラジルには大別して三種の蜜蜂がいる。一種はわが国の普通の蜜蜂と大差はない。次のは黒く大きく蝿のようである。

その次のは最も小さく、ちょうどわが国のブヨのようである。この二種の蜜蜂は、木のほら穴に蜜をたくわえる。わたしは、土人たちとともに何回も山に、この蜜蜂をとりに行った。だが蜂蜜の中でもいちばん美味なのは小さい蜂のものであった。

第三十六章　鳥類

ブラジルには、何千あるいは何万種の珍鳥がすんでいる。わたしが最も美しいと思ったのは、グウアラーピランガという小鳥であった。その大きさは普通の鶏ぐらいであり、くちばしは長く両足も長い。この鳥の珍しがられるのは羽毛のもつ特色である。雛のころはうすい灰色であるが成長すると灰褐色になる。それから約一か年ぐらいすると、今度は真紅となる。この真紅の羽毛は土人たちに珍重せられ、この羽毛の争奪で、トピナンバーとトピニンキンの二種族が戦いを起こしたほどである。

第三十七章　珍木、ジエニパポ

土人たちがジエニパポ・イバーとよんでいる珍木がある。その実は美しく、ちょうどわが国の林檎にそっくりである。彼らは、そのよく熟れた実をすりつぶして果汁を採る。この液

で土人たちは化粧するのであるが、この液はまことに奇妙な力を持っている。半透明なこのしるを顔にぬると、最初は普通の水を顔につけたのと変わりはないが、十分間もすると、さながら墨をぬったように黒色となる。黒色になってから九日間ぐらいは、そのままの色であるが、その間洗い落とそうとしても、むだである。絶対に落ちないのである。だがおもしろいことに、九日後になると黒い色は消えて、元の半透明の水にかえるのである。

これは何か化学作用のためなのであろうが、残念ながらわたしには、どんな理由でこのような変化を起こすのか、ついにわからなかった。

第三十八章

ピメンタおよび綿花

棉は、約一メートル半ぐらいの高さの木となり、多くの小枝をもつ。やがて花が咲き、それが実となる。実が熟すると割れてまっ白な綿がふき出るのである。

ピメンタ（唐がらし・胡椒）には大体二種類がある。前者は黄色で、後者は赤色である。この二種の木はよく似ていて、最初青い果実であるが、熟して黄に、また赤に変色する。実はあまり大きいものではない。わが国のバラの実ぐらいの大きさである。その木は約一メートル三十センチぐらいの高さとなる。

ピメンタの葉は小さく細い。その実は枝にぎっしりとつく。ピメンタの味はひりひりと特殊な刺激性をもち、食欲をそそる。ヨーロッパでは非常に高価に取り引きされている。土人たちは、この実がまっ赤にまたはまっ黄色に熟すると、採集して日光にかわかす。

また、この二種とは別に、もっと小さいピメンタがある。その特徴は、前二種と同じようなものである。

そのほかに、わたしが珍しいと思ったのは、土人たちがヂエテイカとよんでいる芋の一種である。彼らは、そのいもを細かく切って適当な間隔をおいて植える。すると、そのいも

の部分から根がはえ、芽が出て木となる。その根元にはたくさんのいもを生じる。

わたしは土人たちとともに、このジエテイカを食べたが、その味はさつまいもとも、じやがいもとも異なっていて、たいへん美味であった。

結　言

わたしが、最も尊敬する読者の皆様、わたしは、これまで、簡単ではあるが、わたしが身をもって直接経験した旅行記を、たどたどしい文章でつづってきた。

それはほかでもない、神イエス・キリストがこの罪深いわたくしを子としていつくしみ、狂暴な食人種の中より救助し給うた。この事実を認めるため、とうといページをさいたのである。

キリストがこの世にあらわれてより、一千五百余年の今日もなおおわしまして、わたしたち信者の生命を守護し給うのである。

神はいみじくも、次のようにのたもうた。

「汝もし不幸にあいし時、われを呼べ、しからば直ちに汝を救わん。しかして汝われをたたうべし」と。

読者諸賢の中には、このわたしの記録のような単純な内容

ではなく、もっと豊かなブラジル見聞記を欲している方も多いと思う。

実は、わたくしも、このような小冊子ではなく、これに十倍する物語を書くだけの体験をもっているつもりである。

だが、わたしが、このような小冊子を世に出すことを決意したのは、ほかではない。わたしたちがこの世に生をうけてから現在に至るまで、いかに多く神の恩恵を受けるものであるか、ということを、諸氏に心から知ってもらいたく思ったからである。

これまで、わたしの述べてきたことは、実は奇妙な物語であるかも知れない。だがわたしにとっては、赤裸々な体験記録なのである。わたしは、これらの章の中で、捕虜として土人部落に生存した期間中の事をしるした箇所を読むとき、いまさらながら恐れを感ずる。

食人種の中に捕われの身となって、生きのびること十数か月間、この間の悩み苦しみは、十年間にもまさる悩み苦しみであった。このような苦難を、かの地に旅行する者が、すべて味わねばならぬかどうかは、何ともいうことができない。しかし、フランス人、ポルトガル人、あるいはスペイン人など、かの地に旅した者たちは、わたしのこの数少ない体験のすべてが真実であることを認めるだろう。

しかし、まだ南米を知らない人々には、神のみぞ知るである。

わたしの最初の第一回のブラジル旅行は、ペンテアード隊長の率いるポルトガル船であり、同航海者の中には、わたしをもこめて三人のドイツ人が乗り組んでいた。一人はブレーメン出身のエンリッケ・ブラントで、いま一人はジョンというブルッシャウゼン出身の男であった。

第二回目の旅は、スペイン船団にぞくして渡航した。隊長はスペイン人のデイオーゴ・サナブリアであって、ドイツ人はわたし一人であった。

同船団の渡航目的地はリオ・ダ・プラッタであった。前述したように、この航海は実に長期にわたり、約二か年間を要した。最後にはついに、サンビセンテ沖で難破し、われわれ乗組員一同は全部漂流したのであった。

そのサンビセンテはポルトガル人たちの部落であった。この部落で、わたしは同国人のエッスウスの子に会った。彼は同胞のよしみで、わたしを兄弟のように厚遇してくれたことを忘れることはできない。

やはり、その部落にいたアントエルピアの商人ブシットスとペードロの両人は、わたしが土人に捕えられたことをくわしく知っている。なお、そのほかに、わたしのことを知っているのは、フランス、ノルマンヂーの水夫らである。ベテビール生まれの隊長ギレルメ・デ・モーネルのほか、パイロットのフランシスコ、通訳のペロッテ、これら人情のあつい人た

ちは、神とともにわたしを助けてくれた人々であり、わたしをよく知っている。
わたしを食人種の中から救助してくれたばかりでなく、フランスに到着して後も、ドイツに入国するための旅行証明書を取得してくれたり、わたしの服装から旅費までに心を配ってくれた。
この親切は忘れられない。
これらの人々が、わたしの書いたこの漂流記録の真実性に対する証人である。

わたしはフランスのデイッペを去り、ロンドンに渡った。そこで、わたしはオランダ株式取引所の通信員と懇意となった。彼はわざわざ、わたしを招待して、心よりもてなしてくれた。そればかりか、旅費まで与えられたので、祖国ドイツに帰国することができたのである。
ドイツ青年諸君よ、
もし、この書を読んだ青年諸君の中に、この小冊子の内容だけではあき足らず、もっと詳しく新大陸南米ブラジルを知りたいと思うならば、大洋を乗り越えてかの地に行くことをすすめる。
神と共に行くならば、その運命は自ら開けるであろう。
この世界は、すべての者のために開かれている。無限の知恵を持つ神、すべてのすべてを兼ねそなえて居給う神よ。永

遠に栄えあれ。

（終り）

原著名
HANS STADEN-DUAS VIAGENS AO BRASIL
著者名
HANS STADEN
（ハンスターデン）
出版年
1942年
出版者
ハンスターデンドイツ文化協会
翻訳権所有者　西原亨

蛮界抑留記　—原始ブラジル漂流記録—

昭和36年7月25日　印刷
昭和36年7月30日　発行

著作権所有者　西原亨

発行者　株式会社 帝国書院
代表者 守屋紀美雄
東京都千代田区神田神保町3～29

発行所　東京都千代田区神田神保町3～29　株式会社 帝国書院

定価 ¥350